魔法先生ネギま！？　～願い事は叶えられますか？

綺羅 夢居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま!?　～願い事は叶えられますか？

【Ｎコード】
Ｎ３０７３Ｙ

【作者名】
綺羅　夢居

【あらすじ】
これはネギまの世界で生きることになった主人公と同じようにネギまの世界で生きることになったオリキャラ達の話しです。
（注意）原作キャラに対するアンチ表現があります。原作ブレイクもします。
それが許容できない方はお戻りください。

プロローグ（前書き）

始めまして、綺羅　夢居といいます。

自分は就活生ですが、急に投稿したくなり、書き始めました。

どうかよろしくお願いします。

プロローグ

目が覚めたらそこは知らない部屋だった。

とりあえず事態が呑み込めないので起き上がろうとすると両腕に違和感があった。

まず自分の左腕を見ると点滴の針が刺さっており、右腕には包帯が巻かれていた。

この時始めて鼻を衝くような薬品の匂いを自分の姿の着ている病人服を見てここが病院だとわかった。

（どうしてケガしてるんだ？）

昨日はバイトが終わったあとは家帰りシャワーを浴びてすぐに寝たはずだった。

それなのになぜ自分は病院にいるのだろう、そして気がついたことがもう一つ、

（身体が幼い……？）

そう身体が幼いのだ。自分の身体が明らかに縮んでおり、腕も柔らかく、大人のような筋張った腕ではない。

全く事情が呑み込めないのでとりあえずナースコールを押すことにした。

ナースコールをすぐに看護師さんと担当医であろう人がやってきた。

担当医はまず身体に異変はないかと聞いてきたので身体が少し痛いですと答えた。

すると担当医は全身に軽い打ち身と少し擦り傷があると教えてくれた。

それから担当医は次々と質問をなげかけてきた。

「自分の名前は言えるかな?」

「司条(しじょう)　涼(すずみ)です」

「うん、よく言えたね。じゃあ歳はいくつかな?」

名前はこれで良いらしい、ただ身元がわからないだけかもしれないが。

そして年齢を聞かれる。恐らくだが正直に答えるとマズいように思う。

少し黙っていると、急にガラッという音とともに病室の扉が開く。

そちらの方に目を向けるとそこにはメガネをかけた男性が立っていた。

「すみません、司条涼くんが目を覚ましたと聞いて来ました」

どうやら、自分の関係者らしいが記憶を探しても男性のような知り合いはいない。

担当医が男性に近づくといくつか言葉を交わし、看護師とともに病室を出て行った。

男性は自分に近づくといくつか声をかけてくる

「よかった、ケガはそれ程酷くはないようだね」

「あの、」

「ん？どうしたんだい？」

「誰、ですか？」

俺がそう言うと男性は少し焦ったように問い掛けてきた。

「ぼ、僕のことを覚えてないのかい」

「はい」

恐らく親などではないのだろう。

「えと、司条涼くんは名前は覚えているよね？」

「はい」

「なら、どうして入院しているのかわかるかな？」

「……ごめんなさい、わかりません。あのどうしてですか？」

なぜ入院しているのかわからないので正直に答え、理由を聞く。

すると男性は少し気まずそうにしながらも教えてくれる。

「君は事故に巻き込まれたんだよ」

「事故、ですか？」

「ああ、その様子だと事故の時のことは覚えてないみたいだね、僕のことも覚えてないかい？」

「……すいません」

「いや、謝る必要はないよ、ただ後でちゃんと検査を受けよう」

「はい」

「それじゃあ、また明日来るからね」

男性はそう言葉を残すと病室から出て行った。それと入れ替わりでまた担当医が入ってきた。

この日は一日中検査と担当医からされる質問に答えた。

検査の結果、身体に異常はないが事故の影響から名前以外の記憶が

なくなっているという結果がでた。

当然のことながら、事故より前に何があったかなどわかるわけもない。

そしてそのまま入院生活は過ぎていった。

俺が目覚めた日に来た男性は毎日ではないが結構な頻度で顔を出し、ずっと俺と会話をする。

男性との会話でわかったことは、

まず俺の年齢が5歳であること、

この入院のきっかけとなった事故で俺の両親が亡くなったこと、

ここが麻帆良という地名だということ、

男性の名前が明石というらしいこと、

この明石さんは夫婦そろって両親と友人だったということ、

明石さんにはゆーなという娘がいるということだった。

そう、この時点で気づいたことであるが麻帆良、明石、ゆーな、少なくとも俺はこのワードが関連するものに覚えがあった。

「ネギまの世界か～」

本格的にそうだと言える証拠は現段階では無いが、恐らくそうなん

だろうなというのは、勘が告げていた。

ケガが治り退院した後、明石さんを連れて家に帰る。

とは言っても自分は家の場所を知らないのだから、正確に言うと明石さんに家に連れて行って貰っている。

遺産などの管理や手続きは明石さんがやってくれたらしい。

本当に明石さんには感謝するしかない。

家に到着すると、明石さんが何か思い出せたことはないか聞いてきたが、元々ここでの記憶はないので否定しておいた。

家の中を隈無く捜索する。

すると恐らく書斎なのだろう本棚が壁一面にある部屋を発見した。

部屋の中に入り本棚に近づくと明石さんも部屋に入ってきた。

それを無視してうっすらと埃が積もっている本棚から少し厚みのある本を抜き取る。その本にはこう書かれていた。

“西洋魔法の性質と運用方法”

「魔法か」

手に取った本と俺の言葉を聞いたであろう明石さんが口を開いた。

「君のお父さんとお母さんはね魔法使いだったんだよ」

“魔法使い”

ネギまにおいて、原作を構成するための要素であり、役割である。

未来人にして火星人の超鈴音曰わく魔法世界には六千七百万人いるらしい、つまり世界人口の百人に一人が魔法使いということになる。

旧世界と呼ばれるこちら側に魔法使いが全員いるというわけではないだろうからこの計算が正しいのかわからないが。

それに魔法使いと言ってもあくまで全員が魔法を使えるわけではなく関係者だけということも考えられる。

しかし、ネギまの原作において魔法に関わるということは、基本的に戦闘行為に関わることを意味する。

魔法学校において一桁の年齢の子どもに攻撃魔法を教えるのだ。

基礎教育に攻撃手段が入っているあたり、魔法使いという存在はどれほどの危ないのかがわかる。

攻撃手段を保有するということは、魔法使いが戦力として数えられることを意味するし、

逆に攻撃手段を持たないといけないということも意味している。

「明石さん」

「なんだい？」

「俺も魔法使いになれますか？」

しかし魔法使いなのだ。

もし自分が魔法を使える可能性があるなら、殆どの人間が魔法を使えるなりたいと思うだろう。

それにこの世界がネギまの世界であったなら、やはり戦闘能力は欲しい。

たとえネギまの世界じゃなかったとしても、魔法を扱えることで選択肢が増えるならそれもアリだと思う。

確かに危険は増すが、もし魔法を覚えずに抵抗ができなくて死んで後悔するぐらいなら、魔法を覚えて抵抗して死ぬほうがマシだ。

「うん、なれるよ。僕もできる限り力になろう」

こうして俺の異世界ライフは始まった

第1話　家族は大事です（前書き）

文字数が少なく感じる、できれば４０００から５０００文字くらいはほしい

第1話　家族は大事です

幸いなことに明石さんはすぐに許可を出してくれた。元々俺が言い出せば聞き入れようと考えていたらしい。

明石さんに魔法使いになりたいという宣言をしたあとに自分の部屋に行き荷造りをする。

流石に一人でこの家に住むというわけにはいかないだろう。

ということで明石さんの家で暮らすことになった。

「今日からうちで暮らすことになった司条涼くんだ」

「えと、よろしくお願いします」

これからお世話になるのでキチンと頭を下げて、目の前にいる女性と女の子に挨拶をする。

「よろしくね涼くん、私は夕子よ。気軽に夕子さんって呼んでね♪
ほらっ！ゆーなも挨拶しなさい」

「あかしゆーなでーすっ！よろしくね、すずみくんっ！」

やはり、親子だからだろう。二人とも雰囲気がよく似ている。

「じゃあ涼くんの退院おめでとうとようこそ明石家にのパーティーをするわよ！」

そう言って夕子さんがダイニングに案内してくれた。

すると、もうすでに食卓には色鮮やかな様々な料理が所狭しとと並んでいた。

「涼くんが退院って聞いて張り切って作ったのよ♪いっぱい食べてね♪」

夕子さんが笑顔で言ってくれた。この人は自分が一人増えることの負担なんてなんとも思ってないようだ。

普通だったら、いくら友人の子どもであってもここまでしてくれるはずはない。

それなのに、明石さんも夕子さんも笑顔で自分を迎えてくれた。

裕奈ちゃんはまだ幼いので、ずっとニコニコしているんだけど、

「ありがとうございます」

「涼くん！」

ここまでして貰ったのだから素直にお礼をいうと、夕子さんは少し叱るように言ってくる。

「涼くんは今日から一緒に家で暮らすんだから、そんな堅苦しくしないでいいのよ。だって家族なんだから」

こう言ってくれた以上は遠慮なくとまではいかなくても、少し崩させてもらおう。

「うんっ！、ありがとう夕子さん」

……まあ、口調は作るんだけどね

すると、今まで黙っていた裕奈ちゃんがガマンできなかったのだろうか割って入ってきた

「おかーさんばかりズルい！！わたしもすずみくんとおしゃべりしたい！！」

「ハイハイ裕奈、それよりせっかくのご飯が冷めるから座ろうか」

明石さんが裕奈ちゃんを宥めると全員で椅子に座る。

席は俺の隣に裕奈ちゃん、向かい側には明石さん、その隣に夕子さんが座るという形だ。

ちなみに裕奈ちゃんは俺の隣は譲らなかった。

たぶん、話しをするのに近いほうがよかったのだろう。

「じゃあ、涼くんの退院と新しい家族が増えたことにかんぱーいっ！！！」

「かんぱーいっ！！！」

乾杯が終わり、目の前にある唐揚げやサラダに手をつける。

唐揚げは皮がパリッとしていて、中のお肉にもしっかり下味がついており、サラダもちゃんと湯通ししてあるのだろう、レタスがシャキシャキで両方ともとても美味しい。

「美味しい！」

「そう？そう言ってもらえると夕子さん頑張ったかいがあったわ～」

夕子さんは俺に料理を褒めて貰えて嬉しそうだ。やはり身内以外に褒められると嬉しいのだろう。

「ねえ～ねぇ、すずみくん？」

「なに裕奈ちゃん？」

「むぅ～」

裕奈ちゃんに呼びかけられたので隣を向いてみると、裕奈ちゃんは頬を膨らませ剥くれていた。

「ゆーな」

「裕奈ちゃん？」

「ゆーなってよんでっ！！」

どうやらちゃん付けでよんでいたのがお気に召さなかったようだ。

「うん、わかったよ裕奈」

「うんっ！」

このやりとりを明石さんは微笑ましくみているが、夕子さんはニヤニヤとみていた。

……絶対楽しんでいるんだろうなぁ

食事は終始このように楽しく過ぎていった。

食事が終わると部屋に案内された。

「ここが君の部屋だよ」

部屋は割とシンプルでベッドとクローゼット、あとは勉強机と　大きめの本棚があった。

床には、自分の家で纏めたダンボールが置いてあった。すでに運んでくれてあったらしい。

ダンボールの中には服よりも魔法関係の本が多く入っているが、

「荷物の片付けは明日一緒にやるとして、今日はもう疲れただろうからお風呂に入ろうか」

明石さんがそう言ってくれたので、着替えをバッグから取り出して、お風呂場の方へ移動した。

脱衣場で服を脱ぎ明石さんの方をふと見てみる。

明石さんの身体はインドア系の人間にもかかわらず、割と引き締まっていた。

メタボな中年男性が増えているなか三十代にしては見事な身体つきだろう。

それとも、魔法先生としての仕事が忙しくて痩せているのか……

魔法関係者ということで傷痕みたいなものがあるのかと思ったがそうでもなかった。

お風呂に入ったあとは部屋に戻り、すぐに寝ようかと思ったが　荷物を少し片付けることにした。

明日手伝ってくれるみたいだが、やはり自分のことは自分でやっておきたい。

衣服をクローゼットの中にしまう。といっても、服自体何十着もあるわけではなく上下十着程度だし、子供服なのでそこまでスペースをとらなかった。

そして、ダンボールに詰められた本を本棚に移していく。

本は自分の家の書斎にあったものの一部で、魔法入門書や初心者用の魔導書や西洋魔法の種類別の魔法辞典シリーズ本など、厚いもの

や薄いもの、大きい図鑑サイズのものや文庫本サイズのものなど様々だ。

明石さん曰わく、既に絶版になっていて希少価値の高い本もあるらしい。

子どもの身体では大きい本や本棚の上の棚には置けないので、軽い本を下から入れていく。

ある程度、自分に入れられる本を入れた時だった。

手にとった本は表紙に何も書かれておらず、本全体が真っ白で買ったばかりの新品のようにキレイだった。

本の中身が気になったので開いてみると、中には写真が挟まれていた。

どうやら、自分と両親の写真のようだ。

写真の中の両親は、自分の知る両親と同じ顔をしている。

その瞬間、胸が苦しくなり悲しみが込み上げてくる。

向こうにいた時は、親は元気だった。

でも、こちらではもう親に会うことはできないのだ。

そう考えると、目から一粒の涙が零れ落ちた。

……ごめんなさい、あなた達の子どもはあなた達に何もしてあげる

ことができませんでした。

写真を机の上に置き、改めて本の中身を見ると、これは本ではなく文庫本サイズのメモ帳であった。

中には様々な魔法の術式とそれがどのようなモノなのかを書いてあった。

高位の治療魔法や最上位クラスの攻撃魔法などが書かれているのを見ると両親のどちらかが使用していたのだろう。

キレイ過ぎるのが気になったがどうやら魔法をかけているようだ。

まさか、ナギ・スプリングフィールドと同じことをしているとは。

本は左上のほうに穴が開いてあり、どうやらここにチェーンなどを通して落ちないようにしていたようだ。

……これは、自分で持ち歩けるようにしておこう。

そう思い、本を机の上に置く。

「はあ、もう疲れたから寝よう」

こうして、明石家での初日は過ぎていった。

第1話　家族は大事です（後書き）

誤字脱字の報告や感想をお待ちしています

第2話　できることをやりたいです

明石家に暮らし始めてから二週間が過ぎた。

まだ五才ということもあり、昼間は麻帆良のなかにある幼稚園に通っている。

幼稚園が終わると明石さんと夕子さんから魔法を教えてもらう。

「じゃあもう一回“火よ灯れ”をやってごらん」

「はい！プラクテ・ビギナル　“火よ灯れ”」

初心者用の杖を円を描くように振る。すれと杖の先から火が出た。

明石家に住み始めてから、魔法の練習をしてみてどうやら普通の魔法使いレベルよりはすこし才能はあるらしい。

明石さん曰わく

「涼くんは魔法を習得するのがは他の魔法使いより早いみたいだね」

とのことだ。“火よ灯れ”も普通であれば何百回も練習しないとできないらしいが、

俺は三十四回目で完全に成功した。

といっても、習得するのが他人より少し早いだけで保有している魔力量については教えてくれなかった。

「すずみくんスゴーイ！おとーさんおとーさん、わたしにもやらせて！！」

それとここには裕奈がいる。明石さんに俺が魔法を学び始めた頃から裕奈も魔法を学んでいる。

とはいっても裕奈はこれを遊びか何かだと思っているらしく、魔法もおもちゃと同じぐらいの扱いだ。

「よ～しっ、ぷらくて・びきなる　“あ～るですかっと”」

裕奈が勢いよく杖を振ると、ボッと音をあげて火が灯った。

「やった～～！！できた～～！！できたよおとーさん！、すずみくん！！」

「おおっ！スゴいぞゆーな！！」

「うんっ！裕奈スゴい」

裕奈はこの日が魔法を覚えて三日だった。しかも魔法の練習は一日一時間しか行っていないのだ。

「まさか“火よ灯れ”がこんなに早くできるようになるなんて……」

明石さんも驚くほど早かったらしい。

裕奈には魔法使いとしての才能がある。それは良い事なのか悪いことなのかはわからない。

でも、俺にとって裕奈は大切な家族だから守ろうと思う。

魔法の練習が終わって家に到着すると夕子さんが夕食を作っていた。

「あっ、おかえりーっ！三人ともお疲れ様ね、もうすぐでご飯ができるから、手をあらってきなさい」

手を洗い、椅子に座る。するとテーブルの上に料理が並ぶ。

「じゃあ、頂きます」

「「「いただきます」」」

手を合わせて食事にはいる。これがいつもの光景だ。

最近食事をしていると裕奈があ～んをしてくる。

仕方ないのでそれに付き合いお箸に挟んであるプチトマトを食べた、そしてお返しにハンバーグをあ～んをしてやる。

それを正面にいる大人二人はニヤニヤしながら見ている。

「そういえば、今日はどうだったの？」

どうだったというのは魔法のことだろう。

「ああ、順調だよ。それと今日ゆーなが始めて“火よ灯れ”を成功させた」

明石さんがそう言うと夕子さんは驚く。夕子さんは裕奈の方に向くと

「ゆーな、今日杖から火を出せたの！スゴいわね！！」

「うんっ！、つえがぴかーってひかってひがでたよ～」

夕子さんも裕奈もうれしそうにしている。

すると夕子さんは裕奈のほうをジッと見て

「ねえ、ゆーな？涼くんのこと好き？」

「げほっ、ごほっ」

「あらあなた、汚いわよ」

夕子さんはいきなり裕奈に向かって屈託もない笑顔で聞いていた。

明石さんは飲んでいたお茶を吹き出した。

「すずみくん？　だいすきだよ～！！」

「そう、なら涼くんは？」

裕奈は無邪気な笑顔で答えた。子どもに言われたことなのに妙に気恥ずかしい。

「俺も裕奈のこと大好きです」

俺も嘘偽りなく答える。当然だ、嘘を吐く理由もないしこの元気で明るい裕奈のことは大好きなのだ。

「ふんふん、なるほどなるほど」

夕子さんは俺たちの答えに満足したのか、なにやら納得した表情を浮かべていた。

「いやいや夕子さんっ、二人にはまだ早いんじゃないかな!?」

明石さんがなにやら焦ったように夕子さんに詰め寄る。

「いや～、せっかくだしどうせなら涼くんがいいかな～って」

「それでも、パクティオーはまだ早いよっ！」

“仮契約（パクティオー）”

なるほどどうやらこの事で夕子さんはさっきの質問を俺たちにしたんだろう。そうであれば納得だった。

どうやら夕子さんは裕奈と俺に“パクティオー”をさせたいらしい。

それを明石さんが止めているようだ。

「う～ん、やっぱりダメか～」

いつの間にか明石さん達の話しは終わっていた。

どうやら今回は夕子さんが折れたようだ。少し残念そうにしている。

「ねえ、パクティオーってなに??」

裕奈は気になっていたのだろうパクティオーについて夕子さんに聞く。

「好きな人と将来結婚できるおまじないよ」

夕子さんは裕奈にパクティオーについて教える。その顔は何か企んでいる顔だった。

「じゃあ、パクティオーしたらすずみくんとけっこんすることができるのー?」

「ええ、そうよ。ゆーなは涼くんと結婚する?」

「うんっ!、わたしすずみくんとけっこんする~!!」

夕子さんは裕奈の言葉に笑みを深めていた。

裕奈の言葉は所詮子どものころの他愛ない気持ちに過ぎない。

大人になるにつれて、いろいろな人を好きになり、子どものころの約束なんて忘れてしまう。

「俺も裕奈と結婚したいな」

当然、俺も裕奈の言葉に乗って言ってみる。

俺の言葉に夕子さんはますます笑顔になっていく。

こうして食事は進んでいった。

結局、パクティオーはしなかった。

明石さんが止めたというのと、パクティオーをする事でゆーなが魔法使いへの道に捕らわれたりしないようにするためだ。

魔法使いになるとまず魔法ありきで考えてしまう。それを防ぎたかったのだろう。

個人的には少し残念なことであるが仕方ない。

俺は部屋のベッドに寝転がると原作について思い出す。その内容は夕子さんの死亡時期だ。

夕子さんが死ぬのが裕奈が五歳のときだから、あと一年以内、早ければ数ヶ月、いや数週間かもしれない。

どうやって助ける？　どうやって助ければいい！？

見捨てるなんて選択肢はない。

両親をなくした俺にとって明石家のみんなは大切な家族なのだ。

魔法世界に行くんなら、それを止めることはできないか？

……無理だ、そんな子どものワガママで仕事を止めるわけにはいかないだろう

誰かに頼む

……これこそ無理だ、そもそも頼れる知り合いのいない

なら、夕子さんに気をつけるように注意を促すか

……しかし夕子さんもプロだ。子どもに言われるまでもなく、警戒しているはずだ。その結果が死亡なのだ。

なら、最後の手段、

“自分が異世界の存在だとバラす”

……これしかない、

たとえこれを話すことでみんなと離れることになってもよかった。

この手段をとることで、もしかしたら実験台にさせられるかもしれないし、記憶を消されて自分という個我がなくなってもよかった。

いや、本当は怖い。

でも、両親をなくした今、自分を大切にしてくれた家族のためにできることをやりたかった。

ベッドから起き上がり、時計を見るとまだ十一時だった。

この時間なら裕奈は寝ているので都合がよい。

部屋からでると明石さんの部屋へ向かう、おそらく部屋で仕事をしているはずだ。

部屋の前に着くと呼吸を整える。やっぱり秘密を話すことへの恐れはある。

恐い、怖い、コワい。

せっかく仲良くなった人達に拒絶されるのが恐い。せっかく好きになった人達に嫌われるのが怖い。

……でも、このまま過ごしていたら夕子さんが死んでしまうかもしれない。

もう一度、ゆっくりと深呼吸をする。

ここで後悔はしたくないと覚悟を決めて、扉をノックした。

「入っていいよ～」

「失礼します」

部屋の中に入ると、そこにはたくさんの本が積み重なっている。その部屋のちょうど真ん中の机で明石さんは書類仕事をしているようだった。

「涼くん？どうしたんだい、こんなよる遅くに？もう遅いから寝ないといけないよ」

明石さんは俺がこんな時間にやってきたことに疑問を持つものの、子どもなので早く寝るように俺に促した。

「あの、大事なお話しがあります。夕子さんも一緒に話したいのですがよろしいですか？」

明石さんは俺の口調と真剣な雰囲気を感じ取ったのか、すぐに真剣な表情になった。

「わかった、すぐに呼ぶから待っててくれるかな」

明石さんはそう言うと軽く目を閉じた。どうやら念話で夕子さんを呼んでいるようだ。

数分すると夕子さんが部屋の中に入ってきた。その手にはお盆がありマグカップが三つ乗っている。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「それで大事な話しって？」

夕子さんから差し出されたマグカップを受け取り、中に注がれているホットミルクに口をつける。

「はい、俺のことについてです」

こうして長い夜が始まった。

第2話　できることをやりたいです（後書き）

感想をお待ちしています

第3話　カミングアウトって恥ずかしいよね？

現在、部屋の中は静まり返っている。その静さが今の俺には辛い。

「秘密……ね、わかった。君にどんな秘密があるのかを教えて貰おうか」

明石さんが真っ直ぐに俺の目を見てくる。俺は真っ直ぐとその目を見ながら、全てを語りは始めた。

「まず、始めに俺はこの世界での記憶がありません」

「君に記憶がないのは知っているが、この世界での……とは？」

「まさか、自分には他の世界での記憶があるというような言い方ね」

二人は訝しげな目で俺を見ている。

「ええ、その通りです。俺には別の世界での自分の記憶があります」

「嘘……は言っていないようね」

「……信じて貰えるんですか、わりと荒唐無稽なこと言ってるつもりなんですけど？」

俺は二人が意外とあっさりと自分の言葉を受け入れたことに驚く。

「簡単なことだよ、魔法の中にはその言葉がホントかどうか見抜く魔法もある」

「それに涼くんが、わざわざ私達を集めてまで嘘をつく理由もないわ」

なるほど、すっかり忘れていたが、ネギがタカミチに対して使っていた、人の思考を読む魔法か……なら話しは早い

「ではお話しします。僕の記憶のある世界では、一冊の漫画が売られていました。
その漫画のタイトルが“魔法先生ネギま！”です」

「魔法先生？」

「ネギま？」

二人は何故いきなり漫画について話し出したのか疑問のようだが、俺の真剣な表情で話しているのを見て、大人しく話しを聞いてくれている。

「はい、その漫画の主人公は大戦の英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子です」

「……ちなみにその子の名前は？」

「ネギ・スプリングフィールドです。一九九四年生まれで裕奈より五つから六つ下になります」

「なら、そろそろ生まれてくるのかな？」

「はい、」

明石さんは気になるのだろう。会話途中に質問を挟んでくる。

「続けます。物語は二〇〇三年二月、ネギ・スプリングフィールドが魔法学校を卒業した時から始まります」そして、俺はネギまのシナリオを話し出した。

ネギ・スプリングフィールドが修行としてこの地、麻帆良で教師をやることになったこと。

そのクラスには、中学二年生となった裕奈や関西呪術協会の長である近衛詠春の娘などがいること。

麻帆良に到着したその日に魔法をバラしてしまうこと。

正式な教員となるために担当したクラスを期末テストで最下位から脱出させること。

闇の福音エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルと戦うこと

修学旅行で京都に行き、親書を西の長に渡すこと。

その際、妨害にあい、サウザンド・マスターが過去に封印したリョウメンスクナノカミと戦うことになり、最終的にエヴァンジェリンに助けられること。

そして、ネギ自身が石化し、それを西の長の娘である近衛木乃香とパクティオーすること。

学園祭のときに開かれる武道祭でアルビレオ・イマのアーティファクトによって父親と戦うこと。

学園祭最終日、ネギの子孫である未来人によって全世界に魔法がバレるのを防いだこと。

魔法世界に行き、そこで拳闘大会に出場し、千の刃ジャック・ラカンと戦うこと

……そして、魔法世界の真実と決戦。

俺は自分が覚えている限りを全て話した。そして夢見の魔法を使い記憶にある三十六巻までの全てを二人に見せる。

そのなかには夕子さんが死んでいるというシーンも当然ある。

「ふう、なるほど……」

「なるほどね……」

長い時間、話していたので三人とも一息ついた。

すでに話し始めてから、一時間が経っていた。マグカップに注いであるホットミルクもすでに冷めている。

二人も夢見の魔法の中で見たネギまの原作に戸惑いを隠せないようだ。

「涼くん、君に聞きたいことがいくつかある…」

「……はい」

「なぜ、君はこれを私達に話したんだい？正直隠しておいてもよかったはずだ」

「そうね、これを話すことであなたは私達に本物かどうか疑われる可能性もあったし、私達に信じて貰えない可能性もあった、もしかしたらあなたを異端として排除したかもしれない」

「……それでも、夕子さんには死んで欲しくなかったんです」

俺は自分の想いを二人に告げる。

「元いた世界の家族にはもう会えません。この世界にいた両親はもう死んでいます」

ぽつりぽつりと口から言葉が紡がれていく。それはもはや懺悔に近かった。

「だから、もう家族を失いたくなかったんです、ただこの程度のことで家族を助けられるなら、何もしないで後悔はしたくないから」

本音を語るのが辛い……、嘘を言っているわけでもなく、言葉にやましいことを言っているわけでもないのに、ただ辛かった。

二人が示唆している可能性は当然考えついた。だからこそ言葉にされると余計に怖くなる。

「それに家族ですから、二人のことを信じてますから」

そう言った瞬間に夕子さんに抱きしめられた。

「ありがとう、そう言ってくれて嬉しいわ」

「うん安心してくれ、僕たちは涼くんを嫌ったりしないよ」

「でも、今まで隠してきたし、年齢も実際はもっと上なんですよ！？」

そう、俺は二人に黙っていたのだ。年齢のことも記憶のことも、もっと早く言うことができたのだ。

「そんなの関係ないよ」

「そうね、そんなの関係ないわよ」

――だって、家族なんだから

二人の優しさがとても嬉しい。だから……

「ありがとうございます」

ここで感動のままで進めばよかった。

しかし、物語はこのままでは終わらない。

「実はね涼くん、君から見せて貰った記憶は現実では少し違っているんだ」

既に原作と違っている可能性、それについては考えていた。

「まず、大きく違っている所だけどね“紅き翼”にはあと二人メンバーがいた」

「二人“いた”ですか？」

「うん、二人いたんだ」

明石さんから知識との差異について明石さんがわかる範囲で教えてくれた。

まず第一に“紅き翼”には俺の知らないメンバーが二人いた。

一人はナギと同い年で、ナギと同じように膨大な魔力をもった魔法使いだったらしいが“墓守りの宮殿”での闘いで死んでしまったらしい。

そしてもう一人はタカミチと同い年で、タカミチやクルトとは違い魔法を使って戦う、魔法使いらしい魔法使いであるらしい。

そしてどうやらその人物はここ麻帆良にいるとのこと。

「会ってみたいかい？」

「はい、もしかしたら俺と同じイレギュラー（知識持ち）かもしれませんから」

「なら、早く会えるように彼に頼んでみるよ」

「よろしくお願いします」

自分と同じイレギュラーな存在。気にならないといったら嘘になる。

「じゃあ今日はもう遅いから寝ましょう、涼くんも私のために話してくれてありがとね」

「うん、そうだね、それと涼くん？」

「なんでしょうか？」

「君はいったい幾つなんだい？」

「記憶にある限りでは二十歳です。一応、大学に通ってました」

明石さんはさっきまでの話しで出てこなかった、俺のことがしりたかったようなので素直に答えておく。

「なるほど、今日は話してくれてありがとう、おやすみなさい」

「はい、二人ともおやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい」

明石さんの部屋を出て自分の部屋に戻るとボフッとベッドにダイブする。

二人が信じてくれてよかった……

いや、夢見の魔法や思考を読める魔法があるから信じてくれる可能性は高かったのだろう。

それでも、もし受け入れてくれなかったら、と思うとゾッとする。

ただ、伝えられたという安心感や話しをしていた時の精神的な疲労、そして夜遅いという眠気から、すぐに眠りにつくことができた。

◇

「どう思う？」

「さっきの話しのこと？」

涼くんが出て行ったあと先ほどまでの話しについてゆーこさんに意見をきいた。

正直、いきなり過ぎて頭がこんがらがっている。

「あの知識なら、信憑性は高いんじゃないかしら、私にメガロへの出張依頼が来ているの知っているでしょ？」

そう、ゆーこさんには二ヵ月後にメガロへの出張依頼が来ていた。

「もちろん知っているよ、それでどうするつもりだい？」

そう、依頼を請ければ自分が死ぬ可能性がある、しかし依頼を断れば自分以外の誰かが死ぬかもしれないのだ。

「そうね、でも期限はまだ先だし、まずは涼くんと彼を会わせてから考えるわ」

「よかった、君が行くって言ったら僕は命がけで止めたかもしれない」

「まだ、時間もあるからね、それに私もゆーなたちを残して死ねないわ」

そう言ってくれたことに安心する。いくら危険なことがわかってこの仕事をやっているとはいえ、今回のように死ぬのがほぼ確定的のように示されていると行かせたくはなくなる。

「それにしても、彼の記憶には驚いたなあ」

「そうね、もしかしたらああいう未来が待ってたかもしれないと思うと……」

たしか、魔法先生ネギま……だったか、涼くんの記憶にあった漫画のストーリーには驚かされた。

「しかし、違う所もある」

そう、涼くんの記憶とはすでに違う所もあった。

でも、なんにせよ……

「全ては彼を涼くんに会わせてからだな」

「そうね、それがおわってからこれからのことを決めていきましょう」

学園長にも報告はすべきなのだろうが、今はまだ判断に困る。

「そう言えば、涼くんって二十歳なのよね？」

「うん、本人がそう言っていたしね」

「私、この前涼くんとゆーなと一緒にお風呂入ったのよね～」

ただ、明日から涼くんへの訓練は厳しくしようと思った。

第3話　カミングアウトって恥ずかしいよね？（後書き）

感想をお待ちしています。

ちなみにこの作品は毎週水曜日と日曜日に更新の予定です。

話しのストックがあるとはいえ心配ですが…

では皆さんこれからもよろしくお願いします。

第４話　思い込みと勘違いは危険なものです（前書き）

思ったより筆が進んだので、投稿します。

今回は新たなオリキャラが登場します。

ではどうぞ

第4話　思い込みと勘違いは危険なものです

明石さんたちに全てを話した次の日、なぜかいつもより厳しい訓練を終えて、家に戻るとそこには人が立っていた。

その人は、中性的な顔立ちで、長く真っ直ぐで綺麗な髪をしている。

一見すると女性のようにも見えるが、男性もののジャケットとジーンズを着ているため、性別がどちらなのかわからない。

「紹介するよ、彼は霧島（きりしま）　浅葱（あさぎ）くんだ」

「ヨロシクね♪すずみくん♪君のことは明石教授から何度か聞かされているよ♪」

その声は透き通るようなソプラノボイスで、跳ねるように言葉が聞こえてくる。

その容姿と相まってか、始めに彼が男性と聞かされていなければ、間違いなく女性と間違えただろう。

「はじめましてあさぎさん、俺のことは涼と呼んで下さい」

その瞬間、彼の表情が一瞬だけ変化したのを俺は見逃さなかった。

「なるほど♪なるほど♪君もそうなんだ♪」

「ということは、浅葱くん、君も知識を持っているのかい？」

明石さんの言葉に彼は笑顔で答える。明石さんがなぜ知っているのか疑問に思っていないようだ。

「うん♪そうだよ♪ボクはその子と同じ知識持ち、でもなるほど、君はそれを選ぶんだね♪」

「知識をバラして介入することをいってるのか？」

「そう♪」

彼は何が楽しいのか、俺の方を向きながらずっと笑顔でいる。

「それにしても驚かないんだな、明石さんに知識についてバラしたことに」

「だって、二人しかいないならともかく♪、他の人がいる前でイレギュラーなんて言ったら、その人も知ってるって教えているようなものだよ♪」

なるほど、状況から推測されたわけか……どうやら、彼の方が一枚上手らしい。

しかし、考えてみれば当然だ。彼は大戦を経験し、自分より長く生きている。ただの学生であった自分より、上であるのは当たり前だろう。

「それで♪バラしたのは何人かな？」

「明石さんと夕子さんの二人だけだ」

「う〜ん♪、よしっ！じゃあ、今夜二人を連れて、図書館島の深部にきてね♪そこで君の知りたいことを話してあげるよ♪」

「わかった。じゃあ今日の夜に」

「それとボクのことはあさぎでいいよ♪」

そういうとあさぎの足下から魔法陣が現れ、それとともに消えていった。

目の前からあさぎが消えると、息を一つ吐いた。

……霧島浅葱

彼は知識持ちという点では、俺と同じであるがそれ以外の部分では、遥かに上にいる。

魔法使いという面ではいうまでもなく彼が上だし、こちらが欲しがっている情報を持っているという面でもあちらが有利だ。

もし、こちらに情報を与える対価として、何かを要求することができる。

そして、明石さんに知識をバラしたというのに反応が薄かったということを考えると、既にあちらも誰かに知識をバラしたか、もしかしたらバラしても問題ないような状況なのか。

「明石さん、あの人はいつもあんな感じなんですか？」

「ああ、普段はあんな感じだね、でも戦闘になったり本気になったりすると雰囲気が変わるって聞いたことがある」

「そうですか……」

あの態度が天然なのかそれとも作っているのかはわからない。

ただ、少なくとも俺には情報が必要だ。そのためには図書館島深部に行かなければならない。

そう、場所が図書館島深部ということも問題だ。

あそこには“紅き翼”の英雄、アルビレオ・イマがいる。

わざわざそんな所で話し合うということはアルビレオ・イマも関わってくるのだろう。

……なかなかメンドくさいことになりそうだなぁ

「涼くん、今悩んでいても仕方がないよ、まずは腹ごしらえをしよう」

明石さんは俺の表情の変化を感じ取ったのだろう。自分も行かなくてはならないから不安もあるだろうに、それを感じさせず、あまつさえ俺を心配してくれている。

……かなわないなぁ、ホントに

これが一家の大黒柱ということなのだろう。その偉大さは俺の悩みを軽くした。

俺も家族を持てればこう成れるのかなぁ？、

などとわからない先のことを考えるほど余裕ができた自分に安心する。

「そうですね、指定された時間は今夜ですし、時間まではゆっくりしましょう」

「ははっ、それだけ余裕があるなら安心だね」

二人で笑いながら、家に入っていった。

そして深夜、裕奈が寝付いたあと、さらに睡眠を深くする魔法を裕奈に掛けて、決して朝まで起きないようにする。

夜中に目覚めて自分たちが家にいないことがバレないようにするためだ。

「これでよし……と、それじゃあ行きましょう」

夕子さんが家に鍵を閉めると、図書館島に向かう。もちろん箒に乗って移動だ。

しかしながら、俺はまだ箒で飛べないため明石さんの後ろに乗っている。

「夜景が綺麗だ、それに気持ちいい」

「箒に乗って景色を見るなんて、魔法使いじゃないとできないからね」

空から見下ろす麻帆良も綺麗だったが、建物に邪魔されず見上げる夜空もまた綺麗だった。

空に近いためかいつもより星がはっきりと見える気がした。

そして頬を掠める風が心地良い。ただこれだけでも魔法を使える価値があるように思える。

そうこうしているうちに図書館島に到着する。すると、そこには霧島浅葱がいた。その顔は昼に会ったときよりも機嫌が良いように見える。

「お昼ぶりだね♪涼クン♪明石教授♪そしてお久しぶりですね夕子さん♪」

相変わらず跳ねるような言葉で挨拶をしてくる。

「わざわざ出迎えてくれてありがとう。あさぎ、ここからは案内してくれるんだろう?」

俺たちはその場所があるということは知っているが、どこにあるのかまでは知らない。当然コイツは俺たちを案内するために来たはず

だ。

「うん♪じゃあ涼クンはボクの後ろに乗ってね♪、お二人はボクの後ろをついて来て下さいね♪」

「うん、わかったよ」

「ええ、わかったわ」

俺は無言で明石さんの箒が降りるとあさぎの箒に跨がる。この時、あさぎに触らないのがポイントだ。

明石さんと夕子さんはこっちをみて苦笑いしつつもあさぎの言葉に従う。

「それじゃあ、れっつご～♪」

あさぎのゆるい言葉で図書館島の内部を進み始めた。

そして、少し開けた場所に出る。確かここはドラゴンがいる場所だった。

すると、正面にある扉のまえにドラゴンが降り立つ。

「アハハ、まさかホントに学園の地下にドラゴンがいるなんてね」

「さすがにこれは驚いたわ」

二人は目の前に現れたドラゴンに驚愕しているようだ。

いくら、俺の知識で知っているといっても、媒体が漫画だったのでイマイチ信憑性に乏しかったのだろう。

「この人たちはお客様だよ♪通してあげて♪」

あさぎがドラゴンに話しかけると、ドラゴンは飛び上がりどこかへ行ってしまう。

「じゃあ行こうか♪この先にみんなの疑問に答えくれる人がいるよ♪」

そして、扉が開かれる。そこに入ると上から地下に関わらず月の光のようなものが降り注ぎ、周りには、かなりの水が落ちる巨大な滝がある。

原作でここの存在を知っていても、ここの場所も周りの景色も別格だ。

初めて明石さんに魔法を見せてもらった時に匹敵する。

「凄いと言うべきなのか、マジかよと驚くべきなのか」

「素直に驚いていいと思うよ♪ボクもそうだったし♪」

そしてまた、通路を進み始める。中央にある建物の中に入り、少し進んだ先にあった扉を開けるとそこには一人のローブを着た人間が立っていた。

「ようこそ皆さん、お待ちしていましたよ」

「アルビレオ・イマ？」

いや、今更ではあるが原作通りであるならこの人物はアルビレオ・イマである。

「いえ、私のことはクウネル・サンダースと呼んでください」

「ああわかったよ、クウネルさん」

「え、ええ、わかりましたクウネル様」

「私もクウネルさんと呼ばせてもらいます」

わざわざ訂正してまでクウネルと呼ばせたいらしい。原作ではいつ名乗り始めたのかがわからなかったが、もうすでに名乗っているとは……

「ではこちらへどうぞ」

クウネルさんに案内されて、サンルームに入り、その中にあるテーブルに全員がついている。

テーブルの上には、紅茶と様々なお菓子が並べられていた。

あさぎはケーキやシュークリームを笑顔で食べている。

明石さんと夕子さんはこの状況に困惑気味だった。

無理もない。昨日いきなり俺に記憶のことを明かされ、次の日にはドラゴンに出会い、大戦の英雄に出会っているのだ。

正直、俺もこの展開の早さにはついていけていない。

「では始めましょう。司条涼くん、あなたの持っている知識とこの世界との違い」

クウネルが話し始める。その真剣な口調のためか少しずつ緊張感が増していく。

「そして、私たちが知る限りの全てをあなたたちに話しましょう」

今日もまた長い夜が始まる。この時はこれがまさか俺の人生に深い影響を与えることになるとは夢にも思わなかった。

第４話　思い込みと勘違いは危険なものです（後書き）

１日で２０００アクセスを超えていたので驚きました。

皆さん見て下さって本当にありがとうございます。

これからも頑張りますので、皆様よろしくお願いします。

第5話　相違点（前書き）

予定どおり更新日に投稿です。

この話しで完全に原作ブレイクします。

ではどうぞ

第5話　相違点

クウネルさんは手元にある紅茶に口をつける。そしてゆっくりと話し出した。

「まず涼くん、君の持っている知識を拝見しますね」

クウネルさんはその場を動かず目を閉じて呪文を唱える。

時間にして、数分ぐらいは経っただろうか。クウネルさんは目を開けて、こちらをじっと見てくる。

「ふむ、君の人生はなかなか面白いですね」

「ってオイっ！！！！」

そういえばこいつは他人の人生収集が趣味だったな。

「ああ、ついでに見せてもらっただけですよ。他意はありません」

「あ、あのクウネル様、話しを進めていただけますか」

「ああ、そうでしたね。涼くんの知識と現実との違いは二つあります」

明石さんが催促したからか、クウネルさんは話しを進め始めた。

「一つはここにいる浅葱くんと同じように、紅き翼にはもう一人、

君と同じ知識持ちがいました」

「にはってことは、他にもいるってことよね？」

「ええ、もう一人は『完全なる世界（コズモエンテレケィア）』にいました。そのあたりは私より浅葱くんの方が詳しいでしょう」

そう言ってクウネルさんは、あさぎの方へ目をやる。あさぎはというと、これまでとは違いその表情は真剣だった。

「ということは、俺を含めて四人いたということになるのか？」

「ええ、少なくとも私にわかる範囲では君も入れて四人です。しかし、すでに知っていると思いますが、こちら側の一人と『完全（あち）なる世界（ら）』側の一人はもうすでに死んでいます」

紅き翼と完全なる世界に一人ずつ。紅き翼はわかるが完全なる世界に属していた奴は何が目的だったのか。

「そして、もう一つの変更点は完全なる世界の目的です」

恐らく、この辺にそのもう一人の思惑が関わってくるのだろう。

『完全なる世界（コズモエンテレケィア）』

彼らの目的は魔法世界を書き換え封じることで魔法世界人を救うということだったはずだ。

わざわざこうやって言う以上、多少の違いはあるのだろうと思っていた。

「結果からいうと、彼らの本当の目的は魔法世界を現実に完全に一つの存在として構築することでした」

「つまり、魔法世界という『幻想（アンリアル）』を『現実（リアル）』にするのが彼らの目的だったんだ」

「それはつまり、魔法世界にいる十二億人の救済を意味します」

正直、完全なる世界の目的が変更されていたのはいい。

どうやってとか、聞きたいことはいくらでもある。

……しかし

「『完全なる世界』の目的が知識とは違っていたのはわかった。でも『紅き翼』は『完全なる世界』を倒したんだろ。それは何故だ？」

そう、結果として『完全なる世界』の目的が魔法世界の救済にあるなら、『紅き翼』と敵対するのはおかしい。

「それは……」

クウネルさんは言葉を濁し、苦い表情をしている。

「そこから先はボクが説明させてもらうよ」

クウネルさんが言葉に詰まっているのを見てか、あさぎが説明を代わる。

あさぎの表情は真剣で、口調も今までの跳ねるような口調ではなかった。

それがあさぎの本当の姿なのか。今日会ったばかりなのでわからない。

「まあ、実際に見てもらったほうが早いから、今から夢見の魔法をみんなに掛けさせてはもらうよ」

あさぎはそう言って、俺たちに魔法を掛ける。

夢見の魔法の始まりは『墓守り人の宮殿』

つまりは大戦の最終決戦の場面から始まった。

◇

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

『墓守り人の宮殿』が見渡せる高台に『紅き翼』の面々がいる。そこには幼き日のあさぎらしき子どももう一人、男性がいる。男性には特に特徴といえるものがなかったが、彼がクウネルさんが言っていたもう一人のイレギュラーなのだろう。

「ラカン、気をつけたらどうだ、油断して命を落としては元も子もない」

「はんっ！テメーは警戒しすぎなんだよ、もっと余裕を持ったらどうだ」

イレギュラーと思わしい男性はラカンの態度に注意を送るが、ラカンはむしろ余裕を持ってそれに返している。

「ナギ殿！　帝国・連合、アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

若き日のセラスがナギに報告をしにきた。

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる、頼んだぜ」

「ハッ、それであの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おあ？ああ、いいぜそのくらい」

「そ、尊敬していました」

ナギはセラスにサインを求められ、それに素直に応じる。

決戦前なのに余裕あるな～、

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同

じだろう」

「決戦を遅らせることはできないのか？」

ここでイレギュラーの男性が口を開く、というかあまり喋らないんだな。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています……、『世界を無に返す儀式』を」

さっきは完全なる世界の目的は変わっていたはずなのに、ここではまだ気づいていない……

『気づいていると思うけど、この時はまだボクたちは『完全なる世界』の目的に気づいていなかったんだ』

頭の中にあさぎの声が響きわたる。

「世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

「ああ」

そう言ってナギは手に持った杖を回す。

「浅葱大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

イレギュラー組は決戦へ向かうために魔力を高めている。

「よぉしっ野郎ども、行くぜっ！！」

こうして決戦が始まった。

紅き翼の面々が『墓守り人の宮殿』に攻め込む。それを『完全なる世界』の面々が出迎える。

「やあ『千の呪文の男』また会ったね。これで何度目だい？」

完全なる世界の面々は紅き翼の面々に負けず劣らず濃いメンバーだった。

……若干、どちらも似てないかこれ、

「僕達もこの半年間で君に随分数をへらされてしまったよ。……この辺りでケリにしよう」

たしか二番目だったか、こうして見ている分には、表情の変化はほとんどないように見える。それは無表情というわけではなく、少し楽しそうな表情だ。

人形とか言われてたから、もっと人間離れしていると思ったら、そうでもないんだな。

そうして完全なる世界と紅き翼の戦闘が始まる。

イレギュラー組は二人で完全なる世界のメンバー一人と相対してい

る。

「ふん、ここではちと狭い。場所を変えるか」

完全なる世界のメンバーが二人に対して転移魔法を使う。

「しまった!!」

「二人とも!!」

クウネルさんが二人に近寄るが既に遅かった。

二人が転移した先は墓守り人の宮殿の外であった。

「さて、少々相手をして貰おうかイレギュラー」

「イ、イレギュラーだとっ!!まさかお前も!?」

「ああ、貴様らと同じイレギュラーだ、原作知識持ちだよ」

完全なる世界のイレギュラーが魔法を放った。二人はそれを避けるが動揺をしているようであった。

「何故、お前は『完全なる世界』についている?!奴らは『世界を無に返そうとしているんだぞ!!」

「『世界を無に返す』だと?何か勘違いしていないか?」

「惚けるな!!貴様も原作を知っているなら何をしようとしているか、わかっているはずだ!!」

紅き翼側のもう一人が激昂したように叫ぶ。

「ふん、なら何故関わっているかもわかるだろう。簡単なことだ、完全なる世界の目的は原作とは変わっているのだよ……」

「目的が変わっている……だと？」

その瞬間、完全に動揺した二人に魔法が降り注ぐ。

「ぐわぁぁぁ！！」

「あぁぁぁぁ！！」

二人は降り注ぐ魔法に耐えきれず宮殿に叩きつけられる。

「ゴホッ、そ、それで、お前達の、目的はなん、なんだ？」

ダメージは酷いが、もうすでに変わった完全なる世界の目的が気になるのだろう、紅き翼のイレギュラーが質問する。

「まあ、貴様らには苦汁を嘗めさせられたが、冥土の土産に教えてやろう」

そして、ソイツは二人に告げる。

「我々の目的は魔法世界全ての救済だ！！」

「き、救済だと……？」

「ああ、そのためにこの魔法世界という幻想（ファンタジー）を現実（リアル）に変える！！それがこの儀式の正体であり、貴様らの知っている原作との違いだ！！」

紅き翼のイレギュラーは反論する。

「嘘だ！！俺達が調べた情報でもそんなことは書かれていなかった！！」

「当たり前だ、これは私と造物主（ライフメイカー）しか知らないことだからな、他の幹部達ですら知らされていない」

ソイツは続ける。

「つまりはだ。お前達が今まで行ってきたことも、これから行おうとすることも全て無駄なんだよ」

「……む……だ？」

「そうだ、お前達が今まで殺した人間もこの儀式が止めるための戦いも全てが無駄だ」

その瞬間、紅き翼のイレギュラーは絶望した表情を浮かべる。

「むしろ、儀式が止められることを考えれば、貴様たちは魔法世界にいる十二億人を犠牲にすることになる」

そして、ソイツは腕を振るうと紅き翼のイレギュラーを殺した。紅き翼のイレギュラーはもうすでに立ち上がる体力もなく、抵抗することすらできずに絶命した。

「さて、残るは貴様だけだな」

ソイツはあさぎの方に向き直る。

「二つ質問するよ？何故、他の幹部達にこのことを知らせなかったの？そして、ナギに対する対策は当然うってるんだろうね？」

もっともな理由だった。幹部達に知らせておいても別に問題はなかっただろうし、やられるかもしれない以上、対策は練ってあるのだろう。

「まあ、答えてやろう。さきに二つ目の質問だが、我々は必ずナギ・スプリングフィールドに敗北する」

「どうして？」

この場合のどうして？は対策をしてないことに対する言葉だろう。

「アレは物語の重要なファクターだ、彼が敗北しては物語は進まない。それゆえに抵抗などするだけ無駄だ……、だからこそ他の幹部にもこの事は言っていない」

「未来は確定していない！！ボクたちがいることが、お前たちの目的が変わっていることがその証拠だ！！お前も同じイレギュラーなら必死に足掻いて見せろ！！」

あさぎが叫ぶ。そう、原作がどうであれ彼等の目的が変わっている以上、まだ変えられる余地は残っている。

そしてあさぎはソイツに殴りかかる。

あさぎのパンチをソイツは回避することなく、そのまま食らった。

「ああ、お前のように真っ直ぐにいられたら抵抗もできただろう。でも、私はもう疲れた……」

「疲れた？」

「今から行ってもう間に合わん。だから、全てを語ってやる」

そうして、ソイツは語り始める。

「私の名はウェントス・A・K・マクダウェル、エヴァの兄だ……」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの兄ぃぃ！？」

あさぎは驚いているが、俺も驚いている。それはエヴァに兄がいるのもそうだが、何故完全なる世界に入っているかである。

「私はエヴァとは違い不老不死ではない。この身体も無理やり魔力で保たせているだけだ。直に死んでしまうだろう」

「……」

「それに私は迫害され続けた。正直、魔法世界の救済なんてどうでもいい」

「なら、なんで？」

「だからこそ、あの英雄たちに絶望を与えることで、この物語に、そして主人公たちに対する抵抗をしてやりたかったのだ」

そうしている間に、ソイツの身体の崩壊が始まった。

「もう、私は保たないようだ。一つだけ、頼まれてくれるか？」

「なに？」

「エヴァに兄は満足して逝ったと伝えておいてくれ、あいつは私が完全なる世界にいることも知らない」

「わかった。伝えておくよ」

そうして、そいつ……ウェントスは消え去った。最後にありがとうという言葉を残して……

そうしてあさぎは、また墓守り人の宮殿の内部へと向かう。

「アルさん！詠春さん！ラカンさん！」

「おお、無事でしたか！それで彼は？」

クウネルさんがあさぎの無事に微笑むがもう一人がいない事に気がつき、あさぎに聞く。あさぎは首を左右に振ることで、もう一人が死亡したことを伝えた。

「そうですか……、今はナギとゼクトがライフメイカーと戦闘中です」

既にナギとライフメイカーの戦いは始まっていた。

それを停めようとあさぎは動けないラカン、詠春、クウネルさんに全てを伝えた。

「なんですって!!それでは!!」

しかし、全てはもう遅かった。

ナギが造物主を倒し、混成部隊による封印術式が発動された。造物主が倒されたことで崩された術式の暴走を止めるにはこれしか方法はなかったのだ。

「浅葱くん、詠春、ジャック、このことは他言無用です」

「ああ、こんなことが世界にバレたらまた混乱が起きる」

そうして、このことはこの場にいる四人の秘密とされた。

これが世界にバレされたら、また世界の混乱が起こり、復興が進まないのが目に見えていたからだ。

◇

「これが大戦の真実です」

現実に戻った俺たちにあさぎは事実を告げる。

正直当事者でない俺ですら途轍もないショックを受けたのだ。当事者である彼らが受けたショックは計り知れない。

「まさか、『完全なる世界』が救済の為に動いていたなんて……」

明石さんたちもショックを隠しきれないようだ。

「これが嘘という可能性は？」

俺は当事者二人に質問する。確かに彼らの記憶ではそうだが、もしかしたらという可能性もあるからだ。

「あのあと、記録などを頼りに儀式に使われていた術式などを解析してみましたが事実でした。他にも調べられること全てをあたってみましたが、どれも大戦中に得た情報か僅かにこのことを示唆する情報だけでした」

クウネルさんが唇を噛み締めながら言う。やはり彼らにとってこのことはとても苦い事実のようだ。

「他にこのことを知っている人は？」

俺はクウネルさんに対して疑問をぶつける。

「私と浅葱くん、そして詠春とジャック、あとはクルトくんでしょうね」

「なぜ、そのメンバーだけが？」

「ナギは単純です。もしこのことを知ってしまえば、英雄として活

動できない可能性がありました。それは戦後の復興にとってマイナスになります。

そしてガトウとアリカ姫ですが、彼らの場合自ら死んでしまう可能性がありました。タカミチくんやクルトくんは英雄に対して強い憧れを抱いていたようなので、役に立たないと思ったからです。

現にクルトくんはこのことを知ってそれを覆そうと必死になっているようですし……」

そうしてクウネルさんとあさぎは溜め息を吐いた。おそらくクルトに対する呆れからだろう。

「なら、学園長たちは？」

「学園長は魔法使いの責任と云うものに対する信用も信頼もできないですし、学園の魔法使いはそもそも信用ができませんから」

「では何故、私たちをここに？」

夕子さんがクウネルさんに疑問をぶつける。確かに学園の魔法使いが信用できないなら、何故二人を呼んだのか

「まず、あなた達が涼くんから知識を得たということですね。これによって、他に情報を漏らさない為にもあなた達をこちら側に引き入れないといけませんでした」

「そして、ボクたちが行っていることのために人手が必要だったんだ、それにすずみクンを受け入れたあなたたちだったら、少なくとも他より信用できた」

あさぎがそう言うと、明石さんたちの身体から力が抜ける。
彼らから信頼を受けたということで少しは安心できたのだろう。

「やろうとしている事とは何かお聞きしても？」

「ええ、私達は現在『完全なる世界』の行おうとした儀式をもう一度行おうと考えています」

もう一度、魔法世界を救う為の儀式を行う。それは自分たちで儀式を停めてしまった罪悪感からかそれとも……

「でも、魔法世界を現実にしたとしても戦争の危険性が残らないか」

そう、超のいた未来では火星と地球とで宇宙戦争が起こっていた。
もし、儀式が成功したとしてもその問題が残る。

「それに関しての私達の解答がこれです」

クウネルさんから紙にまとめられた資料を手渡される。

「こっ、これは！？」

資料に目を通した明石さんから驚きの声があがる。

「そう、火星ではなく新しい世界に魔法世界を存在させればいいということです」

そうしてクウネルさんは続けた。

「昔から魔族達のいる魔界と呼ばれるものが存在しました。そして、浅葱くんや涼くんのような存在のお陰で、別世界の存在というのがあるということも認識しました。

火星に魔法世界を現界させればまた戦争が起きる可能性がある。ならば、火星ではなく、きちんとした異世界を作り上げ、そこに魔法世界を現界させればいいというのが私達の答えです」

異世界を作り出し、そこに魔法世界を存在させる。

「今現在、ラカンは魔法世界で資料や魔法具などの収集にあたっています。詠春は西の総本山で陰陽道などの視点から資料を私達はここで資料を集め研究を行っていますが、状況は芳しくありません」

それはそうだろう。世界を創るなんて神様がするようなことを人間が行うのだ。簡単にできるはずがない。

「ですから、あなた方にも手伝って頂きたいのです」

クウネルさんとあさぎが俺たちに向かって頭を下げる。明石さんや夕子さんは困惑しているようだったが、俺は既に答えが決まっていた。

「わかりました。お手伝いさせて頂きます」

そう言ってクウネルさんたちに頭を下げる。すると明石さんたちも頭を下げた。

「正直困惑していますが、できる限りのことはやりましょう」

「私も英雄の力になれることがあるかわかりませんが、全力で頑張ります」

そして、今ここで俺がこの世界でやるべきことが見つかった。

こうして、俺たちは魔法世界を救うという大きな目標に向かって歩むことになった。

第5話　相違点（後書き）

今回はどうでしたでしょうか。

展開が急すぎる気もしますが、楽しく読んでいただけたら幸いです。

感想等お待ちしています。

第6話　現実の重み（前書き）

ＰＶ１００００突破です。

皆さん本当にありがとうございます。

まだまだ未熟な私ですが、これからもよろしくお願いします。

第6話　現実の重み

俺たちがクウネルさんたちに協力をするようになってからは、俺の修行はクウネルさんとあさぎがつけてくれるようになった。

「“紅き焔”！」

“紅き焔”を空中に浮いてある魔法に当てる。

クウネルさんたちに修行をつけて貰い始めてからは、自分でも驚くほど魔法の技術が上達している。

しかしながら、修行は厳しくトラウマになりそうなほど、心身ともに追い込まれている。

「魔力が枯渇したらこれを飲んでね♪」

あさぎから笑顔で手渡されたのは修行を始めてから何度も目にした魔法薬である。

その効果は魔力の回復と増幅で飲む度に少しずつ保有魔力量が増えるらしい。しかし、増幅効果は子どもの時にしか効かないらしく、魔力が枯渇する度に飲まされている。

そしてこの魔法薬はあさぎが作っている。

あさぎのアーティファクト『錬金術師の工房』の効果だ。

『錬金術師の工房』は文字通り発動すると工房に繋がる。工房の中には作業台や炉、大釜などがある他、魔法関係に関する殆どの資料がある。さらにキッチンや寝室などの部屋などがあった。

あさぎによるとここでは魔法薬や魔法具など基本的に何でも作成することができるらしい。

俺が飲んだ魔法薬もその一部だ。実はこいつはエヴァに掛かってある“登校地獄”を解呪する魔法薬も作り、もう既に解呪している。

そしてそのエヴァはというと……

「さっさと次の詠唱をやれっ！」

クウネルさんたちと一緒に俺を鍛えています。基本的に夕方は自分の家でタカミチに別荘を貸しているみたいですが、夜になると図書館島に来て、俺を鍛えてくれる。

何故、エヴァがここにいるかというと、あさぎがエヴァの“登校地獄を解呪したは良かったのですが、魔法先生の反発や学園結界によって力が弱まっているため、学園長がここに留まれように言ったようだ。

しかし、学園の外に出る事もできるし、外に出れば魔力は元に戻るのだからあんまり意味はありません。

「まあまあ♪あんまり厳しくしちゃうと最後まで保たないよ♪

そして、あさぎとエヴァは仲がいい。エヴァに兄の最後について話した時から仲がいいらしい。

兄の最後を聞いたエヴァは大泣きしたらしい。まあ、一人しかいない身内が死んだのだからそれもわかる。

そして、エヴァはナギを探すのをやめたようだ。妻がいる人間を追う気にはなれないと言っていた。

それで仕方なく麻帆良にいるようにしたらしい。

麻帆良を守るのを手伝い、そして麻帆良にいる一般人には手を出さない変わりに学園長から報酬をむしり取ったと機嫌良く話していた。

そして、ここにはもう一人いる。

「“魔法の射手・連弾・光の七矢”」

裕奈だ。

明石さんが結局巻き込まれることになるならと、クウネルさんたちに魔法の指導をお願いした。

裕奈は俺ほど厳しくされてはいないが先生が良いためか、実力はついてきていると思う。

裕奈にはまだ何も話していない。というより、まだ幼いので話しても理解できないだろう。

ちなみに修行はエヴァの別荘であるレーベンスシュルトの魔法球で修行している。

始めにここを使った時は夕子さんが歳を取るのはやだとか言っていたが、あさぎが老化を遅らせる魔法薬を手渡すと寧ろ喜んで使うようになった。

魔法先生の仕事はストレスがたまるわ、纏まった休みがないわで旅行にも行けなかったらしく、下手なリゾートより優れているここはまさに楽園のようだと嬉しそうにしていた。

ちなみにあさぎを脅して老化を遅らせる魔法薬を強引に作らせていたのは、見なかったことにする。

そして、あさぎではあるが不老不死になったようだ。

儀式の研究過程でできた不老不死の魔法薬、それをコイツは何の躊躇いもなく飲みやがった。

ちなみに不死殺しの魔法具も作れるらしい。

どんなチートだよ……

あさぎはエヴァとも仮契約を結んだようだが、そちらのアーティファクトも同じものだった。

どうやら、桜咲刹那のようにアーティファクトを二つ持つには条件があるようだ。

そして、俺も仮契約をする事になった。それもあさぎとエヴァの二人と……

エヴァは弟子としての俺を最高傑作に仕立て上げたいらしく、自分

の弟子だと主張するために契約をする事になった。

あさぎは自分と同じ存在である俺との繋がりのためといっていた。

「では、始めますよ～」

クウネルさんが仮契約の魔法陣を展開させる。

「おいっ！それは契約方法がキスの契約陣だろうが！！」

エヴァがクウネルさんに怒鳴りつける。キス以外にも互いに祈りを捧げたり、血の交換や契約を唱えたりする方法があるというのは知っていた。

「私はこの魔法陣しか知らないもので（笑）」

「嘘つけぇ～！！顔が笑っているぞ！！」

どうせクウネルさんはエヴァをからかう為に態とやってるんだよなぁ……

仕方がないのであさぎとの仮契約を先に済ます。さすがに男とキスとはどうかと思ったが見た目は女っぽいので、女と思い込むことで何とか乗り切る。

エヴァも諦めたのか。渋々と納得いかないような顔をしていたが、ちゃんとキスしてくれた。

二人とも俺が『魔法使い（ミニステル・マギ）の従者』として仮契約したことで、パクティオーカードが二枚でた。

絵が違うことからどうやら、アーティファクトは二枚とも違うらしい。

エヴァのカードのアーティファクトは『管理者の掟』、これは『造物主の掟』と似たような形をしている。

形状で違うのが『造物主の掟』が杖だったのに対して『管理者の掟』はキーブレードの形状をしていた。

そしてアーティファクトの効果だ。

魔法世界を管理する『造物主の掟』とは違い、『管理者の掟』はある程度の法則などの操作、創造ができる。例えば時間を操ったり、魔法などの使用を制限したり、重力を一時的になくしたりなどを行うことができる。

しかし、幾つか制約がある。それは効果範囲と制限時間だ。

『管理者の掟』の効果範囲は使用者の半径三十メートル以内に限られる。

そして、制限時間だが一日十五分が限界でそれを過ぎるとカードに戻ってしまう。

その代わり、例えば新たに創った法則は使用者が解除しない限り消えないというとんでもない効果がある。

これが出た時はクウネルさんたちは驚いていた。これで儀式の研究が進むかも知れないと喜んでいた。

そしてエヴァだがどうやらこのアーティファクトはエヴァの兄、ウェントスが創ったものだったらしい。

そのアーティファクトが弟子である俺に出たということでとても嬉しそうだった。

そして、あさぎのカードからでたアーティファクトだ。

こちらのアーティファクトは『願いを叶える三本の糸』というアーティファクトでいわゆるミサンガだった。

効果はそのまんま三回願いを叶えることができる。しかし、使い切ると一年間、再使用ができなくなるらしい。

どこのドラゴンボールだよ。

ちなみにこちらを見たときクウネルさんが狂乱していた。それはそうだろう、今まで全くといっていいほどに進まなかった研究が一気に進むことになるのだ。

そして、それから先はこのアーティファクトの研究が開始された。

その結果幾つかできないことがあることもわかった。

一つ目は死者の蘇生

二つ目が世界の創造

三つ目が魔法世界を現実にすることであった。

もしこれらができるのであれば、俺たちの目的は達成されたも同然だったのだが……

しかし光明もあった。あさぎが俺のアーティファクトを解析することで、『完全なる世界』が行おうとした儀式は何とかできるようになるらしい。

それには時間が掛かるようだが、原作には間に合わせるよと真面目な顔で言っていた。

そして夕子さんの出張であるが、辞退したらしい。理由を聞くとこちらに関われなくなるのが嫌だったという。

出張は変わりにタカミチが行ったようだ。

これは正直嬉しかった。

夕子さんは大切な家族だ。死んでしまう可能性があるような危険には今はまだ、関わってほしくない。

◇

修行を始めて数ヶ月が経ち、二度目の小学生生活を迎えた日のこと、クウネルたちに呼び出される。

あまりに厳しい修行に呼び方もかわってしまった。

呼び出された場所にはクウネル、あさぎ、エヴァの三人がいた。

「涼くん、あなたには浅葱くんとともに魔法世界に行って貰います」

クウネルがいきなり俺に告げる。

「魔法世界に行ってジャックと会い、そして魔法世界を見てきなさい」

「しかし、魔法世界はそれなりに危険だ。いくら私という最高の師のもと、お前の力がついてきたとはいえ、まだ弱く覚悟も足りん」

「だから、少し現実を見せてあげようとおもってね♪」

クウネルは俺に夢見の魔法を掛ける。

そこで見たのは地獄絵図だった。

魔法に撃ち抜かれ死んでいく人。

魔法の余波で手足が吹き飛んでいる人。

鬼神兵に押し潰される人。

戦艦が墜とされ死んでいく人。

広域殲滅魔法によって肉片となった人。

凄惨な光景であった。

「これが大戦の事実です。当然これに参加していた私達はこれを行ってきました」

そう、これは戦争なのだ。戦争で大勢の人間が死ぬのはバカでもわかる。しかし、この光景は体験した者しかわからない。

「この世界において、魔法による事故死などは殆どありません。死亡理由の殆どが殺人です」

「お前がいるのはそんな世界だ。誰かが明確な意志をもち誰かを攻撃する」

そして殺し殺されるとエヴァが言う。

「お前もこの世界に関わる以上こういう目に遭うだろう」

その瞬間、夢見の世界が壊れ、何者かに襲われる。

襲ってきた相手を見ると、それは悪魔だった。

「私が召喚した悪魔だ。お前を殺すように言ってある。殺されないように気をつけろ」

エヴァたちはそう言ってその場から消える。そして俺と悪魔だけが残る

「があぁぁぁ！！！」

悪魔が襲いかかってくる。そのスピードはかなり早く、反応が間に合わない。

悪魔が振るった腕が障壁を破り俺を直撃する。

そのまま、悪魔の攻撃を喰らい続ける。訓練の時では反応できた攻撃も、今は反応すらできない。

これが本当の戦いで、これが命のやり取りをするということだった。

現実を知る。戦いを知る。そしてこの世界を理解した。

恐怖と痛みで竦む身体に喝をいれ、意識を切り替える。

相手は自分を殺そうとしている。

この世界にいれば、今後もこのようなことは何度もあるだろう。

その時、今のように抵抗もできないようでは自分が死んでしまう。

――殺られる前に殺れ

身体から魔力を解放する。

解放した魔力に悪魔が一瞬怯む。

その瞬間、瞬動で一気に距離を詰め、“断罪の剣”で一気に切り裂いた。そして、直ぐに距離をとり

「“紅き焔”！！」

魔法をぶつける。更に追撃で“魔法の射手”を連続で放つ。

しばらくすると悪魔は完全に沈黙し、消えていった。

これが人間だったら、俺も人殺しになるのかなぁ

「よくやった」

エヴァが現れる。ずっとどこかで見ていたのだろう。

「覚えて置いて下さい、これが実戦です。そして私達は何時でもこのような世界の住民だということを自覚しなさい」

クウネルは言う。この世界は危険なのだと、実戦では甘い考えは捨てろと……

もう既に今回のことで俺は理解した。自分たちがどれだけ危ないのか、どのような危険があるのか……

まだ手には悪魔を切った時の感触が残り、屠ったときの光景が頭に焼き付いている。

悪魔とはいえ、殺したという事実に身体が恐怖する。

しかし、それも一時的なものだった。あのような巨大なものを、人型をしたものを殺したのは始めてだったが、大戦の光景を見たためか思っていたよりの衝撃的な感情は湧かなかった。

まあ、人を殺すのはまた別なのだろうけど……

こうして、俺は少しずつ知っていった。

第6話　現実の重み（後書き）

やっぱり文章の表現力にまだ難があるな～

展開も急な気がするし、やはりまだまだだな～

第7話　英雄の実力（前書き）

ついにあのバグキャラの登場です。

第7話　英雄の実力

魔法世界に行くことが決定してからというと訓練は一段と厳しさを増した。

まだ幼い俺の身体では圧倒的にリーチが足りない。それ故に近接戦闘の技術はカウンターや一撃離脱、瞬動だけに絞り鍛える。

武器を扱うことも考え、いくつかの武器を試してみたが、どれも才能がないのか、上手く扱えない。

銃では的を外し、反動を上手く抑えられない。

剣や刀では振るうときに刃が綺麗に通らない。

エヴァの使っている糸は繊細すぎて扱えない。

唯一扱えるのが短剣だけであった。これなら軽く魔力を纏わせるだけで威力は上がる、“断罪の剣”を短剣の先から出すことでリーチ差も短くなる。

ということで、短剣の修行はチャチャゼロが相手だ。

「ケケケ、ヨケネェト首ガ飛ブゼ」

「ちぃ！」

首を狙ってくる刃物を躱し、即座に短剣から出した“断罪の剣”で

斬りつけるが躱される。

今両手に短剣を持っているが右手の短剣しか、“断罪の剣”を展開させていない。

魔力を節約するというのもあるが、まだ完全に両手には展開できないからだ。

「行クゾ」

チャチャゼロの攻撃を右手で受けるが、威力が強すぎて右手に持つ短剣が弾かれ手から離れる。

とっさに左手の短剣でチャチャゼロを迎え撃つがやはり躱され、目の前に剣を突きつけられる。

「ケケケ、マダマダダナ坊主」

チャチャゼロはそう言って、剣を下ろす。何手かは打ち合うことができるようになったが、基本スキルの足りない俺では、まだまともな勝負にはならない。

「まだまだだな、近接戦闘のみの制限があるとはいえ、お前にはチャチャゼロに勝てるくらいにはなってもらわないとな」

エヴァが俺たちの前に現れるがその顔はまだまだ物足りなさを感じているようだった。

「まあ、私達ではお前に教えられる近接戦闘を限りがあるのも事実だ。そういう意味では今回魔法世界に行き、ジャック・ラカンに会

うというのは貴重な経験だろう。アイツは加減などできないからな、しっかり揉んでもらえ」

エヴァはそう言うとチャチャゼロを連れて立ち去って行く。

「まあ、今回の魔法世界訪問は君にとって良い経験になるでしょう」

「そうだね♪それにボクも一緒に行くし、安心していいよ♪」

クウネルとあさぎが現れる。そう俺は明日から二週間の間、魔法世界に行くことになる。その後はこちらに戻ってきて、二週間京都にある関西呪術協会にお世話になることになる。

関西呪術協会に行っても大丈夫かと思ったがあさぎは関西にお世話になっていた時もあるらしく、俺はあさぎの弟子という扱いなので大丈夫らしい。

俺も魔法世界に行くのも京都に行くのも楽しみだった。

◇

～早朝～

「じゃあ、気をつけるんだよ」

「大丈夫だとは思うけど、無理はしないでね」

「涼くん～、わたしも魔法のれんしゅうがんばるから～」

そして、魔法世界への出発を迎えた。

家の前では朝早いのに明石家のみんなが出て見送ってくれる。こういうのが家族って感じがして自分の口元がほころぶのがわかる。

「じゃあ浅葱くん、涼くんのことを任せたよ」

「はい♪任せてください♪」

あさぎはこういう時でもいつも通りだった。変わらないコイツを見てるとなんか安心する。

「じゃあ、行ってきます」

そして俺たちは魔法世界に向かう。

◇

今回使うゲートは中国にあるゲートで、繋がる先はメガロメセンブリアで今日の夕方には繋がるようだ。

昼にはゲート近くの街についたので、ゆっくりと昼食をとる。

「なあ、あさぎ」

「ん？」

「魔法世界やこっちで他に変わったかもしれないところとかはわか

らないのか？」

あさぎにふと疑問に思ったことを聞いてみる。今までコイツらに聞いたのは、原作と違うところだけだ。もしかしたら原作に描かれていない点でも少しは違っているかもしれない。

「う～ん♪まずはメガロメセンブリアかな♪大戦は彼らが起こしたってことと、あの大戦では『完全なる世界』は人命救助をやっていてね♪ボクたちが『完全なる世界』だと思っていたのはメガロメセンブリア元老院の末端が勝手に『完全なる世界』を語っていただけだったんだよ♪」

「つまりラスボスはＭＭ元老院ってわけだ、なんとまあわかりやすい」

コイツらが倒した殆どがＭＭ元老院の関係者か。戦争の発端はもう知っているが……つまり

「まあ、結局彼らも魔法世界の住民の殆どが幻想ということは知っているからね♪

あの時、封印術式が成功したから元老院は今も魔法世界人たちを見下せるし、もしあの術式が失敗してしまえば、今まで見下していた存在が自分たちと同じ存在になる♪

でも儀式が失敗することで魔法世界の崩壊の危機に陥ったからアリカ姫を処刑しようとしたわけ♪」

「結局、アリカ姫はどうなろうと処刑はされそうになるということか」

封印が成功しても元老院に捕まり、失敗して『完全なる世界』の目的が明るみになれば、それを停めようとしたとして処刑されただろう。

「不幸というのはまさに彼女のためにある言葉だな」

どんなに頑張っても自分は不幸になる。他人を救うためにした努力が無駄であった。これを彼女が知ったらどう思うか……

「だからボクたちは真実を教えなかった。知らないことが幸せなこともあるから」

「……まあ、結局俺たちはできることしかできないけど」

「なら、もっと強くなってもらわないとね♪今のキミじゃまだまだ足りないよ♪」

「うるせー」

こうして俺たちの昼食は進んでいった。

魔法世界に到着し、グラニクスに転移魔法を使いグラニクスの近くにあるラカンの住処に転移する。

「すみません～♪ジャックさんいる～♪」

あさぎは相変わらず軽い言葉使いでジャック・ラカンを呼ぶ。

「おおっ、来たか浅葱！！」

「お久しぶりです♪」

すると建物の方からデカい男が出て来た。

「そっちが例のガキか？」

「そうですよ♪ボクたちの切り札になります♪」

「司条涼です。よろしくお願いします」

するとジャック・ラカンは俺の背中を叩く。

「ハッハッハ、堅苦しい喋り方はやめていいぞ、お前も浅葱たちと同じなんだろーが」

背中が痛いが我慢する。まあ、こう言っているのだから遠慮することはないだろう。

「じゃあ、先に今までのことを崩壊するね♪」

そう言ってあさぎはラカンにどこまで研究が進んでいるのかを報告する。

俺のアーティファクトの存在で一気に進んだとはいえ、まだまだ完全なものにはほど遠い。

世界を創り、魔法世界をそこに移す。言葉にすればただこれだけだがその内容は想像を絶するほど難しい。

「なるほど、なら俺はこれまで通り世界を創る方法を探せばいいんだな」

「はい♪、あと様々な材料や書物の収集もお願いしますね♪」

この辺りラカンは真面目なのだろう。真剣な表情で話しを聞いている。

話しが終わるとラカンと俺は何故か戦うことになった。

「お前を鍛えてくれと頼まれているからな、まずお前の力をみせてくれや」

ラカンの言葉とともに俺は短剣を構える。残念ながらアーティファクトはどちらも使用禁止をクウネルたちから言われているので使うことができない。

短剣から“断罪の剣”を出し一気に距離を詰めて斬りつけるが、そもそも刃が通らない。

ラカンがパンチを放ってくるので、それを瞬動で回避すると地面にクレーターができる。

直撃したら確実にアウトだな……

冷や汗が背中と頭に流れる。気のせいか体温が二度くらい下がったように感じる。

ヒットアンドアウェイを繰り返し魔法も混ぜるが有効的なダメージは与えられない。

それどころかラカンの攻撃を回避するたびに体力と精神力が削られていく。

「“魔法の射手・戒めの風矢”！！」

このままでは埒があかないので捕縛魔法を使い足止めを行い距離と時間を稼ぐ。

「契約に従い我に従え炎の覇王、来れ浄化の炎、燃え盛る大剣」

稼いだ時間を使い詠唱するが、ラカン相手ではそうは保たない。既に捕縛はとかれ、ラカンは瞬動を使い近づいてくる。

「ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄、罪ありし者を死の塵に」

「ちぃ！！間に合わねぇか！！」

ラカンが攻撃する前に詠唱が完了する。それをありったけの魔力を込めて解き放った。

「“燃える天空”！！！」

“燃える天空”はラカンを直撃したが、まだ倒したわけではない。

「光の精霊５９柱、集い来たりて敵を射て“魔法の射手　連弾・光の５９矢”」

追撃で魔法の射手を放つ。しかし……

「追撃はいい事だが、ちゃんと相手を見ないとなぁ」

ラカンは後ろに回り込んでいた。そして、ラカンの右パンチをまともに喰らい、俺は意識を失った。

◇

「どうだった♪涼クンは？」

ボクはラカンに涼クンの印象を聞いてみる。ボクとしてはヒットアンドアウェイでダメージを入れられなかったことから、捕縛魔法で時間稼ぎを行い、イチかバチかの大技を決めにいったのは上出来だった。

「まあ、捕縛から大技までの流れは上等だったな、いくら俺様が手を抜いていたとはいえ直撃させたんだから上出来だろ」

どうやらラカンも同意見のようだ。今回ラカンは実力の殆どを出していない。もし本気であったなら、最初の一撃で終わっていたと思うし、捕縛も直ぐに外せたハズだ。

ただ、まだ小学一年生の涼クンがラカンに一撃を入れた事には驚いた。

そして“燃える天空”まだ上位の魔法は教えなかったにも関わらず彼は使った。

おそらく、どこかで練習をしていたのだろう。

「まあ、これから何処まで伸びるか楽しみな奴だぜ」

「ふふ、そうだね♪」

ボクと同じイレギュラーである彼は重要な役割を持っている。

だからこそ……

「ボクも頑張らないとね♪」

「ああ？なんか言ったか？」

「ううん、何でも♪」

少しだけ、未来が楽しみになった。

◇

目を覚ますとベッドに寝かされていた。どうやらラカンの攻撃をまともに喰らい気絶したようだ。

あれが英雄の実力か……

わかるように手加減された状態で手も足も出なかったのだ。

わざわざ隠れて練習して覚えた“燃える天空（きりふだ）”ですら、ジャック・ラカンには通用しなかった。

「おおっ、もう起きたのか」

様子を見にきたラカンが声を掛けてくる。

「まあ、お前もよく頑張ったが、まだまだこの俺には勝てねえよ」

ラカンは自慢するように言った。

「とりあえず、こっちにいる間は鍛えてやる。ついでに拳闘大会に出て実践を積んでこい。じゃあ、大丈夫そうだから外に出な」

そう言ってラカンは俺を外に連れ出した。

「まあ、お前の場合基礎はできているみたいだが、全て小手先の技術なんだよ」

ラカンは俺の戦闘方法の考察を述べる。

「確かに戦術の面ではそこそこできるが、俺たちのような格上の存在相手には圧倒的に火力が足りない。現に“燃える天空”も防がれただろ」

ラカンの言う通りだった。断罪の剣で近接戦闘ができるようになっても戦いのバリエーションが増えただけで、根本的な火力不足を補うことにはならない。

そのための“燃える天空”だったのだがこうして防がれたことを考えると更に火力を上げる必要がある。

「純粋に“燃える天空”のような上位の魔法を覚えたり、鍛えて威力を上げたりもしてやってもいいが、ここはやっぱり必殺技だろ！！」

ラカンはそう言って、ホワイトボードにいろいろ書き込む。

「とりあえず、こっちにいる間に俺の防御を超えてダメージを与えられるような必殺技をつくれ！！」

こうして俺は魔法世界にいる間に必殺技を作らなければならなくなった。

第7話　英雄の実力（後書き）

というわけでラカンの登場です。

彼は好きなキャラなんですが、今の作者の力量では彼を表現するのはこれが限界です。

ですから、もっと精進できるように頑張ります。

ここで一つ、皆さんに質問があるのですが、皆さんがネギまで好きなキャラクターは誰でしょう？

書いていただけたからといって、そのキャラクターの登場頻度が多くなったりはしません。

純粋に作者の興味で皆さんに質問しています。

感想欄に好きなキャラクターとその理由、できればこの作品の感想などをご記入ください。

ちなみに作者は前述した通りラカンが好きです。

男らしさや面白さもあり、いろいろと理屈を超越した存在ですし、ラカンのこと嫌いな人っているんでしょうか？

長くなりましたが、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第8話　必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？（前書き）

主人公の必殺技の完成です。

……原作突入までまだまだあります。

第8話　必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？

魔法世界に来てから一週間、拳闘大会に出つつも必殺技を考える日々が続いた。

拳闘大会では未熟な俺では拮抗、もしくは格上の相手が多かったがラカンのように攻撃が通らないというわけではなかったので、絡めを使ったり、エヴァたちに鍛えられた機動力や防御力のお陰で苦戦はするものの何とか勝利を収めていった。

あと、六歳の拳闘士ってことで何度か取材を受けたが、適当に流しておいた。

しかし、一度だけ負けた試合があった。

その日は一日二試合入っていて、先の試合で格上と大戦し辛くも勝利を収めたが魔力を大量に消費し、次の相手が一試合目より更に格上だった為、終始粘ったが結局そのまま押されて負けてしまった。

その際、身体の骨が折れたりしたが、意外と大丈夫だった。

どうやら俺もこの世界に染まってきているようだ。

そして、俺が負けた相手はトサカだった。

まさか、原作に出てる奴と戦う事になるとは思っていなかったが、まさか負けてしまうとは。

トサカは原作での実力を見る限りそれ程高くないように思えたが、攻撃力が高く、俺より遥かに実戦慣れしているため、試合を巧みに進められた。

そして試合後にラカンとあさぎが治療している俺の見舞いをしに来たときに、ちょうどトサカも居合わせ、ラカンからサインをあさぎからはマジックアイテムを貰っていた。

あさぎのマジックアイテムは魔法世界では一種のブランドとなっているらしく、高値で取り引きされていると本人から聞いた。

トサカはあさぎからマジックアイテムを貰うかわりに俺たちがここにいる間、俺の組み手の相手をしてくれることになった。

何でも、あさぎやラカンでは実力が離れ過ぎていて練習にはならないらしい、だから、俺より実力が上でさらに巧みに闘うことのできるトサカに相手を頼んだようだ。

トサカ……今はトサカさんと呼んでいるが、彼も快く引き受けてくれた。

お陰で近接戦闘の技術が伸びるが、何故かトサカさんも一緒に鍛えられていて、一向に差が縮まっていないように思える。

そして今はラカンと対峙している、完成した必殺技を見せるためだ。

「じゃあその新しい必殺技を撃ってみろ」

ラカンは気を放出して防御を高める。

俺はというと右手に持った短剣から“断罪の剣”出して剣道でいうところの上段から更に剣を寝かせた形で構える。

「まさか、それを思いっきり放つとかじゃねえだろうなあ」

ラカンが俺の構えから推測したのか呆れたように言う。

確かに間違ってはいないがまだいくつか工程があった。

“断罪の剣”の術式を書き換える。すると魔力でできた刃が書き換えるられて、術式で作られた刀身が現れる。

“神斬の太刀”

これが俺の新しい必殺技だ。

魔力を刀身に注ぐと刀身が巨大化する。これにはラカンも、そして近くで見ているあさぎ、トサカさんも驚いている。

「壱の太刀“地砕き”！！」

「やべぇ！！！」

そして思いっきり振り下ろす。振り下ろした太刀はラカンを直撃し更に地面を粉砕する。

思ったより威力が低い……まだ練度が足りないのだろう。

俺はまだまだ威力に納得していないが、ラカンが全力で気合防御し

たのだ。おそらくまともなダメージになっていないだろう。

土煙と水煙は晴れ中からラカンが出てきた。案の定大したダメージではないようだ。

「充分だな、まさか俺の全力の防御を超えるとは恐れ入ったぜ」

「そうですね♪あなたがあれだけ焦ったのも久しぶりに見ましたよ♪」

どうやら俺の攻撃はラカンにダメージを与えることは出来たようだ。しかし腕に少々の切り傷を負わせただけだったが……

「まあ、まだガキだからな、もっとデカくなりゃあ更に威力も上がる」

こうして俺の必殺技は完成した。

正直に言えばもっと広範囲に特化した魔法を創りたかったが、今はまだこれで充分だろう。

そしてこの日から一つ変わったことがある。

トサカさんがラカンに弟子入りした事だ。俺の必殺技を見て触発されたらしい。

俺に対して、絶対負けてやらねえなどと言っていた。

こうして二週間の魔法世界での生活を終えた俺たちは旧世界に帰った。

グラニクスを出立するときはトサカだけでなくチーフたちまで見送ってくれた。

魔法世界では実戦をこなす事で大分実力はついたと思う。

しかし、終始トサカさんには負け続けたんだが……

ただ、魔法世界では全然暮らし方が違う。メガロでは近代的な生活もあり現代の日本に近かったが、グラニクスはどちらかというと中東の国々に近いイメージがある。

魔法が公になっているぶんだけ、便利な面もあるが危険という面ではこちらの方が危ない。

しかし、ここには笑顔が溢れていた。日本のように堅苦しく冷たく感じるような社会ではなく温かみがあった。

俺たちはこれを守らないとならない。

「これが魔法世界だよ。ボクたちが守り、救わなきゃいけない世界」

あさぎが真剣な表情で呟く。

「ここにいる人たちはボクたちと何にも変わらない。だから、ボクたち『紅き翼』があの儀式を停めたとき、この世界を救うチャンスを一度逃したんだ」

あさぎは悲しそうな表情をしている。それは懺悔のようにも聞こえた。

「もし魔法世界が崩壊すれば、間違いなくそれは『紅き翼』のせいだろうね。だからこそボクたちは、この世界を救うために頑張らないといけなかった」

「『紅き翼』の責任がどうとかは別にいい」

あさぎの話しを打った切って俺はあさぎに言ってやる。

「少なくとも俺はお前らが魔法世界を救うと言って、その手段を聞いて納得したから手伝っていた」

本音を言うとこれまでは魔法世界がどうとか紅き翼がどうとかはあまり関係なかった。

ただ、より良くなる可能性があるこちらを手伝っていただけだ。

確かに思わない所がないわけではないが、自分に取っては過去のことで実感はなく、明確な意志があるわけではなかった。

……魔法世界に来るまでは、

「俺は今回魔法世界に来てトサカさんたちに会った。あの人たちを救いたいからこそ行動する。お前らの罪がどうとか知ったことか！」

更に続ける。

「義務感や罪悪感で救うなんて言うな！！お前らは英雄なんだろう！！なら助けたいから助ける、それでいいだろうが！！」

「うん……そうだね」

あさぎの顔に笑顔が戻る。

「うんうん、そうだよね♪やっぱり義務感や罪悪感で世界を救うなんて間違ってるよね♪」

「切り替えはえぇなおい」

あさぎはさっきの真剣な状態から、何時もの明るい状態に戻る。コイツのシリアスなんて似合わない。何時も調子に戻ったことでホッと一安心する。

「涼クン♪」

「なんだよ？」

「……ありがとうね」

「どういたしまして」

こうして俺たちは魔法世界をあとにして、京都に向かう。

◇

京都につき、関西呪術協会にたどり着くとそこではたくさんの巫女さんが出迎えてくれた。

そして今は謁見の間にいる。

「お久しぶりですね♪詠春さん♪」

「お久しぶりです浅葱君。そしてはじめまして司条涼君」

「はじめまして詠春さん。やはり俺のことはご存知で？」

目の前にいる近衛詠春はやはり少し老けていて、顔も少しやつれている。

「ええ、アルとも連絡はよくとっていますから」

どうやらクウネルとの連絡で俺のことを知ったようだ。

「それに聞いていますよ。あのジャックに一撃を与えたと」

さすがに情報が伝わるのが速い。

「ここでは何ですから私の部屋に行きましょうか」

そう言って詠春さんは俺たちを自分の部屋に案内する。本来であれば許されないことで止められてもおかしくはないが、あさぎは関西にそれだけの信用を得られているのだろう、素通りだった。

詠春さんの部屋に行くと儀式の研究の進行具合についてあさぎが報告する。

詠春さんは頷きつつも難しい顔だ。やはり神経質な性格がここまで

思い悩ませているのだろう。

報告が終わると話題は変わり、関西呪術協会と近衛木乃香のことに入る。

「関西呪術協会は私が陰陽道の研究をしているためか術者の力量が全体的に上がってきています」

「??、それはいいことじゃないんですか?」

術者の力量が上がることは組織としては問題ないはずだ。

「はい、確かにいいことではあるのですが……」

「過激派だね?」

「そうです。過激派の力量も上がってしまい、一部では関東に攻め込もうとする輩も増えています」

それは問題だった。学園結界によって高位の鬼などが呼ぶことができないから大丈夫かとおもっていたが、陰陽道は式紙だけではなく、符術もある。

それにヘルマンが原作で侵入できたことを考えると学園結界はあまり意味をなさないだろう。

関西自身は詠春さんが儀式のためとはいえ陰陽道の研究を行うことで全体の力量が上がったため、詠春さんの立場や発言力も増しているがそれでも全体を纏めるには至っていない。

「そう言えば木乃香ちゃんはどうしたの♪」

「木乃香は麻帆良に通っています。魔法についても教えていません」

どうやら近衛木乃香はすでに麻帆良にいるらしい。しかし、魔法を教えてないのは何故だ。

「ここにいては魔法について知る機会が作られる可能性があります。それに麻帆良にはアルやエヴァもいますし君たちもいますから安心ができます。

魔法について教えてないのは、日常にも選択肢があることを教えるためです。魔法に関わっているとこちらにしか目がいきませんから……」

詠春さんは親としてよく考えているようだった。確かに木乃香の才能であれば多少スタートが遅れても一流の術者になることは難しくないだろう。

「そして二人にも木乃香の護衛をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？もちろんずっととは言いませんし、報酬も支払います」

「いえ、報酬は」

貰うわけにはいかないと言おうと思ったが詠春さんが、

「これは正式な依頼ですし、報酬を支払うことで君達には責任を負って貰います」

と言う。そう言われてしまえば、断るわけにはいかない。

「わかりました～♪」

「謹んでお請けします」

二人で対照的に返事をする。詠春さんは満足そうな表情だ。

「期限は木乃香が中等部に入るまでになります。その時に魔法についてを木乃香に教えるので、その時にはまた指導などを頼むこととなるでしょう」

「木乃香さんには全てを話しても？」

「はい、構いません。これは妻と出した答えですから」

詠春さんはその選択に後悔などはないようだ。

そのあとも話しは続くがどうやら儀式や大戦の真実について詠春さんの妻、木乃美さんは知っているらしい。

と言っても知っているのは詠春夫妻だけのようだ。

話し合いが終わり、詠春さんが用意してくれた宴に参加する。

出てきた料理は絶品で、周囲にいる巫女さんたちも綺麗な人ばかりだったので十二分に満足して、その日が終わった

第8話　必殺技ってゲームじゃ使えないって感じるのもあるよね？（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

第9話　基礎は大切ですね（前書き）

更新予定日の投稿です。

第9話　基礎は大切ですね

京都に来てからは神鳴流の道場に通わせて貰っている。

とは言っても神鳴流の技を教えて貰っているわけではなく。刃物を使った戦い方の基礎を教えて貰っている。

一度ここの師範代と試合をさせて貰ったが、武器の取り回しは軽く短い分こちらが有利かと思ったが、斬りかかっても完全に見切られ、技を放とうとするとその前に攻撃をいれられた。

横で見ていた詠春さん曰わく、歩法や瞬動はまずまずだが、そもそも武器の扱いが雑とのことだ。

瞬動で懐に潜り込んだときの短剣の振るいかたが上手くないらしい。

素手での格闘術は違和感なく力を伝えることができるが、短剣を持つと動きがぎこちないとは師範代さんの言葉だ。

というわけで武器の扱い方を一から習っている。

短剣の使い方、“断罪の剣”を使ったときの使い方、そして二刀流

……

基本的な動きを身体に叩き込む。

これをやっているとチャチャゼロやラカンがどれだけ大味な戦い方

だったのかがわかる。

今は一撃一撃意識して振っているが、無意識でもできるようにならないと実戦では使えない。

練習をしているうちに初撃は上手くいくようになったが、連続して短剣を振るとまだまだ剣筋が上手く通らない。

これは反復して身につける技術なので一朝一夕でできるなんて思っていない。

そして反復を繰り返す。

唐竹（からたけ）

袈裟斬り（けさぎり）

右薙（みぎなぎ）

右斬上（みぎきりあげ）

逆風（さかかぜ）

左斬上（ひだりきりあげ）

左薙（ひだりなぎ）

逆袈裟（さかげさ）

刺突（つき）

何度も何度も身体に身につくように、手に持った短剣を振る。
右手、左手、あるいは両手で日が暮れるまで振り続けた。

神鳴流の師範代さんに負けたのは単純に一つだけを学び研鑽を続けた者と俺のように魔法や武器など複数の分野に手を出し半端になってしまった者の差であった。

言い訳をするなら、魔法を使用することができるなら師範代さんであれば、あれほど簡単には負けなかったと思う。

しかし、制限があったとはいえ負けてしまったことはかなり悔しい。

だから、次は負けたくない。

「神鳴流を学んでないくせに生意気なんだよ！！」

俺は今、神鳴流の門下生数人に囲まれている。

門下生との試合では、年上が相手でも負けることはない。

それは外を知っている俺と知らない彼らの差であろう。しかし、彼らは自分より年下の子どもに負けるのは我慢がならないようだった。

彼らも神鳴流という流派に誇りを持っていて、神鳴流の技を習わないのに道場にいる俺が気に入らないらしい。

見たところ八人がいて手には木刀を持っている。

「余裕ぶっこいてんじゃねえ！！」

一人が斬りかかってくるが、気もまともに通っていない木刀などぬる過ぎる。

木刀を叩き折って、顔面に蹴りを入れる。

「ぐわあ！！！」

そして近くに二人に魔法の射手を撃ち込んだ。

「うわあ！！！」「がはっ！！！」

まだ未熟なのだろう。二人は避けることも迎撃もできないまま直撃を喰らった。

「“氷爆”」

めんどくさいので残り全員に魔法を放つ。一人には回避されたが他の四人はこれで気絶した。

「まだやるの、これ以上やると君たち破門になるんじゃないか？」

そもそも負けた腹いせに複数人で相手に掛かろうとしているあたり問題であるし、俺は関西にとって客人である。何より……

「俺が関西の客人だということを忘れてないか、それにそんなみっともない所をそこにいる人に見せるつもりか」

そう言って木を指差すと人が現れる。

そこにいたのは長い黒髪が綺麗な和服美人だ。

「こ、木乃美様」

「何をやっておるのですか？」

「い、いえ。これはですね……」

「言い訳は無用です。追って処分を伝えますので、覚悟なさい」

「はいぃぃ」

俺を襲ってきた門下生たちが、仲間を抱えて逃げる。

美人ながらその様は怖い。

「まったく困ったもんやなぁ、客人に対する礼儀すらなっとらへん」

「まあ、俺はケガはないですし、あの程度なら問題ないですよ」

「強いんやなぁ。門下生とはいえ八人を相手にしてあの程度なんて」

木乃美さんはくすくすと笑っている。

「どうせやったら、木乃香と婚約せぇへん？あの娘はうちに似て美人になるえ～」

「考えておきます」

確かに木乃香の婚約者というのはおいしい話しではあるが、冗談で

言っているのがわかるのだ。素直にはいなんて言うわけがない。

「まあ、ええんやけどね」

木乃美さんは少しつまらなそうだ。

「後であの子らの処分も伝えるから、楽しみにしとくんやで～」

いや楽しみって

木乃美はなんというかイタズラ好きというか少々子どもっぽい面がある。

ただ、組織を纏める人間としては一流で公の場ではその美貌も相まって、一種のカリスマ的役割を果たす。

今現在、関西呪術協会が曲がりなりとも纏まっているのはこの人のお陰であろう。

後日、俺を襲ってきた奴らがかなり厳しい目にあったというのは師範代さんから聞いた。

◇

今俺は師範代さんと向かい合っている。

既にここに来て十日、十五歳以下の門下生は殆ど倒した。

他は戦わせてくれないので、もう一度師範代さんに勝負を挑んだのだった。

「では、はじめっ！！！」

審判の合図とともに斬りつけるがやはり受け止められてしまう。

瞬動を使いすれ違い様に何度も斬りつけるが全て反応され、迎撃される。

「いや驚いた、まさか基礎を教えるだけでここまで伸びるなんて」

師範代は驚いてはいるが余裕の表情だった。

その余裕がムカついたので刀身から“断罪の剣”を出す。

ここからが本番だった。

短剣を振るい、師範代さんに向かって魔力を込めた斬撃を飛ばす。

当然斬撃は迎撃されるが、その瞬間に後ろに回り込むが、師範代さんは振り返りざまに斬りかかられる。

それを屈んでで躱し、師範代さんに蹴り込んだ。

師範代さんは蹴りには反応できずにまともに喰らう。

これが師範代さんにまともに与えた始めてのダメージだった。

「ふふ♪やっぱり涼クンはすごいね♪」

「あれでまだ六歳とは恐れ入るな」

「やっぱり木乃香のお婿さんになってほしいわ～」

師範代さんが起き上がる前に短剣を突きつける。

「やめっ！！勝者司条っ！！」

道場内でどよめきが起こる。俺が勝利したのが意外だったのだろう。

確かにまだ続けることはできただろうが、あの場面で一応、俺の勝ちは決まっていた。

「さすがだったね涼君、では次は私とやろうか」

師範代さんとの試合が終わり互いに挨拶を終えると次は詠春さんと対峙する。

詠春さんは木刀だがその気迫はさすが英雄と言えるものだった。

ガキィン

審判の合図を待たずしてお互いに打ち合う。

流石は英雄だ。全く隙が見えない。

「鍛錬は欠かしていませんから、技は衰えていませんよ」

「よく言うよ♪衰えているどころかキレがましてるのに♪」

詠春さんの攻撃は早いがこっちが反応できるギリギリまで手を抜いてくれている。

正直出し惜しみをしたくなかったので距離をとると、“神斬の太刀”を展開する。そしてその場で魔力を込め、詠春さんに向かって振るう。

「弐の太刀“空裂き（そらさき）”」

この技は“地砕き”とは違い斬撃を飛ばす。その威力は“地砕き”には少し劣るがかなりの高威力だ。

この技にはかなりの自信があった。

「斬魔剣！！」

ただ、英雄には通用しなかった。魔力で作られた斬撃を詠春さんは斬る。ダメージは欠片も見られない。

「斬空閃！」

“空裂き”の反動で力の入らない身体に詠春さんの放った“斬空閃”が直撃する。

結局、詠春さんには一撃も入れることはできなかった。

まだまだ英雄を相手をするには力量が足りないようだ。

この日からは詠春さんが稽古をつけてくれた。詠春さんはスパルタでこちらの限界ギリギリで訓練を行う。

こうして、京都での二週間が終わる。

このひと月、詠春さんとラカンのお陰で近接戦闘の技術は目を見張るほど成長したとあさぎに言われるが正直自信がない。

詠春さんやラカンさんは言わずもがな、師範代さんやトサカさんにも勝利したわけではないからだ。

師範代さんは一本を取ったものの完全な勝利を収めた訳ではない。

まあ、六歳では充分だとか詠春さんは言ってくれたが……

そうして1ヶ月の旅を終えて麻帆良に帰ってくる。たった1ヶ月だったがこの麻帆良の雰囲気が懐かしく思う。

そしてようやく家に戻ってきた。家の玄関を開けて大きな声でみんなに帰ってきたことを伝える。

「ただいま～！！」

俺の声に反応してみんなが玄関に集まってくれる。

「「「お帰りなさい！！」」」

こうしてみんなの顔を見ると帰って来たんだなと思う。

「疲れてるでしょ。食事は作ってるから、その時にお話しをきかせてね」

「無事でよかったよ。ゆっくり休んでくれ」

「涼く～ん、お話しいっぱい聞かせてね～」

俺のひと月の修行の旅は終わり、そしてまた麻帆良での毎日が始まる。

◇

次の日、図書館島に行きクウネルたちに旅の報告をする。

報告が終わると、エヴァが旅の成果を見たいと言って、チャチャゼロとエヴァの二人と戦うことになった。

目の前にはエヴァとチャチャゼロがいる。俺が構えるのと同時にエヴァとチャチャゼロが攻めてきた。

「“魔法の射手　氷の５７矢”」

「ケケケ、行クゼスズミ」

エヴァが魔法を放ち、チャチャゼロが一気に踏み込んでくる。

エヴァが放った“魔法の射手”を回避しつつ、チャチャに対してカウンターを叩きこむ。

旅に出る前の俺ではエヴァの“魔法の射手”を避けることはできな

かったし、チャチャゼロの攻撃にカウンターを合わせることはできなかっただろう

リーチの差でチャチャゼロにカウンターが決まり、チャチャゼロは後方に吹っ飛んだ。

「チャチャゼロ！！」

エヴァがチャチャゼロに気を取られているうちに“神斬の太刀”を展開する。

「弐の太刀“空裂き”」

そしてエヴァに向かって全力で“空裂き”を放つ。

“空裂き”は真っ直ぐエヴァに向かって飛んでいき……

「なにぃぃ！！」

チャチャゼロに気を取られて反応の遅れたエヴァに直撃する。その間に魔法の詠唱を始めた。

「来たれ地の精花の精、夢誘う花纏いて蒼空の下、駆け抜けよ一陣の風！！」

エヴァの姿が現れる。ダメージは直撃だったので通っているようだ。

「“春の嵐”！！」

「“断罪の剣”！！」

全力で魔法を放つが立て直したエヴァが“断罪の剣”で迎撃をされる。

俺の“春の嵐”とエヴァの“断罪の剣”は拮抗するが、徐々に均衡が崩れ俺の魔法が押されている。

高位の魔法はまだ覚えたてなのでやはり練度が足りなかったようだ。

結局魔法の撃ち合いは俺の敗北に終わった。しかし、エヴァは満足そうだった。

「確かに威力はまだまだだったが覚えたてと言うには上等だ。近接戦闘も私の“魔法の射手”を回避しながらチャチャゼロにカウンターを合わせられるほどレベルアップした」

「そうですね、年齢を考えれば異常なほどの力量です」

エヴァの機嫌は良い。クウネルもレベルアップした力量に満足しているようだ。

「魔法世界での戦闘経験がお前の力量を底上げしたんだろう。やはり、実戦が一番だな」

こうして旅の報告も終わり、俺の旅は終了を迎えた。

第9話　基礎は大切ですね（後書き）

作者は明日から少々忙しくなりますので、これまでのように連続投稿ができないと思います。

更新予定日はきちんと守りますので、これからもよろしくお願いします。

第１０話　見習いって思ってるよりダルい（前書き）

更新予定日は守れました。

第１０話　見習いって思ってるよりダルい

旅から戻ってきてから数日後、俺は学園長に呼び出された。

ちょうど休日であったため、女子中等部に行くまでの道のりは平日と比べ人が少なかったが、それでも部活動をやっている、女子中学生が数多くいる。

女子たちは女子中等部のエリアにいる俺を訝しんでいるようだったが、笑顔で手を振ると向こうも手を振り返してくる。

わざわざ、学園長に会いに行くために女子中等部に入らなければいけないというのはどうかと思う。

どこかの校舎に入らず、学園長専用の建物でも作ればいいのだ。

だいたい、俺のような男子は女子校に行くというだけでも恥ずかしい。

俺はまだ見た目は子どもだからいいが、もっと上の学生は肩身が狭くなるのではないのか。

なんて考えてみたが、学園全体に掛けられてはいる認識阻害のお陰でその辺は問題ないらしい。

認識阻害のお陰で普通に女子校に入れるとか、一般男性からすれば喜ばしい限りだろう。

まあ、麻帆良だけに限るだろうし、麻帆良の外では警備員に連行されるだろうけど……

学園長室までの道を優しいお姉さん方に聞きつつ、学園長室まで向かう。

途中、なんでここにいるの～？とか何をしに来たの～？などと話しかけられるが、学園長のせいにする。まあ事実なんだからしょうがない。

お姉さん方に話しかけられたせいで指定された時間を少しオーバーしているが何とか学園長室前にたどり着いた。

コンコンっと学園長室の扉をノックする。

「入ってよいぞ～」

「失礼します」

中から許可の声が聞こえたので、学園長室の中に入るとそこには学園長とあさぎ、そしてメガネをかけた男性がいる。

「よく来てくれたのう司条涼君、ワシはこの学園の学園長と関東魔法協会の理事をやっておる近衛近右衛門じゃ」

学園長は挨拶をしてくるが、俺は学園長の後頭部の凄さに驚き、挨拶が遅れる

こんな人間が人類に存在するんだ～。

「え～と、司条涼です」

こちらが挨拶すると、もう一人のメガネの男性が声をかけてくる。

「僕は高畑・T・タカミチ。ここにいる朝霧とは昔からの仲間で、『紅き翼』のメンバーだったんだよ」

高畑は挨拶をしてくるがわざわざ『紅き翼』を強調する意味はあるのだろうか。

なんというか子どもに自慢して憧れてほしいという風にも俺には見える。

『ちなみにタカミチはボクたちイレギュラーのことは知らないから♪』

あさぎが念話で伝えてくる。急なことで驚くが、どうやら高畑と学園長は俺が『紅き翼』に反応したように見えたらしい。

「やっぱり紅き翼には憧れる？」

「あっ、ええと、はい」

何言っているんだろうコイツ、などと思いつつもとりあえず肯定しておいた。

憧れていると言われたのが嬉しかったのか高畑は喜んでいる。

『あと言っておくと、キミはボクとエヴァの弟子ってことになっているから♪、それに二人はクウネルのことも君がラカンに会ったこ

とも知らないよ♪』

どうやら高畑は本当に何も知らないようだ。というより仲間にすら信用されていないらしい。

「君が浅葱君の弟子というのは聞いておる。それに浅葱君の進言もあってな、君を図書館島司書見習いにすることにしたのじゃ」

急に告げられたことに驚きを隠せない。

「なぜ、図書館島の司書見習いに？」

「ん？知らんかったのか？浅葱君は図書館島の司書を勤めておるのじゃ、他にも広域指導もやっておるぞ」

あさぎのことは知らなかったが、どうやらコイツの勤務先は図書館島らしい。図書館島が勤務先であればクウネルたちと研究ができるし、あそこにある魔導書関係も自由に扱えるからだろう。

上手く隠したもんだな、と思いつつ学園長に向き直る。

「わかりました。それで報酬は？」

普通の初等部の魔法生徒の場合、魔法先生からの指導を受け、侵入者と魔法先生が戦ったあとを元通りにすることで魔法の実習を行う。

あくまでも実習という名目なのでこの場合は報酬がでない。

しかし司書見習いの場合、魔法の実習となるのが身体強化ぐらいしかないので、魔法の練習機会が少ないのだ。

いくら俺がクウネルたちから指導を受けているとはいっても、不公平感がある。

というふうに学園長たちを説得する。

学園長たちは浅葱君から指導を受けているのだから……などとほざいていたが、あさぎも俺を擁護してくれたため、報酬がでるようになった。

ちなみに報酬は時給五百円で俺の学年が上がるたびに増えていくようにお願いした。

まあ、基本的に毎日図書館島には行くので、かなりの金額を稼ぐことはできるだろう。

学園長との話し合いが終わり図書館島に行く。その際腕章を貰った。どうやらこれが司書見習いの証しのであるらしい。

図書館島に着いてからは、司書の仕事についてあさぎに教えて貰う。

司書の仕事はまず本の管理や場所の把握、そして図書館島にいる人の安全を守ることらしい。

本の貸し出しなどは専門の人や学生がアルバイトでやってくれるため、その辺りの仕事は殆どないとあさぎは言う。

ただ、本の配置を替えたり、本が間違った本棚に入っていれば、それを元に戻したりするようだ。

あさぎは本と本棚に魔法を掛けて勝手に本が本棚に戻るようにしていると言っていた。

しかし、それは一部の本と本棚だけで、新しく入ってきた本などにも魔法を掛けなくてはいけないから結構面倒らしい。

ちなみに俺の仕事は図書館島の警邏と本と本棚に魔法を掛ける作業、そして本の整頓を行うことになった。

いくら魔法で本や本棚の位置がわかるとはいえ、整頓はかなり面倒くさい。

まあ、一日三時間程度で良いと言われたから三時間だけはきっちりと働く。

司書見習いとして働く傍ら、クウネルたちとの訓練も続いていく。

そんな、ある日のことだった。

クウネルたちに呼ばれ、図書館島の深部にあるクウネルの住処に行く。

そこには裕奈以外の目的に関わっているメンバーが全員揃っていた。

「来ましたか」

「どうしたんです？急に呼び出して？」

「珍しいな、わざわざ全員集めるとは……」

ここに呼び出されたメンバーが呼び出されたことに疑問を持ち問いかける。

いや、あさぎは何時も通りだから、集められた理由を知っているのだろう。

「実はですね、ナギの子どもについてです」

「生まれたのか!?」

「いえ、もう既に生まれています」

原作の主人公がもう生まれている。まあ時期的には全く不思議でも何でもないんだが……

「情報が遅かったな」

「はい、情報が隠されていて調べのに手間取りました。恐らく元老院への対策のためでしょう」

「しかし、遅かれ早かれ漏れることではないでしょうか?」

明石さんがクウネルに問い掛ける。元老院はナギやアリカ姫にあれだけ辛酸を舐めさせられたのだ、その子どもについてもマークはつけているだろう。

「そうですね。しかし、重要なのはそこではありません」

クウネルの言葉にみんなの緊張感が高まる。

そしてクウネルは口を開いた。

「その子どもは“双子”であるようです」

「なんだと!!」

俺はここで新たなイレギュラーが現れたことに驚く。

「まあまあ落ちついて♪」

あさぎの変わらない態度が気になった。

「どうしてそんなに落ち着いていられる」

「ん~♪どうしてって言われても予想はしていたし」

「予想していただと?」

なぜコイツはイレギュラーが来ることを予想できたのかわからない。

「うん♪だって今までいたイレギュラーを思い出してごらん♪」

あさぎに言われたので今までいた俺たちと同じイレギュラーを思い出す。

まずはウェントス。エヴァの兄で『完全なる世界』のメンバーだった奴だ。

次に『紅き翼』のイレギュラー。確かナギと同い年だったはずだが

もう死んでいる。

そしてあさぎ、『紅き翼』のメンバーで高畑と同世代。

最後に俺。裕奈たち、つまりは原作ヒロインたちと同い年である。

そして今回のイレギュラー。

「なるほど、わかったぞ」

そう、俺たちの共通点それは……

「イレギュラーは原作に登場する人物たちと同年代になるのか」

そう、俺たちイレギュラーは全員が原作キャラと同年代なのだ。

ウェントスはエヴァと、

死んだ奴はナギと、

あさぎは高畑と、

俺は裕奈たちと、

そしてその子はネギと、

全員が各世代に別れている。

「ちなみに新しいイレギュラーは女の子だよ♪」

「まだ、その娘が知識持ちなのかは確認できていません。もしかしたら知識を持っていない可能性もあります」

確かに今までがそうだったからといって次もそうであるとは限らない。

それにもし知識を持っていたとしてもソイツがどういう人間かわからないのだ。

「それに悪魔の襲撃の事もあります」

そう、元老院が仕掛けてくることも気にしなくてはならない。

「介入すれば村の人の犠牲は防げるでしょう、しなくてもおそらくこの麻帆良には来ることになります」

俺たちは決断に迫られる。介入するべきかしないべきか。

すれば村の人を助けられるが、介入することで元老院に目をつけられる可能性がある。

介入しなければ、村の人は石化する。当然何人かの犠牲はでるだろう。

「誰にも気づかれないように村人を助ける。見捨てるのは論外だし、気づかれて不利になるなら気づかれないようにすればいい」

俺の言葉にみんなは納得しているようだった。

まあ、実際自由に動けるのは俺とあさぎであろう。明石さんは学園

システムの管理があるし、夕子さんは一応関東に所属している。

あさぎも立場上自由に動けないがあくまでどこかの勢力に属しているわけではない。

もう一人、エヴァがいるが彼女は自由であるものの、悪名高くいろいろ面でマズいし、そもそも人助けに興味がない。

こうして俺たちは悪魔襲撃に対応することになった。

その方法であるが、まずクウネルがネギたちを遠見の魔法で監視、悪魔が来たらエヴァのゲートかあさぎの魔法具でイギリスに転移をする。

その後はあさぎの魔法具で姿を隠しつつ悪魔を退治し、可能ならばイレギュラーの子に接触し情報を引き出す。

そしてまた転移で麻帆良に帰ってくるというシナリオだ。

正直、上手くいくかはわからないが頑張るしかない。

こうして、俺たちの話し合いは終わり、また一日が過ぎていった。

第１０話　見習いって思ってるよりダルい（後書き）

原作開始までまだまだ先は長いです。

こんな作品ですが頑張って書いていきたいと思います。

第１１話　たまには息抜きも必要だと思う（前書き）

そこそこ片付いたので更新ペースを上げて頑張りたいと思います。

ゼミの交通費だけで今月一万円が飛んだ～～～

……泣きたいです。

第１１話　たまには息抜きも必要だと思う

あれからというもの、俺は小学校に通いながら司書の仕事をこなしつつ、さらにクウネルたちの修行を受けるというかなりハードな日々を過ごしていた。

裕奈もめきめきと魔法の技術が上達し、無詠唱でも魔法の射手ぐらいなら放てるようになっている。

原作でも裕奈は射撃が得意だったが、今の裕奈は魔法の射手で同時に二十個の的に命中させられるほど、魔法の射手をコントロールできている。

ちなみに俺は、魔法の射手を的に当てるのは苦手だ。

というよりも魔法の射手を数多く撃って狙った位置の周辺を攻撃をする方が多いので必然的にそちらの方が得意になる。

しかし、この前裕奈と魔法の射手だけの戦闘訓練を行ったら、こちらの矢は全て撃ち落とされて、俺は裕奈の矢を撃ち落とせずに負けてしまった。

こちらの方が戦闘経験も多いのに負けてしまったことでエヴァたちが地獄の特訓をやらされたことはいうまでもない。

どうやら俺は繊細な魔法のコントロールが苦手のようだ。

魔法の射手や紅き焔などの射撃訓練では、どうしても狙った位置か

ら少しズレてしまう。

これでは高位の敵が相手になったとき辛い。

まあ、魔法だけではなく接近戦もできるし、などと口を滑らしてしまったら、それをエヴァに聞かれてしまい、さらに訓練メニューが増えた。

エヴァが言うに魔法だけでもしくは接近戦だけでそれを得意とする人間に勝てるレベルにないといけないらしい。

つまり、短剣装備の近接戦闘だけでラカンや詠春さんに勝ち、魔法だけでエヴァやクウネルに勝てるレベルにならないといけないとのことだ。

いやいやいや、無理だろ。

あのバグキャラであるラカンや人外のエヴァの専門分野で勝てなんて流石に鬼畜過ぎる。

あれから一度旅行という名目でクウネルを除く全員で魔法世界に行ったが、結局魔法を使ってもラカンが相手では手も足も出なかった。

その後、リーチがもう少しあればそこそこ勝負にはなるとは言われたので多少は自信になったが……

ちなみにトサカさんとも戦ったがラカンに弟子入りしているからか、かなり実力を上げていた。ちなみに勝負は俺の負けだった。

……まさか、“春の嵐”を気合いで防がれるとは思ってもみなかっ

た。

あと、“神斬の太刀”はラカンにダウンをさせる程度には威力が上がり、さらにもう一つ新しい必殺技も得た。

この話しは後においておくとして、今、俺は裕奈と街に買い物にきている。

魔法の射手対決のときに賭けをしていて、俺が負けたら街に一緒に遊びに行くことになっていたのだ。

まあ、遊びに行くといってもまだ小学生だ。

デートと言うには程遠いし、ただ麻帆良の外に出ただけとも言える。

ただ、俺はそんな事も考えつかなかったので財布のなかには諭吉さんが三枚ほど入っている。

司書の仕事で稼いだお金だ。大体、時給が五百円、月に二十日、一日に三時間働くとして、２０×３×５００円＝３万円なので今持っている金額はひと月分の給料と同じだ。

まあ、学年が一つ上がるごとに時給の百円アップを約束させたのでこれからはさらに増えるだろうが……

裕奈はそんな事知らないから、様々な店を見てまわる。

それはおもちゃ屋であったり、服屋であったり、花屋であったり、本当にいろいろなところを見てまわった。

今は喫茶店に入って食事をしている。当然お金は俺が支払う。

流石に金持ってる人間が割り勘は恥ずかしいだろう。

裕奈はナポリタンとオレンジジュース、俺はサンドイッチとサラダ、あとはりんごジュースだ。

「涼くん、サンドイッチちょうだい？」

「はい、どうぞ」

裕奈は俺のサンドイッチを欲しがっているので、皿を突き出して渡す。

「う～ん、おいしい！！じゃあ涼くん、はいっ！！」

そう言って裕奈はナポリタンをフォークに絡め俺の口元に持ってくる。

「あ～んっ♪」

裕奈はここでもあ～んをやってくる。流石に店の中なので止めさせようとする。

「あ～ん」

「えと、裕奈？」

「……あ～ん」

どんどん尻すぼみに小さくなる声に罪悪感が湧く。

「裕奈、あ～ん」

流石にこれ以上はマズいと思い、口を開き裕奈に催促をする。すると裕奈は機嫌を直し

「あ～んっ♪」

と口の中にナポリタンを入れてくれた。周りからは生暖かい視線を感じる。

そのあとデザートを注文し食べる時も同じ事があったのは言うまでもない。

「そこのお嬢ちゃんたち、みていかないかい？」

食事が終わり、また街を散策して、ちょうど日が暮れて麻帆良に帰ろうとしている最中に声を掛けられる。

どうやら露天商のようだ。地面には箱に飾られた様々なアクセサリーが置かれている。

「涼くん、これキレイだよ」

裕奈が指輪やネックレスなどを見て目を輝かせている。

よく見てみると、ここにあるアクセサリーには魔力が込められていた。

たまに魔法使いの道を諦めた人がこうやって露天で魔法具を売るというのは聞いたことがあった。

そういった魔法具は一般人用にほんの少し幸運に恵まれたり、縁に恵まれたりする術式が刻まれているらしい。

俺は魔法具に関してはそれほど詳しくないので、どんな術式が刻まれているのかはわからない。

ただ魔法具だし、嫌な感じはしないので買ってみることにする。

「裕奈どれか欲しいのある？」

すると裕奈は近くに飾られている指輪を指差した。

「ん～、これがいい！！」

「じゃあこれと、あとお揃いの隣の奴を下さい」

「はいよ、二つで四千円だ。お嬢ちゃんたちの指には入らないだろうからチェーンもオマケしてあげるよ」

そういって、露天商は俺たちにチェーンを通した指輪を渡してくれる。

「裕奈、ちょっと後ろむいて」

裕奈に後ろをむかせて、チェーンを首につけてあげる。

「はい、できたよ」

裕奈は首元にある指輪を握りしめ嬉しそうにしている。

そして俺のやつは裕奈がつけてくれた。

「ははっ、仲がいいんだな。じゃあさらにオマケしてやるよ」

露天商はそう言ってさらにオマケを俺たちに渡してくれる。

裕奈には陶器のようなものでできた白い雪の結晶がついてある髪留めが渡され、俺には同じようなネックレスが渡される。

俺たちはそれをポケットにいれて、露天商にお礼を言って帰ることにする。

「ありがとうございます」

「ありがとー」

そして裕奈の手を引いて帰る。

ふともう一度、露天商の方へ振り返るとそこにはもう既に露天商はいなかった。

あまりに消えるのが早過ぎるのでおかしいと思ったが、もう日が暮れているので、急いで帰ることにする。

「ねえ、涼くん」

「なに、裕奈？」

「大きくなったら、私が涼くんの“魔法使い（ミニステル・マギ）の従者になるから」

裕奈の宣言に驚いたが同時に嬉しくもあった。

「うん、喜んで待ってるよ」

こうして裕奈との休日は終わった。

◇

裕奈との休日が終わり、久しぶりにあさぎに訓練をつけて貰っている。

基本的にあさぎは俺の訓練には参加せず、魔法薬などで俺を回復させるのが主だ。

「いくよ～♪発動“雷の暴風”！！」

あさぎは手に持ったカードに魔力を込めるとカードは魔法となって、俺を襲う。

「“氷楯”！！」

俺はすぐに“氷楯”を展開する。“雷の暴風”は“氷楯”にぶつかるが貫通するには至らない。

「発動♪“雷の斧”」

しかし、いつの間にか接近していたあさぎに“雷の斧”を当てられ、たまらず倒れ込んだ。

「ボクに勝つにはまだまだだね～♪」

「いやいや、流石に無詠唱で“雷の暴風”がとんでくるとキツいって」

確かに相手の戦い方に文句を言っても仕方がない。

あさぎの戦い方、それはカードを使った戦い方だ。

「だってそれがボクの戦い方だし♪」

陰陽道の呪符と魔法の巻物の技術を応用し、カードに魔法を込めることで即座に発動する事ができる。

メリットとしては即時発動、魔力消費をしない、誰にでも使えることだ。

デメリットは作ったカードの魔法しか使えないこと、使いきりの消耗品ということ、そして、普通に放つより威力が数パーセント落ちることだろう。

魔法使いにとって即時発動の恩恵は高すぎる。しかしコイツの場合、カードなんて使わなくてもエヴァと撃ち合いが行えるほど強いのだ。

一度何でカードなんか使っているのか聞いたことがある。

そのとき、あさぎは

「だって詠唱ってめんどくさいし♪　あとスペルカードっていいよね♪」

とほざいた。というか東方かよっ！！と突っ込みたくなったが、こっちでも呪符や巻物などがあるから別に今更だなと納得しておいた。

「まあ、魔法戦闘もそこそこできるようになってきたね♪」

「まあ、お前らに教わっていれば嫌でも上達はするだろ」

あさぎたちともそこそこ戦えるようにはなった。

勝ち星こそないが、全力戦闘であればあさぎとエヴァ相手に引き分けに持ち込んだこともある。

まあ、油断しているところに魔法を撃ち込んでようやく得た引き分けだったが……

「アハハ♪まあ、師匠がいいからね♪伸びて貰わないと困るよ♪」

あさぎは笑顔で言うが、正直まだまだ俺の実力は足りないと思う。

「ボクたちには目的があるからね。それを達成するためにはどんな敵にも勝てるようにならないといけない」

コイツと一緒にいて気づいたことがある。あさぎの何時もの元気は割と無理してやっているところがあるということだ。

確かに昔はこれが自然体だったんだろう。

しかし、大戦が終わってからは少し違和感があるとクウネルが言っていた。

俺に会ってからは少しずつ、悩みや本音を話すようになったらしい。

「気負ってもしょうがないだろ。結局できることしかできない。だからできることを増やすために今を頑張るんだろ」

「くす、生意気だよ♪涼クン♪」

そう言ってあさぎは俺にでこぴんをする。その笑い方は自然だったと思う。

第１１話　たまには息抜きも必要だと思う（後書き）

どうせなのでクリスマス用にアンケートを取りたいと思います。

クリスマスに番外編をアップしたいので、みなさんが好きなヒロインを一名、感想にお書き下さい。

アンケートは１２月１３日まで取りたいと思います。

原則一人一票でお願いします。

第１２話　その感情は……（前書き）

新たなオリキャラ登場です。

あとがきにてアンケートの説明をやっています。

第１２話　その感情は……

◇

それは唐突に始まりました。

何時も通り私は学校が終わり、帰宅して家族と夕食を食べてお風呂に入り、部屋で雑誌などを読んだあとベッドで寝る。

そんな、何時も通りの変わらない何処にでもあるような平凡な一日を終えたはずでした。

次に目を覚ました時には知らない人たちに囲まれていました。

「よかった！無事だったのね！！」

金髪のキレイな女の人が私を心配してくれています。

彼女は明らかに外国人でした。

あれ、何で英語を理解できたんだろう。

私は自慢ではないですが語学は苦手でした。

しかし、彼女の喋った言葉は英語だったんですが、意味も分かりましたし、英語自体が頭の中で理解ができます。

ですが、何故か身体が熱っぽく、頭痛が酷い状態なので深く考える

ことができません。

「……あなた達はだれ？」

彼らに伝わるように何故か話せるようになった英語で話しかけます。

「ワシらのことを覚えておらんのか？」

「私のこともわからないの？」

「……だれ？」

立派な髭を生やしたお爺さんや先ほどの女性が聞いてきますが、知らない人のことはわかりません。

意識が朦朧としていますが、周りの話し声は聞こえます。

「どうやら、湖に落ちたショックで記憶が無くなっているみたいだ。まあ四十度の熱もあるし、ゆっくり寝かせてやると良い」

「どうやら、ぼーずが湖に飛び込もうとしたのを止めて自分が落ちたようじゃ」

「ぼーずも今回ばかりはイタズラがすぎるぞい、フツーの人間なら死んどるぞ」

どうやら、私は湖に落ちて熱を出しているようだった。なら、この体調の悪さも納得がいく。

「ぼーずはどこじゃ、ちょっとお灸を据えてやらねば」

「まあまあスタンさん、坊主も悪気があったわけじゃないですし」

「お主たちはぼーずに甘いわい」

周りにいた人たちの会話が終わり人影が少なくなる。

「アリサ、ゴメンナサイ」

いつの間にか隣にきた子どもが私の名前を呼ぶ。その顔はなんだか不満そうだ。

しかし、何故私の名前を知っているのだろう。

「こらっ！ネギっ！！ちゃんとアリサに謝りなさい」

「だって、ネカネお姉ちゃん」

「だってじゃないでしょ」

しかし、ネギと呼ばれた子どもは私に謝るのが嫌なのか走り去っていく。

私の意識はもう限界だったのでその日はそのまま眠りについた。

何日か経ち、ようやく動く事ができるだけの体力が戻る。

見舞いに来てくれた人たちの話しを聞いていると、私は記憶喪失だと思われているようです。

そして、私の名前はアリサ・スプリングフィールドというらしい。
鏡を見て驚いたのが自分が外国人になっていたことでした。

あと、兄の名前はネギと言うみたいでした。

ネギ・スプリングフィールド

私はその名前に覚えがありました。確か兄の持っていた漫画の主人公の名前です。

どうやら私は彼の妹となってしまったようでした。

私が熱を出していた原因は父を呼ぼうとしてネギが飛び込もうとしたのを私が助けて、代わりに私が湖に落ちたようです。

私はその漫画を内容はあまり覚えていませんが、確かそういうシーンがあったように思います。

身体が治った後は近所の人たちに挨拶に行きます。

皆さんは私が記憶喪失ということを信じているみたいで、随分と心配してくれています。

そして、ひと月がたったある日のことです。

その日は私がこちらで始めて会った金髪の女性ネカネさんが帰ってくる日でした。

ネカネさんは従姉妹であるらしく、手紙を何度か送ってくれ私のことについて教えてくれました。

また会えると思い、話しを聞こうと思って到着を待っていたのでしが、外が騒がしいので出てみました。

すると、そこにはバケモノがいました。

「嬢ちゃん早く逃げろ!!」

「こっちへ!!早く!!」

そう言われ、私は何時もお世話になっているパン屋の夫妻とその子どもで私と仲のよい女の子と一緒に逃げます。

森の中を走って逃げますが、足場が悪く躓いて転んでしまいます。

「ＧＹＡＡＡ!!」

すると目の前に悪魔が現れました。悪魔は口を開くとそこに光りを集めます。

「危ない!!」

怯えて動けない私と悪魔の間にパン屋の夫妻が割り込み私を庇います。

そして悪魔の放った光を浴びて石になってしまいました。私と仲がよかった女の子も同じです。

石になっていない私に悪魔が近づいてきた時、私の目の前を強い力の奔流が襲いました。

悪魔はそれを喰らい消えていきましたが。さっきの力は石化したパン屋の一家も襲っていました。

私はすぐさま彼らを探します。そして彼らは見つかりました。

――――コナゴナになって

「いやあああああ！！！！！！」

私はコナゴナになった彼らをまともに見れませんでした。

そして襲いかかってきた力の発信源を見ます。

するとそこにはネギとローブを着た人間がいました。

――――アイツガヤッタ

――――アイツガアノ人タチヲ殺シタ

そう気づいたときにはそのローブを着た人間に殴りかかっていました。

隣ではネギが気絶していますがそんな事はどうでもいい。

私は目の前のローブにあの人たちの敵を討つことしか考えられませんでした。

しかし、そいつは私のお腹に拳をいれます。

そして、なにやら私に魔法を掛けました。

そして、すまないという言葉と共にそいつは消えていきます。

必ず殺してやる。私は薄れゆく意識とともにそう決意しました。

◇

クウネルから悪魔を確認したと聞き、急いで転移する。

しかし、あまりにも長距離すぎるためか目的地よい数十キロ離れた位置に転移した。

浮遊術を使い、急いでネギの村を目指す。

そして俺たちはあさぎの作ったコートを身に纏う。

このコートは着た人のことがわからなくなる認識阻害の他、様々な防御術式が刻まれてある高性能なものだ。

場所を知っているあさぎの先導で村に到着するが悪魔の数が多すぎる。

俺とエヴァとあさぎでかなりの数を倒したがそれでも減ったとは思えないほどいた。

確かに街に被害を出さないために範囲攻撃などは使っていないが、それでも最強クラスが二人いるのだ。殲滅速度が遅いとは思えない。

「どこかでコイツらを召喚している基盤がある筈だ！！潰してこい！！」

「ならボクが行くよ！！」

エヴァの言葉に即座に反応してあさぎが動く。

「私たちはコイツらを全て倒せばいい！！」

「わかってる！！一気にいくぞ！！」

気合いを入れ直し、身体強化の出力を上げる。そして悪魔に突っ込んだ。

どれくらい悪魔を倒しただろうか、今も短剣を思いきり横薙ぎし悪魔を屠る。

すると先ほどまでより数が明らかに減っている。

どうやらあさぎが召喚の元を破壊したらしい。

すると魔法が村の中を突き抜けた。

「“雷の暴風”だと!?」

「まさか村の中で範囲攻撃をするなんて」

いや、原作でナギ・スプリングフィールドがやったのは覚えているが、俺たちが介入して今は敵の数も少なくなっている筈だった。

なのにわざわざ村の中で被害が拡大しそうな魔法を使うとは……

すると村のはずれから膨大な魔力を感じる。

「エヴァ!!」

「ああっ!!お前が向かえ!!」

エヴァに言われ感じた魔力の方へと向かう。

俺がついたときには子どもが二人と石化された老人。そして女性が一人いた。

男の子が杖を持っていることから、これがネギだろう。

するとこの女の子の方がイレギュラーであるはずだ。

しかし、女の子は気絶しており話しを聞けそうな状態ではない。

それにこの女の子からはネギとは違い微弱な魔力しか感じなかった。

女の子をよく見ると頬に涙の跡があった。

俺は女の子を抱きしめる。

「ゴメン、遅くなってゴメン。間に合わなくてゴメン。助けられなくてゴメン」

俺は涙を流しながらこの娘に謝る。

恐らくこの娘は大切な人を亡くしたんだろう。

あと少し来るのが早ければ助けられたかもしれない。

あと少し俺が強ければこの娘は泣かないですんだかもしれない。

「う、ん」

腕の中で女の子が少しだけ目を開ける。

「……何もできなくてゴメン」

俺はこの娘にそれしか言うことができなかった。

そして、そんな自分が悔しかった。

◇

誰かの腕の中で目が覚める。そこにいたのは今の自分より少し年上の男の子だった。

男の子の目から涙が落ちる。

「……何もできなくてゴメン」

男の子は悔しそうな表情で言う。

よく見てみると男の子は傷だらけだった。

逃げてきたのか悪魔と戦っていたのかはわからない。

でも今はこの腕の温かみが気持ちよく、また私の意識は落ちていった。

◇

腕の中でまた少女が眠りにつく。

するとあさぎとエヴァが近寄ってきた。

「その娘が？」

「ああ、そうだと思う」

「そろそろ応援が来る。引き上げるぞ」

腕の中の少女を地面に下ろし、エヴァたちに近づく。

「では戻るぞ」

そしてエヴァがゲートを使い、俺たちは麻帆良に帰った。

今回の件は俺にとって苦い思い出となる。

今日ほど悔しい日はなかった。

今日ほど自分の無力さを感じた日はなかった。

自分に力があればもっと被害が抑えられたかもしれない。

そう考えると自分が惨めでしょうがなかった。

第１２話　その感情は……（後書き）

クリスマス番外編のためにアンケートをしています。

自分が好きなヒロインを一人、感想に書いてください。

投票の多いキャラクターとの番外編を作者が書きたいと思います。

投票数によっては本編のヒロインへ昇格するかもしれません。

ぜひ、アンケートにご参加ください。

第１３話　焦りは禁物です（前書き）

更新です。

第１３話　焦りは禁物です

今、俺はあさぎと模擬戦をしている。

「“魔法の射手　炎の８４矢”！！」

「発動“魔法の射手　雷の１００矢”」

俺の放った魔法の射手は真っ直ぐあさぎへと向かうが、あさぎはカードを使い魔法の射手で迎撃する。

あさぎの放った矢の方が多いため、相殺され余った矢がこちらに向かう。

俺はそれをヒラリと躱すと瞬動であさぎの懐に潜り込み、短剣で斬りつける。

「ん、発動“雷の斧”」

しかし、それはあさぎにあっさりと躱され、頭上から雷が落ちてきた。

「ちいっ！！」

紙一重で瞬動が間に合い、俺は横に跳ぶ。

「“火精召喚・槍の火蜥蜴３４柱”」

精霊召喚を行い、あさぎに魔法をぶつける。

しかし、それはあさぎの展開する障壁に阻まれた。

「焦りすぎだよ、集中力を欠いているせいで魔法の構成が甘い。だから威力が低くなる」

そう言ってあさぎは一気に踏み込んでくる。

短剣で迎撃するが、あさぎは“断罪の剣”を手から出して受け止める。

「ほら、近接戦闘ですら精彩に欠ける。集中しきれていない証拠だ」

あさぎが放った蹴りを俺の腹に入る。

障壁と強化でいくらか軽減されているといっても、その威力は俺を吹っ飛ばすには充分だった。

壁に叩きつけられた俺であったがすぐに起き上がって、“神斬の太刀”を展開する。

そしてあさぎに向かって思いきり振り下ろした。

「弐の太刀“空裂き”！！！」

放った衝撃波は地面を破壊しつつあさぎへと向かう。

直撃したと思ったがその瞬間、あさぎの姿は消え、俺はあさぎを見失う。

「発動“雷の暴風”」

「上かっ！！」

上空からあさぎの声が聞こえたのでそちらを見ると既に魔法が放たれている。

そして“雷の暴風”を俺は回避仕切れずに当たってしまい、模擬戦は終了した。

「お前は何をやっている！！」

今、俺はエヴァに怒鳴られている。理由は先ほどの模擬戦だ。

「戦うときは何時も集中力しろと言った筈だ。例えどんな時であろうとも、どんな状態であろうとも」

「戦場では動揺したり、他に気を取られていれば死に陥りやすくなります。だから、どんな状況であろうとも焦らず冷静でいなければなりません」

確かに俺は冷静に欠けていた。

理由は先日の悪魔の襲撃事件だ。

あの時、無力さを感じた俺はがむしゃらに努力した。エヴァやあさぎと模擬戦を何度もこなし、魔導書を読んで新しい魔法を習得したり。

「先日の襲撃事件の時からお前が焦っているのはわかっている。しかし、焦って身につけた技術など雑になるだけだ」

今の俺を戒めるようにエヴァが言った。

「お前は強くなっている。確かにまだ私達には適わんだろうが、それでも並みの魔法使いであれば、それなりの数が来ても余裕で勝てる筈だ」

だからこそ、とエヴァは言う。

「今のお前に必要なのは、感情と集中力をコントロールする術だ。それを身につけなければ、どんな技術も無駄になる」

「あなたに足りないのは精神面です。精神修行は明日から行いますので、今日はもう帰って休みなさい」

「はい……」

クウネルに言われて、家に戻ることにする。

エヴァたちに全てを言い当てられ、少しへこんでいた。

強くなろうとがむしゃらにやっていたが、その分焦りが表に出ていたようだ。

明日からはエヴァたちが精神修行を行うと言う。

多分地獄なんだろうなあ、と先の事を考えて鬱になる。

結局俺はまだ未熟で、だからこそ頑張るしかないのだ。
俺は意識を切り替えると家までの道のりをゆっくりと帰った。

◇

「やはり彼はかなり強くなっていますね」
クウネルが呟くように言う。
「うん♪さっきの模擬戦も転移が間に合わなかったら、負けてたのはこっちだったよ♪」
ボクは先ほどの模擬戦の最後を思い出す。
涼クンの放った“空裂き”を認識した瞬間、転移魔法を発動して上空へと逃れた。
あと少し反応が遅ければ直撃していただろう。
「精彩を欠いた状態であそこまでできたんだ、一般的に比べても破格の実力だろう」
エヴァの言うとおり、涼クンは強い。
あんな状態でボクと互角に渡り合ったのだ。これで精神面の修行を行えばまた更に実力はあがる。

「まあ貴様が本気を出せば、あの程度ならまだまだ余裕だろう」

「ん～♪どうだろうね♪確かにあれは全力じゃないけどね♪」

エヴァはこちらの方を見て笑う。

確かにボクはまだ全力ではない。でも、それはエヴァたちも同じだ。

ボクたちと涼クンとではまだまだ大きな実力差がある。

ネギ・スプリングフィールドが来るまでにどれだけその差を詰められるか、そしてどれだけボクたちも力量を上げられるか、それが楽しみだった。

「まあ、当分の間はアイツに負けてやるつもりはさらさらない。それはお前たちも同じだろう」

「やはり鬼ですね」

「エヴァの鬼畜～♪」

「お前たちも同類だろうが！！」

ボクたちは笑う。

こんな時が続けばいい……そう思った。

◇

あれなら数年が経ち小学校を卒業して、中学への入学を控えた春休みの日だった。

俺たちは詠春さんから手紙を貰い京都、関西呪術協会へと足を運んだ。

今、俺の隣にはエヴァとあさぎ、そして長い黒髪の女の子がいる。

「う〜ん、お父様が帰ってこいゆうから帰るんやけど、すずくん理由知らへん？」

「まあ、知ってはいるけどまだ教えたらいけないことになっているんだ、だから向こうに着くまで我慢して木乃香」

「すずくんがそう言うなら了解や〜」

そう、この女の子は木乃香だ。

行くところは同じなので護衛を兼ねて、一緒に行くことになった。

俺と木乃香は仲が良い。その理由は簡単で彼女は図書館探検部に入っており、司書見習いである俺とよく会っているからだ。

原作に出てくる図書館探検部のみんなとは同い年ということもあり、それなりに親しくさせて貰っている。

特に綾瀬夕映とは仲が良い。というか彼女は子ども離れした思考を持っているので、子どもじゃない精神を持っている俺とは話しが合う。

木乃香たちは本を探すときに俺に頼ってくる。
そのためか話す機会も多くなり、必然的に仲良くなる。
そして裕奈がバスケ部に入り、俺も明石さんに言われ部活に入ることになった。
俺は運動部には入りたくはなかったので、ちょうど木乃香が誘ってくれた占い研究会に入った。
占い研究会ではたまに未来予報の魔法を使い的中率を高くしている。
それに学園祭のときや、ひと月に何度かやる路上の占いでお金を稼ぐことができるので楽しい。
そして関西呪術協会にたどり着くと以前来た時と同じようにたくさんの巫女さんが出迎えてくれた。
そして、木乃香たちと一緒に詠春さんに挨拶に向かう。
離れの一室に入ると結界が張られた。そこには詠春さん、木乃美さんがいる。
「お父様、お母様、二人とも久しぶりや～」
「これこれ木乃香」
「久しぶりやね木乃香」

木乃香が二人に抱きついた。詠春さんたちも木乃香も久しぶりに会えて嬉しそうだった。

「それでお父様、うちに急に帰ってこいなんてどうしたん？」

木乃香は急に実家に呼び戻されたことについて詠春さんに聞く。

「木乃香よく聞いてくださいね」

「わかったえ」

そして詠春さんは木乃香に今まで秘密にしていた魔法のことについて話した。

話しの内容の中には、木乃香の持っている莫大な魔力のことや、関西呪術協会のことについて、木乃香が今まで狙われていたことなどもある。

木乃香は始めは魔法について知り、嬉しそうな表情をしていたが自分の立場のことについて聞いていくうち、表情がどんどん暗くなっていく。

「木乃香が魔法を学びたいというなら、そこにいるエヴァや浅葱君たちが教えてくれることになる」

「待て詠春、関西呪術協会はどうするつもりだ？」

エヴァがそう聞く。確かに関西呪術協会の長の娘である木乃香が魔法を覚えるのであれば、陰陽道の方が良い筈だ。

「関西は別の者に継がせますよ、元々木乃香には継がせるつもりはありませんでしたから」

詠春さんは晴れ晴れとした表情で言った。家族に秘密にし続けていたことを言えて気が楽になったのだろう。

「でも木乃香、このことはお義父さんには内緒にしておいてくれ、お義父さんにバレるとろくな目に遭わないだろうから」

「うん、わかったえ」

木乃香は素直に頷いた。詠春さんが言うには、学園長は関西の長が身内ということもあり結構好き勝手にやっているらしい。

関東魔法協会が関西呪術協会を下にみる原因もここにある。

そのせいで詠春さんたちの立場に若干の影響が出てきているようだ。

これを機に関西は勢力を強化し、関東と対等な関係にしようと努力していると言った。

あまりに酷すぎるようであれば学園長とも縁を切ることを辞さない覚悟だと言う。

「うちは魔法を学びたい。だから、よろしくお願いします！！」

木乃香は俺たちに向かって頭を下げる。

「魔法は良いことだけじゃない。辛いことがたくさんあるし、苦しいことや目を背けたくなるようなこともたくさんある。それでも学

ぶの？」

あさぎが木乃香に向かって覚悟を問いかける。

まだ木乃香は魔法がどんなものかちゃんと理解していない。

多分憧れの気持ちの方が強いだろう。

だからこそ、こうやって釘を刺し決意を問う。

「まだ、それがどんなんかわからへんけど、でもうちは魔法を学びたいです！！」

木乃香は少し悩んだが真剣な表情であさぎの問いにかえす。

あさぎはその表情に納得し、エヴァもとりあえずは満足そうな表情をしている。

「わかったよ♪教えられる全てを教えてあげる♪」

「はいっ！！」

あさぎと木乃香の会話が終わり、木乃美さんが手を叩く。

すると部屋に張られていた結界は消えた。

「なら、今日は宴や。しっかりと楽しんでいってな～」

木乃美さんの一声で俺たちは部屋を移動し、その日は一晩中楽しんだ。

第１３話　焦りは禁物です（後書き）

只今、アンケート中

クリスマスに番外編を掲載する予定です。

皆さん好きなヒロインを一名とこの作品の感想など一言を添えてお書き下さい。

結果によっては本編のヒロインになる可能性があります。

現在、エヴァ　２票

……少し寂しい状態ですね

よろしくお願いします。

第１４話　協力者は……（前書き）

この小説を読んでくださっている皆さんに感謝を申し上げます。

皆さんの感想が作者の力になっていきます。

というわけで予定日の投稿です。

第１４話　協力者は……

木乃香があさぎたちに弟子入りすることが決まり、魔法の授業を行っている。

結局京都には三日間ほどしかいなかったが、木乃香は俺と詠春さんの鍛錬を見て感心していた。

そして麻帆良に帰り、図書館島で訓練を行う。

ここはクウネルたちの領域で学園長も覗くことはできないからだ。

木乃香が魔法を学んでいることを知られたくない以上最適な場所でもある。

今はちょうど魔法についての簡単な講義と過去に起こった大戦の全てについて夢見の魔法を使って見せている。

この場には裕奈もいる。中学生になるにあたり、夕子さんが全てを話すようにエヴァたちに頼んだのだ。

明石さんはこのことに渋い顔をしていたが、夕子さんが裕奈なら大丈夫と強く説得し、これを了承した。

木乃香の方は既に詠春さんたちから許可をいただいているので問題はない。

二人は大戦の凄惨な光景に怯むものの目を逸らさず、真剣な表情で

それを見ている。

彼女たちは強い。

正直、俺は目を逸らしたくなったし、あんなにしっかりと見れていたかというと自信がない。

そして明かされる大戦の真実。

俺は自分たちの目的を再確認するが、彼女たちの目にはどう映るだろうか。

全てを見終わると、彼女たちはお互いの顔を見つめ合い、そして頷き合う。

「私らも手伝うよ！こんなの見たら放っておけないじゃん」

「うん、うちはまだ魔法習い始めたばかりやけど、このままやったら大勢の人が不幸になるんやろ。ならできることをうちはしたいんや」

二人は即座にそう言った。さっきまであんな凄惨な光景を目の当たりにしていたにも関わらず、その声には躊躇いがなかった。

しかし、その手は震えている。当然だ。この世界に関わると自分もいつあのような目に逢うのかがわからない。

彼女たちの場合、女の子であるから傷つけられたり、殺されたりするよりも違う目に逢わされる可能性もある。

そんなことは彼女たちも理解しているのだろう。だからこそ震えているのだ。

「ふん、なら最低限使えるレベルにはしてやる。私の指導は厳しいぞ」

「自分の身は自分で守らないといけません。あなた達には涼君と戦えるぐらいまでは成長して貰います」

エヴァとクウネルはそう言うが、残り短い期間でどこまで伸びるか不安ではある。

「「はいっ！！」」

しかし、二人の返事を聞くともしかしたら予想もつかないくらい強くなりそうな気がした。

◇

裕奈たちが魔法の訓練をやっている間、俺は超包子に来ていた。

理由はもちろん

「待たせたネ」

彼女に会うためだ。

未来人にして火星人、麻帆良最強の頭脳である超鈴音。

原作では未来を変えるために現代にやってきて、世界に魔法をバラそうとした。

しかし、俺たちイレギュラーの介入でもしかしたらこの辺りも変わっているかもしれない。

「わざわざ私を呼び出すなんて、愛の告白カナ？」

超はふざけている。その態度を崩してやる。

「なんで始めて会ったやつに告白しないといけないんだよ。なあ未来人？」

超の表情は変わらない。

「何のことカナ？」

「まあ、惚けようがどうでもいいんだ……お前の力を貸して欲しい」

俺が頭を下げるとそれには超は驚いているようだった。

正直、俺たちの計画は芳しくはない。

とは言っても魔法世界を現実のものにするための儀式はなんとかできるまでは漕ぎ着けている。

今、足りないのは異世界を創造するか、魔法世界を移すことのできる異世界を探す手段と魔法世界を異世界に移すための手段だ。

俺は超に対し全てを話す。これはクウネルたちにも許可を得ている。

計画が進んでいない今の状況では利用できそうなものは利用しなければならないが、メガロどころか魔法世界、旧世界において混乱を起こさないためにも頼れる存在は少ないのだ。

現在、魔法世界ではラカンが帝国のテオドラとアリアドネーのセラスに頼んで力を貸して貰っているといった。

二人はこのことに当然ながら驚いたらしい。今まで信じていたものが崩れていったのだしょうがないだろう。

しかし、今更このことを公表するわけにはいかない。

このことを公表すれば、間違いなくまた混乱が起こるからだ。

彼女たちは部下にもこのことは言っていないらしい。

超は俺の話しを静かに聞いている。俺の話しを聞いても全く表情を変えないところを見るとコイツはもしかしたら……

「私も話しがあるヨ、私をみんなのところに連れてて欲しいネ」

超がそう言ったので、彼女を図書館島にいるクウネルたちのところに連れていく。

◇

クウネルたちのところに到着して、みんなを集める。ちょうど都合よく全員が揃っていた。

全員の顔ぶれを見ると、超鈴音が語り始めた。

「知ている人もいると思うガ、私は未来から来た超鈴音ネ」

「そんなあなたが私達にどんな用件でしょうか？」

クウネルが俺たちを代表して超に質問する。

「これから起こる未来の話しネ」

超が発した言葉にこの場にいる人間が全員驚愕の表情を浮かべている。

「まず、始めにあなた達のやった儀式はひとまずは成功したネ」

「ひとまずはですか？」

「まあその辺りは今から説明するヨ」

未来の俺たちの計画は一応成功を収めたらしい。

しかし、この言い回しでは何か不測の事態が起こったようだ。

「あなた達の計画は成功を収め、魔法世界は幻想のものから現実のものに変わり、異世界に転移した。

しかし、その時に大戦の真実がバレてしまたネ。

それならまだしもあなた達が儀式をするときにそれを止めようとした者たちもいた」

「メガロメセンブリアの連中か？」

超は頷く。これは俺たちも予想していた。しかし、対抗する術が力技で抑え込むしか思いつかなかった。

「奴らの言い分は大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの名を汚し、ありもしない虚言を吐いたということと、あなた達が『完全なる世界』と結託し魔法世界を滅ぼそうとしているということだたネ」

大戦の真実がバレるということは混乱を招く。

ナギ・スプリングフィールドに憧れる人もいるだろうし、今まで真実だと思っていたことが急に否定されたのだ、いくらこちらにいる『紅き翼』のメンバーが真実を語っても信じない人たちもいるだろう。『完全なる世界』とつながっていれば尚更だと思う

『完全なる世界』のメンバーをこちらに引き込むというのは、今までの話し合いの中でも出てきたことなので不思議ではない。

ただ、彼らは造物主のために造られた存在だ。

いくら真実を話したところで大戦時は違うことを教えられてはいたのだ。そう簡単に信じてくれるとは思っていなかったがどうやら説得には成功したようだ。

「あちらの戦力はメガロメセンブリア、そしてその主力は『白き翼』

と名乗る集団だたネ」

「『白き翼』だと……？」

それはネギ・スプリングフィールドが敵になったということだろうか。

「『白き翼』のリーダーであったネギ・スプリングフィールドは大戦の真実を否定し、同じように真実を否定した高畑やゲーテル、そしてメガロを味方につけ、あなた達に挑んだヨ。

あなた達はアリアドネーと帝国、そして魔法世界の住民を味方につけ、彼らに勝利し儀式は成功した」

ふとクウネルを見ると苦い表情をしている。かつての自分の仲間の息子が敵になってしまったことが残念のようだ。

しかし、こんな事は予想していた。少なくとも高畑やクルト・ゲーテルに関してはそれもあり得るだろうということは視野に入れている。

「儀式が成功したことで、魔法世界は異世界に移った。そして敗北したメガロの連中は旧世界に移ったネ」

「それはまさかメガロ全員ですか？」

俺たちは驚愕の表情を浮かべる、メガロにいる魔法使いの人口は六千七百万人、流石に全員が旧世界に行ったわけではないだろうが、それでも大多数の人間が旧世界に渡れば隠しきることはできない筈

だ。

「いや一部だけだたネ、それでも一千万人がいたが……」

超も苦い表情をしている。本来秘匿すべき魔法をそれを管理すべきメガロの連中が破ったのだ。

「当然、そんな人数がいきなり現れたことで世界に魔法のことがバレてしまったヨ。そして彼らは魔法世界の事もバラした。

まずは旧世界にいる魔法使いと非魔法使いの戦争がおこたネ。そして非魔法使いが勝ち、地球には科学兵器による多大な被害が出た。

そしてそんな彼らが次に目指した先は魔法世界ネ」

まさか、未来でそんなことになっているとは思わなかった。

魔法世界を救うための儀式を成功させてしまうことで、地球で戦争が起こってしまうとは……

「そして魔法世界と旧世界とで戦争が起こったネ。旧世界の人間は先の戦争で研究した魔法を科学で作り替え新しい兵器を投入し、魔法世界の人間は圧倒的なその能力で対抗したヨ。

私はそんな戦争が続いている未来から来た」

超の説明が終わる。俺たちは沈黙しみんな俯いていた。

超はそんな俺たちに気を使ったのか

「あなた達のせいじゃないネ。結局は魔法がバレたことが問題ネ。そうなったのはメガロの連中が深く考えずこちらに来たのが原因だヨ」

確かにそうではあるが、彼らがこちらに来たのは俺たちに原因があるだろう。

まあ、こちらでは起こってまだ起こっていないのだが……

「それでお前は何をしにこの時代に来たんだ」

いち早く立ち直ったエヴァが超に質問する。

彼女は既に俺たちの知識とは違う。

だから、この世界でやろうとしていることも違う可能性がある。

「私の目的はあなた達にこれを伝えて、あなた達を手伝うことネ。そのために私はここに送られて来た」

「送られてきた？」

それは自分の意志ではなく、誰かにこの時代に送ってこられたんだろうか。

「確かに私の意志もある、しかし、私はここにある人の願いによって来た」

超の瞳には意志が見える。おそらくその人は大事な人なのだろう。

「その人は私にこの時代で幸せになれと言たネ。だから私はこの時代で幸せになりたい」

超は未来に帰るつもりはないようだ。

それに未来の知識があるということは俺たちにとって心強い。

「俺たちはそんな未来にならないようにすればいい」

計画は成功し、魔法世界の住民を救うことはできたのだ。

幸い、未来についての知識は超が持っている。それならば、あとは世界に魔法がバレるのを防ぎ、戦争が起こらないようにするだけだ。

「そう、ですね。幸い計画は成功しているのですから、あとはメガロを警戒して動けば何とかなるでしょう」

クウネルの言葉でみんなも新たに決意をし直す。

こうして、また力強い仲間が増えた。

◇

あの独白が終わったあと、俺とあさぎは超に話しがあると言われ、今は三人で話している。

「私は知っているとおもうが、ネギ・スプリングフィールドの子孫ネ」

超は自分の過去につうて俺たちに話す。

「儀式成功の後、彼は旧世界に逃げ魔法使いとして戦争時も正体を隠して生き延びたヨ。そして彼の一族は旧世界側の魔法兵士として戦争に参加したネ」

「魔法使いが旧世界の味方に？」

「魔法使い全体が旧世界の敵と言うわけではなかったからね。特に魔法使いを研究したいという国には彼はうてつけだたヨ。」

膨大な魔力を持つスプリングフィールドはたしかに研究者としては興味深い存在だろう。

「そして私もそんな研究の副産物として生まれ、身体を弄られまくたヨ」

それだけで壮絶な過去を過ごしていたのは想像できる。

「そんな時に助けてくれたのが、未来のあなた達だたヨ」

どうやら、未来の俺たちは超を助けたようだ。

「あなた達は私を助けてくれたあと、様々なことを教えてくれたヨ。そして私をこの時代に送り過去を変えるように言たネ、そしてあなた達にこれを渡すようにと……」

そして、超は俺たちにカードを渡す。それはパクティオーカードのようにも見えるが自分の姿が描かれていない。

「それは浅葱さんがパクティオーカードを元に研究して作ったもので、あなた達が使っているアーティファクトを浅葱さんがコピーして改良したものが使えるようになるヨ」

そう言われたのでアーティファクトを呼び出してみる。

アーティファクトは俺の“管理者の掟”の色違いで向こうは黒であったがこちらは白い。

「使い方はここに書かれてあるヨ」

そう言われてメモを渡される。メモをみるとどうやら名前も同じらしい。ただ効果時間が無制限になったようだ。これで今まで使えかったアーティファクトが使えるようになる。

あさぎの方は戦闘用のアイテムを手に入れたみたいで、手に持った刀を軽く振っている。

「じゃあ、これからよろしくお願いするネ」

こうして、計画は少しずつ進んでいく。

しかし、まだ未来はわからない。超の言ったような未来になる可能性もある。

それを回避するためにも頑張らないといけないと思った。

第１４話　協力者は……（後書き）

アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、感想にお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果

エヴァ　三票
のどか　一票
このか　一票
夕映　一票
明日菜　一票

予備票（回答者様の好きなキャラクター）

裕奈　一票
茶々丸　一票

予備票はこのキャラクターが好きだけど、アンケートはこのキャラ

でと書いてくださった人がいたので用意したものです。

基本的には上のアンケート結果でカウントさせていただきますので御理解ください。

第１５話　その少女たちは……（前書き）

只今、アンケートを行っています。

詳しくは後書きにて

では、お楽しみください

第１５話　その少女たちは……

超が仲間になって数週間が経った日の事だ。

超の未来の知識や技術により計画の段階は一気に進んだ。

しかし、それはまだまだ理論上の話しで実際には何度かテストをしないをして、完璧なものに仕上げなければならない。

そして今、超はあさぎと共になにやら研究をしているようだ。

超はあさぎを師匠と呼び慕っている。あとクウネルに対しても先生呼ばわりだ。

実はクウネルは木乃香や裕奈にも先生と呼ぶことを強制している。なんかそう呼ばれるのがイイみたいなことを言っていた。

超や裕奈、木乃香たちは同じクラスなため仲が良い。

まだ魔法を習い始めたばかりの木乃香に二人が魔法を教えたり、裕奈と超が模擬戦をしたり、たまに三人で買い物に行ったりしている。

裕奈と超の実力は拮抗している。

裕奈の精密な射撃魔法を超が迎撃し、超の接近を裕奈が魔法の弾幕で足止めする。

二人の勝負はどちらかがミスするか、力尽きるまで終わらない。

超の頭脳でも裕奈にはそう簡単には主導権を握らせて貰えないようだ。

あの天才を相手にして、互角に戦える裕奈なかなり凄いだろう。

ちなみに俺は二人を相手にしても勝つことができた。

まあ、戦闘経験は俺の方が多いし、指導者が指導者だからだろう。

木乃香は治癒の魔法をクウネルに習っている。そして、あさぎからはカード作成の技術だ。

木乃香は膨大な魔力を持っているためあさぎのカードの作成とは相性が良いらしい。

ただし、術式をしっかりと覚え、自分がその魔法を扱えなければカードは作れないので、まだまだ作れるカードは少ないとか。

ちなみに裕奈や超、俺もカードは作れるようになっている。超の場合、カードを使って戦うのでその技術はかなり高い。

「お～い♪みんな集まれ～♪」

あさぎと超が研究が終わったのか俺たちを呼び集める。

「どうしたんだ、あさぎ？」

「なんか嬉しそうだね～」

あさぎと超の表情は嬉しそうであるのと同時に何かに満足しているような表情をしている。

「実はね～♪超と新しい研究をやっていたんだけど、それが完成したからみんなに見せようと思ったんだ～♪」

「師匠との研究は素晴らしいものだたネ。これを見ればみんなも驚くと思うヨ」

「じゃあ、みんなにお披露目するよ♪二人とも～出てきて～♪」

そう言ってあさぎが呼びかけた先から、二人の女の子が出て来た。どちらも女子中等部の制服を着ている。

一人は薄い黄緑色の髪をしており、首には一見すると首輪と勘違いしそうな首飾りをつけている。

もう一人は白い髪で、俺たちに見られるのが恥ずかしいのか少し俯いている。

「紹介するよ～♪髪が黄緑色の子が絡繰茶々丸ちゃんで、もう一人の子が相坂さよちゃん、二人ともボクと超ちゃんの研究で作られた身体を使っているんだよ♪」

「よろしくお願いいたします」

「あの！！よろしくお願いしみゃす」

茶々丸は無表情ではあるが丁寧な挨拶をするが、相坂さよの方は最後で噛んでしまった。

むちゃくちゃ可愛い。

相坂の方をずっと見ていると向こうも俺が見ているのに気づいたのか笑顔で返してくれる。

「な～に相坂さんの方ばっかり見てるかな～」

「もしかして見とれてたん？相坂さんカワイイもんな～」

裕奈と木乃香から威圧感を感じるが無視する。

「私のことはさよでいいですよ？」

「私の事も茶々丸とお呼び下さい」

二人がそう言ってくれるので好きに呼ばせて貰うことにする。

「茶々丸は私が未来の魔法科学を使いできた娘ネ、外見は人と殆ど変わらないが脳や身体は機械でできてるヨ」

「さよちゃんの方はボクが創ったホムンクルスを利用しているよ♪さよちゃんは麻帆良に昔通ってたんだけど、死んでしまって幽霊になっていたから肉体を与えてあげたんだよ♪」

あさぎと超の顔はどこか誇らしげだった。

茶々丸は工学部の預かりになり、さよちゃんの方はあさぎが後見人になるようだ。

ちなみに二人はゴールデンウイーク明けから裕奈たちと同じクラスに配属されるようだ。

そうなるようにあさぎが学園長を説得したらしい。

その二人はエヴァを含む女の子たちでお喋りしている。

……最近は女の子が増えて、男性の肩身が狭くなっている気がする。

とはいっても、裕奈たちはあまり男とか女とか気にするようなタイプではないので、普通に仲良くしてはいるが……

ただ、俺は女の子たちとの交流が多いためか、自分のクラスの奴らに結構からかわれたり、紹介を求められたりすることがある。

そんな奴らは放っておくか、適当に流している。

「それでどうかな♪かわいい女の子が増えたわけだけど♪」

「たしかに気にはなりますね。誰が一番、涼君の好みなのか？」

クウネルとあさぎが絡んでくる。こうなるとコイツらは俺が答えるまで、離してはくれないだろう。

「そうね、私としてはゆーながオススメよ。世話好きだし、家事も上手いし」

「そうだね。親としてはやっぱり娘を選んで欲しいかな」

ここで明石さんと夕子さんも話しに混ざる。

これでますます厄介な状況になった。

女の子たちの方を見てみると話すのを止めて、こちらに聞き耳を立てている。

同い年の男の子がどういう風に思っているか気になるのだろう。

こうやって注目されると恥ずかしいものがある。

「みんなかわいいですし、誰か一人ってわけにはいかないですよ。

……俺はみんなのことが大好きです！」

半ばヤケになりつつも、無難な答えを返しておく。

クウネルとあさぎはそんな俺を見てニヤニヤしている。

明石さんや夕子さんは少しつまらなそうな表情をしていた。

しかし、俺の場合は中身も数えると、彼女たちの倍の時間を生きているのだ。

確かに彼女たちはかわいいし、今の俺は彼女たちと同学年ではあるが、その部分で引け目を感じてしまうことがある。

それにさっきの発言も嘘ではない。

彼女たちのことはみんな好みである。

この中で誰かと交際できるなら喜んで交際させて貰うし、もし許されるなら全員と交際したい。

誰か一人と言われると困るがその場合は、一番付き合いの長い裕奈になるのだろう。

というかそういった点では裕奈が一番選びやすい。

まあ、今は全く関係のない話しだったが……

彼女たちを見ると少し照れくさそうにしている。

彼女たちは今まで男性に告白されたりなどはなかった筈なので、男性にこうやって好意を示されるのは始めてだろう。

そして、茶々丸とさよちゃんとの顔合わせは終了し、いつも通り修行が始まっていった。

◇

茶々丸やさよちゃんとの顔合わせが終わって、さらに時が過ぎ、学校はゴールデンウイークを迎える。

深夜、俺と裕奈は学園長に呼び出され世界樹前の広場に集まる。

そこに俺たちと同じ生徒や先生たちが揃っていた。おそらく彼らは全員魔法使いなのだろう。

それから、数分が経ち学園長がやってくる。

「ふぉふぉふぉ、みな揃ったようじゃのう」

学園長はその場にいる全員を見渡した。

「知っている者もおると思うが、中等部に上がってからは諸君らには夜間の警備に参加してもらう。

今日はその顔合わせと、諸君らの実力をみせて貰うためにここに呼んだわけじゃ」

麻帆良では中等部に上がると、週に何度か侵入者を排除するための夜間の警備や放課後の警邏に参加しなければならない。

当然、深夜の警備の場合は危険手当などがでることになるし、学業に影響の出ない範囲ではある。

学園長も言っていたが、今回俺たちは実力を見せるために集められたようだ。

とはいってもここにいるのは全員ではないだろう。

今も警備はやっているだろうし、同学年の魔法生徒が少なすぎる。

「では、諸君らの力を見せて貰おう」

学園長の言葉で試合が始まる。

一対一で試合を行い。先生か先輩方が相手のようだ。

「ねえ涼くん、なんか思ってるよりみんな弱いね」

裕奈が小声で話しかけてくる。

確かに俺たちと同学年の生徒の実力は大したことはなく、それを相手する先生や先輩方もそれほど実力を感じない。

でも、それは仕方ないことだ。

「俺たちに魔法を教えていたのは、間違いなくこの世界でもトップクラスに入る人たちだから、そう感じるんだろ」

「そっかあ、確かにエヴァちゃんたちと比べるのは失礼だよね」

「お前も手加減して“魔法の射手”だけでやったらどう。それで裕奈だったらそれで充分だろ」

「まあ相手の力を見てから考えるよ、負けたら特訓させられるだろうし」

そして裕奈が呼ばれる。どうやら相手は先輩のようだ。

「私が相手をしてさしあげます」

「じゃあ先輩よろしくね～」

裕奈と対戦相手の挨拶が終わり、裕奈が様子見で“魔法の射手”を無詠唱で3本、相手に向けて放つ。

「無詠唱で！？」

相手は裕奈が無詠唱で魔法を放ったことに驚いているようだが、障壁で受け止めた。

「フフフ、確かにあなたが無詠唱で魔法を放ったことには驚きました。ですから私も本気でお相手します。“黒衣の”ってえええ！！！」

「いや、隙ありすぎ」

裕奈が相手が魔法を発動する前に攻撃を当てる。

魔法は相手にまともにあたり、相手は気絶したようだ。

しかし、なぜか服が脱げている。

使おうとした魔法とこの状況から察するに彼女は高音・D・グッドマンのようだ。

裕奈は相手が気絶したのを確認したのち、こちらに戻ってくる。その顔は少し怒っていた。

「あの人の裸見たでしょ。涼くんのえっちー」

「まあ、俺も男だし」

「いいけどね。どうせみんなに言ってやるから」

裕奈はむくれているが、俺は呼ばれてしまったのでそちらに向かう。

「応援してくれよ」

「……うん」

裕奈をおいて、対戦相手のところへと向かう。

そこには長い刀を持ったサイドポニーの少女がいる。

その顔には覚えがあった。桜咲刹那だ。京都で一度だけ遠くから見たことがある。

そんな彼女の顔は何故だか知らないが怒りに満ちていた。

俺が彼女の前に立つと同時に彼女は斬りかかってくる。

俺はすぐさま短剣を抜き、刀を受け止めた。

「貴様、何故お嬢様と一緒にいる」

「は？」

「何故お嬢様と一緒いると聞いているんだ！！」

俺が木乃香と仲の良い理由なんて、いくつもある。

護衛、同じ部活、友人、仲間、言い出したらきりがないだろう。

「いや、友人だからだけど」

コイツの攻撃をいなしながら答える。しかし、彼女には伝わらないようで

「西洋魔法使いである、貴様がお嬢様と一緒にいるなんて下心あってのことだろう！！」

彼女は止まらない。というより関西には何度か行っているし、詠春さんからは護衛を頼まれていることをコイツは何故か知らないようだ。

しかし、事情は知らないがこうやって無実の罪で襲いかかってこられるのには苛つく。

「斬が、っ！！」

相手が技を出す隙をついて思い切り蹴りを入れる。

彼女は後方に吹っ飛ぶと壁に激突し気絶した。

「すみませんでした」

試合が終わり裕奈のところに戻ろうとすると女性から謝られた。

葛葉刀子先生だ。彼女は麻帆良に来て、木乃香の護衛も勤めていたので知っている。

「どうやら、彼女はあなたが護衛についていることを知らないようです。彼女には私から伝え、後日謝罪に向かわせます」

何故、知らないのかはあとで詠春さんに連絡して聞いてみることにしよう。

「わかりました。葛葉先生はあまり気になさらないで下さい」

「ではまた後日」

そう言って葛葉先生は桜咲刹那の回収へ向かう。

そして全員の試合が終わった。

後日、チーム分けなどを教えてくれるらしい。

そんなこんなで今日一日は終わった。

第１５話　その少女たちは……（後書き）

アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。
締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、感想にお書き下さい。
一人一票とさせていただきます。
番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果
エヴァ　３票
夕映　２票
明日菜　２票
このか　１票
のどか　１票

となっています。

ぜひアンケートに参加してくださいね。

第１６話　きっかけは唐突に（前書き）

只今、アンケートを行っています。詳しくは後書きをご覧ください。

今のところ本編はストックしてある分の投稿なので、現在アンケートは本編には影響していません。

では、本編をお楽しみください。

第16話　きっかけは唐突に

夜間警備のための実力検査が終わった夜、俺は詠春さんに桜咲刹那のことについて連絡をとった。

その際に今日の試合で起こったことを残さず話す。

『そうですか。彼女に木乃香が魔法を習っていることを伝えてなかったのは、こちらの不手際です。申し訳ありません』

「いや、それは構わないんですが、彼女との試合の時に俺が護衛も兼ねていることを知らなかったようなんですが、どうしてでしょう？」

『彼女には木乃香の傍で木乃香を守ることと、今までも護衛がいたことは言ってあります。おそらく、護衛を一人だけだと思っていたようですね』

「葛葉刀子さんだけ……ということですか？」

『はい、麻帆良にいる神鳴流の剣士として彼女を紹介しましたから、おそらくそこで勘違いしたのでしょうね、あとそちらに行ったばかりで精神的に不安定だったとも考えられます』

「わかりました。わざわざこんな時間に電話をかけてすいません」

『いえいえ、では木乃香を頼みましたよ』

そう言って電話が終わる。

桜咲刹那は京都から麻帆良に来たばかりでまだ何も理解していなかった。

関西から関東に組織を変え、不安になり任務をこなすことに執着、おそらく俺が木乃香の魔力を狙う輩に見えたのだろう。

まだ、来たばかりの彼女では情報が少なすぎた。

そして、今日のようなことが起こったらしい。

まあ、それは置いておくとして、

木乃香は桜咲刹那が魔法関係者であることも知っている。

そして彼女が烏族とのハーフであることも……

専属の護衛としてこちらに来た、桜咲刹那に全てを話す必要がある。

木乃香が魔法を習っていることがその一つだ。

このことを彼女が知れば、どういう反応を示すだろう。

それが楽しみだった。

◇

そして次の日、葛葉先生に連れられて桜咲刹那は現れる。
葛葉先生は忙しいのかすぐに帰ってしまい、二人だけが残る。

「あの、昨日は申し訳ありませんでした！！」

刹那は物凄い勢いで頭を下げる。昨日の自分の行いを反省しているようだ。

もし、俺が木乃香の護衛を勤めておらず、ただ友達だっただけの魔法関係者であれば、昨日のコイツの行動は相手に不快感を与え、敵を増やす可能性もあった。

そういったところも葛葉先生から教えられたのだろう。その顔は自らの行いを後悔しているように見える。

「次からは気をつけろよ。じゃあ、ついて来い」

「え？」

「だから、今から案内するところについて来い、お前には説明しておかないといけないことがある」

俺はそう言って、いつも通り図書館島へ向かう。

刹那は俺の後ろをついて来ているが、その表情は堅い。今、自分たちが行こうとしている先で何を説明されるのか、怖々している。

そして、図書館島に到着する。そこにはいつものように、殆ど全員が集まっていた。

殆ど全員と言ったのは、明石さんと夕子さんは学園の仕事があるので、基本的にここに来るのは稀だからだ。

刹那はここにいる顔ぶれに驚いている。

当然だろう、ここには木乃香だけでなく自分のクラスメイトが何人も揃っているのだから。

「あっ、せっちゃんや。せっちゃ～～～ん！！」

木乃香が刹那に声をかけて近寄る。しかし、刹那は逃げようとした。

仕方ないので、魔法で拘束するがまだもがいている。

「は、はなしてくださいっ」

「やだ、大人しくしてろ」

そして、木乃香が近づき刹那に抱きつく。

「せっちゃんなんで逃げるん」

「いえ、それはあの」

刹那が言葉に詰まっているが、正直話しを早く進めたいので、場所を部屋の中に移動する。

部屋の中で椅子に座り、だいたいのことを説明してやる。

その内容は木乃香が魔法を習っていることから始まり、大戦の真実と俺たちの目的までだ。

超の過去や俺やあさぎのようなイレギュラーのことは面倒なので話していない。

刹那は驚いたようだが、木乃香が俺たちの計画に参加するという意志を確認したのち、自分は木乃香に従うと言った。

木乃香は刹那と一緒に居れることを喜んでいる。

これまでは彼女が護衛だというのに傍にいなかったので寂しかったようだ。

自分が魔法関係者であることを話そうとしても、声をかけようとするたびに逃げられたらしい。

そのことで俺が何度相談を受けたか……

ちなみに超は魔法関係者であることを隠しているし、裕奈も話しかけようとしたらしいが、そもそも刹那は他人と話さず何処かへ行ってしまうらしい。

そのことで刹那はみんなから責められ落ち込んでいる。

あさぎが言った

「護衛なのに傍で守らないとかアホなんだね♪」

の一言がトドメだったようだ。

そして刹那に俺たちの目的の口止めをしっかりと行い、一日が終わった。

◇

今、私は逃げている。

夜中にふと飲み物が欲しくなり、コンビニへ買い物に行った帰りのことだ。

急に目の前に人影が現れた。

しかし、夜中とはいえ人もいるだろうと思い、その人影をよく見てみる。

するとその人の顔は明らかに人間ではなく、クチバシがあり鳥のような頭をしている。服かと思ったそれは翼であった。

「なんや嬢ちゃん、一般人かいな。でも悪いな、見られたからには死んで貰うで」

そいつは私にゆっくりと近づいてくる。

私は全力でその場から駆け出した。

なんだ、なんなんだあれは、

私は必死に逃げつつ先ほど会った化け物を思い出す。

麻帆良が異常なことは知っている。

学園の真ん中にある樹のことを誰も異常には思わないし、工学部の生徒が人間そっくりなロボットを開発しているのも異常だ。

普通に世界記録を出せそうな速さで走れる奴らも見たことがある。

しかし、今の状況はそれと比べる必要がないほどはるかに異常だった。

なんせ、化け物が現れ自分を殺そうとしているのだ。

必死に逃げる。

だがしかし、

「嬢ちゃん、甘いなあ」

回り込まれてしまう。すぐに後ろを振り返って逃げようとするが、

「残念やな～、囲んでんねん」

すでに周囲は化け物に取り囲まれている。

「嬢ちゃんは女やさかい、殺す前に楽しませて貰おうか」

そう言って化け物が私の服を切り裂いた。

「や、やめ」

恐怖で震えて、声すらでない。

嫌だ、こんな化け物なんかに犯されたくない。犯されるなんて嫌だ。

しかし、化け物は私に馬乗りになる。

もうダメだと思っていたその時だった。

ドーンという音とともに周りを囲んでいた化け物たちが崩れる。

「悪いけど、さっさと倒すから」

「まさか、女の子を襲っているなんてさいてーだね」

男と女、二人の声が聞こえた。

そして私の上から化け物が離れる。

私は声の聞こえた方へ向くと自分と同い年ぐらいの男女がいた。

女子の方は見覚えがあった。自分と同じクラスの明石だ。

二人は、こちら側に近づきつつ、自分たちに襲いかかってくる化け物たちを倒している。

倒された化け物はまるで始めからいなかったかのように消えていった。

そうして、二人は化け物を倒しきると私に駆け寄ってくる。

助かった。本当にそう思った。

◇

深夜、裕奈とあさぎの三人で夜間警備をしていたら、念話が届く。

どうやら、侵入者がかなりの実力を持っていて、かなりの数の妖怪を召喚して送り込んできたようだ。

学園の結界は何の意味もなく素通りされたらしい。

そしてあさぎは術者の方を潰しに行き、俺と裕奈は召喚された妖怪たちを倒す。

すると遠くで妖怪の気配を感じたのでそちらに急いで向かった。

近づいてみると妖怪は女の子を襲おうとしていたので、思いっきり薙ぎ払った。

女の子は服を引き裂かれているもののまだ大丈夫なようであった。

「悪いけど、さっさと倒すから」

「まさか、女の子を襲っているなんてさいてーだね」

俺たちはそこにいる妖怪たちを一気に殲滅する。

幸い苦戦しない程度の小物だったようだ。

そして女の子の方に近づくて裕奈は何かに気づいたようだ。

「あれ、長谷川さん？」

「知り合い？」

「うん、同じクラスの長谷川千雨さん」

どうやら同じクラスの長谷川千雨らしい。

彼女に自分の上着を脱いで着させる。すると彼女は

「さっきのは、なんだったんだ？」

と聞いてくる。本来であれば眠らせた後で記憶を書き換えるのたが、彼女の場合認識阻害が効きにくいのもあり、そして裕奈のクラスメイトでもあるので先に説明することにする。

「あれは妖怪だよ。簡単にいうとファンタジーの存在で、俺たちは魔法使いなんだ」

正直、こんな状況でなければ頭がオカシイと思われるだろう。しかし彼女の場合、先ほど襲われたことや俺たちが実際に魔法を使ったことで信用してくれた。

「麻帆良がオカシイのはそれが理由か？」

「そうだね、認識阻害が効いているから誰も異常なことだと思ってない。君の場合は認識阻害が効きにくいから苦労したんだろうね」

「だからなんだけど長谷川さんには記憶を消すか、このまま覚えておくか選んでもらうよ」

俺たちは彼女に選択を迫った。

しかし彼女の場合、記憶を消してもまた魔法に関わる可能性はかなり高い。

というよりネギが来ると間違いなくバレてしまい関わることになる。

「なあ、記憶を消してもまた今回みたいに襲われる可能性があるんだろ」

長谷川は先ほどのことを思いだしたのか震えながら聞いてくる。

「ないとは言えないね、現に襲われたばかりだし」

「ならせめて自分のことを守れるように教えてくれ」

「わかった。自分の身ぐらいは守れるようにしてあげるよ」

こうしてまた一人魔法に関わる人が増える。

このペースだとみんなにバレてしまいそうな気がするが、気のせいだと自分に言い聞かせた。

第１６話　きっかけは唐突に（後書き）

アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。
締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。
一人一票とさせていただきます。
番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果

夕映　４票
エヴァ　３票
明日菜　２票
千雨　１票
このか　１票
のどか　１票
アキラ　１票
マナ　１票
アリサ　１票
となっています。

ぜひアンケートに参加してくださいね。

閑話1　たまにはこんな日も（前書き）

只今、アンケートを行っています。詳しくは後書きをご覧ください。

今回は視点を変えて、女の子たちの話しです。

いつもより短めです。

閑話1　たまにはこんな日も

今、私たちは女の子だけで麻帆良の外へ買い物にきている。
今日は久しぶりに魔法の訓練も部活もないので、気晴らしに遊びにきたのだ。

「なあゆーな、すずくん呼ばんかってよかったん？」

このかが私たちの中で唯一の男子である。涼くんがこの場にいないのを気にしているみたいだ。

「いーのいーの、最近忙しいみたいだし、邪魔しちゃ悪いもん」

そう最近涼くんはずっと浅葱さんやクウネルさんたちと研究している。
計画を達成するために頑張っているのだ。
それに最近は超りんやこのか、さよちゃんや千雨ちゃんも私たちの修行に参加するようになった。
エヴァちゃんやクウネルさん、浅葱さんは研究を進めつつ私たちに指導しているので、たまに忙しいときは涼くんがみんなに代わって私たちに魔法を教えてくれる。
私や超りんは魔法を習い始めて結構経つので自分で練習できるけど、千雨ちゃんやさよちゃん、このかの場合はまだまだ魔法について勉

強しなければならない。

だから、涼くんは三人に教えてあげることが多い。

最近は三人ばかり構って私には構ってくれないので正直寂しいのだ。

涼くんは自分の時間を削ってこのかたちに魔法を教えているので、休みの日は自分を鍛えるのに使っている。

それを邪魔することはできない。

「でもー、魔法を教えて貰ってるお礼はしたいですね～」

さよちゃんがそう言う。

「そうやね、うちらはお世話になっとるし、みんなお礼はしときたいな～」

「私も助けてもらったし、それぐらいはな」

このかと千雨ちゃんも同意見のようだ。

「じゃあ、買い物ついでに何かお土産でも買ていくヨ」

「そうだね～、そうしようか」

超りんの意見に賛成して、街を歩く。

ちなみにこのメンバーが全員で刹那さんは剣の修行、エヴァちゃんと茶々丸さんは部屋でのんびりしているらしい。

エヴァちゃんは結構、私たちと遊びにいくことが多い。

そのとき、ゴスロリの服をよく着させられるけど……

「そういえば、涼さんって誰が好きなんですかね～」

昼食のために入ったファミレスでさよちゃんがぽつりとこぼした。

「そうだな、私はともかく明石は付き合いが長いんだろ。何か知らないのか？」

千雨ちゃんが私に聞いてくる。実は千雨ちゃんは妖怪を助けられた時から涼くんを気にしている。

「う～ん、前にもおんなじようなことを質問されたときは、みんな好きとか言ってたね～」

前に浅葱さんが涼くんに質問していたのを思いだす。

ホントは裕奈って言ってもらいたかったな～。

やっぱり一番近くにいた私としてはあの時、自分が選ばれなかったのは悔しかった。

「でも確かに女の子が身近にいるのに興味がないってことはないだろ」

「じゃあ今度の学園祭のときにみんなで誘てみるネ、流石に女の子と二人きりになれば、涼も何らかのアプローチをしてくるんではな

いカ」

超りんの言葉にみんなが反応する。

私たちも年頃の女の子だ。そりゃ恋人ぐらいはほしい。

でも私たちの近くにいる男の子なんて涼くんしかいないのだ。

それに涼くんは強いし優しいし大人びていてその雰囲気がカッコいいのだ。

それに近くにこんなにカワイイ女の子たちがいるのに、手をだしていないのはどうかと思う。

……手をだされたらだされたで困るんだけど、

「なら二人きりで学園祭でデートして、すずくんの反応を確かめよ」

このかの言葉にみんなが頷く。

さよちゃんなんかは顔を真っ赤にしていてそれが可愛く見える。

それにしても涼くんとデートかぁ、

二人で遊びに行くことも結構あったが改めてデートという言い方をすると恥ずかしい。

そういえば、と指につけてある指輪を見る。初めて涼くんと遊びに行ったときに買ったものだ。

あの時の約束覚えてるかなぁ。

あの時、私は涼くんの“ミニステル・マギ”になると約束した。

まだ仮契約をしていないので、早く涼くんとしたい。

そして、私たちはみんなへの感謝のプレゼントを買いに店を出た。

◇

やっぱりゆーなもすずくんのこと好きなんやな～。

うちはゆーながさっきからいろんな顔をしているのを見てそう思った。

うちがすずくんに会ったのは初等部のころや。

図書館探検部の活動のときに道に迷ったのを助けて貰った。

そのときはまだ子どもで道に迷って、ずっと一人になっとったから寂しくて泣いてたんや。

あのときはホントにこのまま死ぬんやないかって思っとった。

そんなときに現れたんがすずくんや。

すずくんはうちの頭を撫でてもう大丈夫って言ってくれた。

それから、すずくんとは仲良くなった。

すずくんは他の男の子より大人しくて、あんまりやんちゃなことをしたりはしなかった。

そして、すずくんが部活に入ろうとしていたときのことだ。

ゆーなはすずくんをバスケ部活に入れたがっとったけど、すずくんは運動部には入りたくなかったらしい。

うちはすずくんを占い研究会に誘った。まさか入ってくれるとは思わへんかったけど。

このとき、うちに有ったんはいつもすずくんの傍にいるゆーなへの優越感やった。

放課後や休日にすずくんを見かけるときは大抵ゆーなも一緒にいた。

そんなゆーなが少し羨ましかったのは事実で、子どもながらに嫉妬もしていたみたいや。

すずくんが占い研究会に入ってからは精一杯話しかけたりもした。

そして、中等部に入る少し前に私は魔法のことを知った。

それからというもの、すずくんらと魔法の練習をすることになった。

すずくんが魔法を使っているときの表情は凛々しく、カッコよかった。

他にも超りんやさよちゃん、千雨ちゃんたちが増えたから、前までのように二人だけでいる時間も減っていった。

だから、すずくんとのデートは楽しみでしょうがない。

「このかさん～、大丈夫ですか？」

どうやら考え込みすぎて、ボーっとしていたようだ。さよちゃんに心配されてしまった。

「大丈夫やよ。ただ何買おうか迷っとっただけや」

そして私たちは買い物に向かった。

ちなみに用意したプレゼントにはみんな喜んでくれて、そのあとみんながすずくんを学園祭のデートに誘ったことで、すずくんがからかわれていたのは言うまでもなかった。

閑話1　たまにはこんな日も（後書き）

只今、アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは12月13日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果

明日菜　5票
夕映　4票
エヴァ　3票
アキラ　2票
千雨　1票
このか　1票
のどか　1票
マナ　1票
アリサ　1票

となっています。

ここで明日菜の票が伸びてきましたね～

ぜひアンケートに参加してください。

そして、今後もこの作品をよろしくお願いします。

第17話　学園祭デート前編（前書き）

只今、アンケートをやっています。

詳しくは後書きをご覧ください。

予定日の投稿です。

まあ、現在7日連続投稿ですが……

では、最新話をお楽しみください。

第17話　学園祭デート前編

今俺は超と麻帆良祭を巡っている。

先日のことだ。裕奈、木乃香、千雨、超、さよちゃんから学園祭を一緒に回ろうと言われた。

いきなりのことでびっくりしたが、いいよと答えておいた。

裕奈や木乃香は学園祭に限らず結構な頻度で遊びに行くことがある。

千雨は救出したあの日から、俺に対して好意を抱いているのは知っていたので、この三人は問題ない。

しかし、わからないのがさよちゃんともう一人、隣を歩いているコイツであった。

「フフ、こうやてデートするのは私も始めてだから、今日はよろしく頼むヨ」

超はそう言って、自分の腕を俺の腕に絡ませる。いきなりのことでびっくりしたが、振りほどいたりはしない。

正直、この方がいろいろと嬉しかったりする。

「頑張ってエスコートさせてもらうよ」

そして、二人で歩きだす。

学園祭では各サークルや部活などがかなり多く出店しており、アトラクションみたいなのも存在するため、テーマパークでデートしているような感じだ。

超と様々な店やイベントを巡っていく。

「アハハハハ、さっきの映画研の作った映画は最高だたネ」

「まさかの最後にドッキリだったからな」

映画研の作った映画を見る。始めはむちゃぶり企画をこなすという、映画というよりバラエティー番組に近かったのだが、番組がクライマックスにさしかかったところにドッキリを仕掛けていた。

そっから先はコメディでしかなかったが楽しめたので良しとする。

そして今はカフェで食事をしている。

超は満足げな表情をしているので俺は安心した。

「ふう～、今日は楽しめたヨ。また来年もお願いしたいネ」

「俺も楽しかったよ、まあ時間が少々短かったけど」

今日はこのあとからさよちゃんとデートする事になっている。

超は最初ということもあってか、意外とこのデートに掛けた時間は少ない。ほんの二、三時間だろう。

「まあ、確かに少々短かたがそれでも私は満足ヨ」

「ならいいんだけど」

「じゃあ、少しだけ失礼して」

超はそう言うと瞬動で俺に近づき、キスをしてくる。完全にふいをつかれ、全く反応すらできなかった。

いつの間にか足元には仮契約の魔法陣が張られ、超とのパクティオーカードが手元に降りてくる。

「じゃあ、これは今日の記念品として貰っていくネ。このあとのさよとのデート頑張てくれ」

そう言って超はコピーカードを作り、立ち去っていった。

俺の手元にはパクティオーカードが残っている。

いきなりキスをされたのもそうだが、仮契約がなされたということはどうやらあさぎあたりが関わっているのだろう。

あさぎであれば仮契約の魔法が使えるカードを作ることができる。

ということはだ。まさかとは思うがデートをする全員と仮契約をしなければならないのかもしれない。

まあキスをするのはかなり嬉しいので問題ない。

ただ、結局俺は誰が好きなのか考えてしまう。

とりあえずデートが終わってから考えばいいや、と自分に納得して、俺はさよちゃんとのデートに向かった。

◇

さよちゃんとの待ち合わせ場所に辿り着く。そこには既にさよちゃんが待っていた。

「ゴメンねさよちゃん、待たせちゃったみたいだね」

「い、いえっ、私も今来たところですから」

さよちゃんは慌てたようにそう言う。多分、いきなり声を掛けられたことに驚いているようだった。

「じゃあ行こうか」

「はい！」

さよちゃんに手を差し出すと握り返してくれる。そして俺たちは歩きだした。

さよちゃんは周囲でやっている屋台やイベントをキョロキョロしながら見ている。

「こうやって、誰と一緒に学園祭を廻れるなんて夢のようです！」

「そっか、さよちゃんは最近まで幽霊だったね」

さよちゃんははしゃいでいる。

幽霊だった頃は誰とも話せず、認識もされていなかったので随分寂しい思いをしていたんだろう。

「そうですね、誰かとお話しすることもできませんでした。学園祭も一人でしたから、こうやって誰かと廻れるのはスゴく楽しいです！」

さよちゃんの顔は嬉しそうで、見ているこっちも嬉しくなってくる。

「あっ、あっちでも何かやってるみたいですよ」

さよちゃんがふとイベントをやっているのを見つけ、俺の手を引っ張ってそのイベントの方へ向かう。

「へぇ～、撮影会ですか～」

そこでは撮影会をやっていた。しかし、撮られているのは芸能人とかではなく様々な衣装をきた一般人だ。

「へいらっしゃい。うちでは貸し衣装での記念撮影をやってるよ～、まあここにいる人達への披露もあるんだけどな」

やたら体格のいい店員が出てきて説明してくれる。

なるほど、だからこんなに人が集まってるのか。

どうやら、貸し衣装の披露することでの宣伝も兼ねているようだ。

「嬢ちゃん、カワイイしどうだい？兄ちゃんも彼女のもっとカワイイとこ見たいだろ」

店員がさよちゃんを誘っている。恋人に間違えられているようではあるが、まあデートしているので否定はしない。

「さよちゃん、せっかくだしやってみたら？」

「そうですね、お願いします」

さよちゃんが頷くと店員はさよちゃんを連れて着替えのスペースへ行った。

せっかくなので俺も衣装を借りることにする。

俺が着たのは紫色の着流しと紺色の羽織りで始めて着たが意外と着心地が良く、思ったよりも動きやすい。

着替えが終わりさよちゃんを待つ、すると女の店員が出てきた。

「彼女さんはもうすぐ舞台の方に出ますよ。見逃さないであげてね」

店員に言われ舞台の方を見る。すると舞台に巫女服を着たさよちゃんが上がってきた。

さよちゃんが着ている巫女服は袴の丈が膝ぐらいで肩の部分が露出しているものだ。

さよちゃんは恥ずかしそうにしながら、舞台上から俺に手を振ってくれる。

数十秒ぐらいして舞台からさよちゃんが降りた。

そしてさよちゃんと合流する。

「さよちゃん、よく似合ってるカワイイよ」

「あ、ありがとうございます」

さよちゃんは割と露出の多い、衣装なので恥ずかしそうであったがよく似合っていたのでそのまま学園祭を廻ることにした。

そのあともさよちゃんと様々な店やイベントを見てまわった。

さよちゃんは行く先々で笑って楽しんでくれる。

「今日は楽しかったですね～」

「ああ、いろいろ食べ歩いたし、楽しいイベントも結構あったからね」

「今日はありがとうございました」

さよちゃんは深く頭を下げる。

「気にしなくていいよ。俺もさよちゃんとデートできて楽しかったし」

それは事実だ。というよりこんなにカワイイ女の子とデートできて楽しくないなんてことは有り得ないだろう。

「あの、お願いがあります」

「何、お願いって？」

「私のこと、さよって呼び捨てにしてもらえませんか」

「わかったよ、さよ……」

「ありがとうございます。なんか私ひとりだけちゃん付けで呼ばれてましたから、仲間ハズレな気がしたんですよね」

さよの言葉でみんなの呼び方を思い出してみる。確かにさよ以外の女の子たちはみんな呼び捨てにしていた。

「そんなつもりはなかったんだけど、気にさせたみたいだね……ゴメン」

「い、いえ、気にしないでください。私が勝手に思っていただけですから」

「でもなんか悪いから、俺になんかさせてくれないか」

さよは確かに気にしていない様子だったが、少し罪悪感を感じたので言ってみる。

するとさよは少し悩んで、

「わ、私とパクティオーしてください！」

真っ赤な表情で仮契約を求めてきた。

その表情が可愛かったので、さよを抱き寄せてその唇にそっと唇を重ねる。

仮契約の魔法陣が発動してパクティオーカードが現れ、唇を離す。

そしてゆっくりと離れた。

「ファーストキスだったんですから責任とってくださいよ」

さよにコピーカードを渡すとさよはいきなりそう言ってきた。

「さよが本気でそれを望むならいいよ」

「今の聞きましたからね、約束ですよ」

さよはこっちを見つめて言う。冗談かと思ったがどうやら本気らしい。

まあ、断る気もないのでそのままにしておく。

「なら帰りましょうか」

さよはそう言って、俺の手を握ってきた。

俺はそれを握り返して、一緒に帰る。

これで学園祭一日目が終わった。

第17話　学園祭デート前編（後書き）

只今、アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは12月13日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果

明日菜　7票
夕映　5票
エヴァ　3票
アキラ　2票
千雨　1票
このか　1票
のどか　1票
マナ　1票
アリサ　1票

となっています。

このまま明日菜の独走体勢となるのか～、それとも夕映が逆転するのか～

みなさんもぜひアンケートに参加してください。

今後もこの作品をよろしくお願いします。

第１８話　学園祭デート中編（前書き）

アンケートについては後書きをご覧ください。

前回から引き続きヒロインとのデート編です。

第18話　学園祭デート中編

学園祭二日目、今日は朝から千雨とデートだ。

今日は千雨、木乃香そして裕奈とデートする事になっている。

俺たちは今、とあるコスプレイベントの会場に来ていた。

千雨がどんなイベントか見てみたいと言ったからだ。

イベントはコンテスト形式で各個人がゲームやアニメなどのキャラクターのコスプレをして、舞台の上で芸を披露している。

参加者は小学校から大人まで様々で、舞台の上で歌ったり、名シーンの再現などをしていた。

「思ったよりクオリティがいいな」

確かにこのイベントの参加者のコスプレはレベルが高かった。みんな、おそらく自作の衣装でかなり気合いが入っている。

「そうだね、でも良かったのか？」

「なにがだよ？」

「千雨はこれに参加したいんじゃなかったのか？」

「なっ、なんで！？」

千雨は俺の問い掛けに狼狽した表情を見せる。

「た、確かに参加はしたいけど、私はそんなに可愛くないし……」

「出たいなら出ればいいだろ」

千雨が自信がなくて出れないと言っているので、出るように勧める。

その後も随分と迷っていたようだが、千雨は結局参加することとなった。

受付の時間は大丈夫かと思ったがそこは流石の麻帆良、大丈夫のようだ。

しばらく、他の参加者を見ていると千雨が出てきた。

出てきた千雨は某軽音部の恥ずかしがり屋のコスプレをしていた。

そして、アピールタイムに入る。

千雨は歌でアピールを行う。歌声にはまだ恥ずかしさが残っているが、その姿は一生懸命で歌とともに俺の目に焼き付く。

そして歌が終わると観客から歓声が起こった。

イベントが終わり、千雨と一緒に少し早めの昼食をとる。

「惜しかったな、優勝できなくて」

「まあ、まさか私もここまでイケるとは思ってなかったからな。でも充分だよ」

結局、イベントで千雨は三位に終わった。しかし千雨の表情は満足そうだ。

千雨はこういったイベントは初参加だったらしい。

無理やりだったが、イベントに出て良かったと言っていた。

「な、なあ」

昼食が終わり、デートの時間も終わりに近づく。その時、千雨が言葉を発する。

「どうかしたのか？」

千雨に聞いてみるのだが、だいたい言いたいことはわかっていた。

「あ、あのな、私と仮契約をしてほしいんだ」

そう千雨は俺と仮契約をしたいらしい。

まあ昨日二人としたから、もしかしたらと思っていたが、やはりそうだったようだ。

「いいよ、そのかわり千雨からしてくれる？」

千雨は仮契約をするのを恥ずかしがっている。その姿を見て、少し意地悪がしたくなった。

「んっ！」

真っ赤な顔をした千雨は俺との距離を一気に縮め唇を重ねてくる。

もう少し狼狽をするかと思っていたが、躊躇いなくキスをされたことに驚いた。

仮契約の魔法陣が発動し、カードが出てくるが千雨はまだキスを止めない。

十数秒ほどが経ちようやく千雨が唇を離す。その顔は真っ赤だった。

コピーカードを作ると千雨はそれをひったくるように俺から奪い取った。

「じゃ、じゃあ、また後でな！」

千雨はそう言って逃げるように立ち去る。

俺は千雨の後ろ姿を可愛く思いながら見送った。

◇

昼からは木乃香とのデートだ。

待ち合わせの広場に到着したが木乃香の姿は見えない。まだ来てい

ないようだ。

ただ待っているのも暇なので近くの屋台に行く。そこではどうやら高校生がアクセサリーを売っている。

そこに並べてあるアクセサリーは指輪やネックレスなどで全て銀でできていた。生徒手作りと書かれてあるので銀粘土から作ったのだろう。

並べられている指輪を一つ手に取る。それには桜の花があしらわれていた。

その指輪が気に入ったので購入する。

そして待ち合わせ場所に戻るとちょうど向かい側から木乃香が駆けてくる。

「すずく～ん！」

「木乃香」

木乃香は走ってくる勢いのまま、俺に抱きつく。

結構な勢いだったので、抱きつかれたときに少しよろけるが、しっかりと木乃香を抱き止めた。

「ありがとうな、すずくん」

木乃香は俺にお礼を言うが、離れようとはしない。

離れさせようと思ったが、せっかくのデートなのでこのままにする。

腕を組み直して歩き始める。

「えへへ～」

木乃香はかなり機嫌良く歩いている。

理由はさきほど参加したイベントだ。

木乃香と腕を組んだまま歩いていると、急に学生に捕まえられイベントに連れて行かれた。

話しを聞いてみるて俺たちはカップルイベントに参加させられるそうだ。

まあ、あの状態で恋人と思われないほうが不思議なんだが……

木乃香は即決で参加を決めたし、断る理由もなかったのでイベントに参加する。

最初は水着コンテストだった。

これは審査基準がよくわからなかったのだが高評価を得た。

そして次の審査はタキシードとウェディングドレスを着ての審査だった。

ウェディングドレスを着た木乃香はとても綺麗で本気で見とれてしまった。

「な〜すずくん、うち似合っとるかな？」

「あ、ああ、よく似合ってる。綺麗だよ」

まるでこれから木乃香と結婚式を挙げるみたいで照れてしまった

木乃香はそんな俺を見てクスクスと笑っている。

そのままの格好で最終審査に入り、キスをすることになる。

それを聞いても木乃香は動じず、むしろ真剣な表情で俺を見つめてきた。

「すずくん、うちなすずくんのことが好きや」

木乃香が俺に対して告白をしてくる。

イベントだからではなく、本気で言っているのはその真剣な表情でわかった。

「多分、すずくんがここで答えを出すんはできへんこともわかっとる。だってすずくんはゆーなわ千雨ちゃんが自分のことを好きなんを知っとるもん。

すずくんは優しいからうちの告白に答えることなんてできへんハズや」

木乃香は俺のことをそう言うが、それは間違っている。

俺は木乃香の唇に思いっきり口づけを交わした。

「えっ」

木乃香は驚いた表情で俺を見つめる。

そんな木乃香に俺は本心を話す。

「確かに裕奈たちが俺のことを好きなのは知ってるよ。でもさ……」

木乃香は俺が答えを出せないと言ったがそれは違う。

「俺はさ、みんなのことが好き。だからさ、木乃香だけとは付き合えない。

こんな俺だけど傍にいてくれないか？」

そう宣言してもう一度木乃香と唇を重ねる。

木乃香はそれを拒まず受け入れてくれた。

唇を離すと木乃香は笑顔だった。

「みんなと付き合うんか。うちは嫉妬深いで～、構ってくれへんと拗ねるからな」

「なら約束する。木乃香のこともずっと愛するって」

「もってことはみんなもやん」

そういって二人で笑う。周りはおいてけぼりだがそのまま続けた。

「木乃香、左手出して」

木乃香から差し出された左手の薬指に待ち合わせ前に買った指輪を嵌める。

木乃香の顔を見ると、木乃香は泣いていた。

「ありがとうすずくん、めっちゃ嬉しいわ」

そしてもう一度木乃香を抱き締めキスをする。

その瞬間周りから大歓声が起こった。

そのままイベントの優勝は俺たちのものになり、今に至る。

今、木乃香の手にはパクティオーカードとイベントで渡した指輪がある。

パクティオーカードはイベントでキスをしたときについでにできた物だ。

「うちこれ大事にするわ～。すずくん、これからもよろしくお願いします」

木乃香は深く頭を下げてくる。これからはパートナーとして恋人として彼女のことを大切にしなければならない。

「みんなにも伝えとくな。これからゆーなとデートやろ、ゆーなに

はちゃんと自分で伝えるんやで」

木乃香はそう言って立ち去っていく。

木乃香とのデートのおかげで覚悟が決まる。

誰か一人は俺は選べないだろう。だから全員を選ぶ。

全員を幸せにする事はできないかもしれないけど、みんなが大好きだから彼女たちのことを大切にしていこうと思った。

そして俺は裕奈とのデートに向かった。

第１８話　学園祭デート中編（後書き）

只今、アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果

明日菜　８票
夕映　６票
エヴァ　３票
アキラ　２票
のどか　２票
このか　１票
千雨　１票
マナ　１票
楓　１票
アリサ　１票

となっています。

明日菜と夕映が他を引き離しにかかりましたね～

みなさんもぜひアンケートに参加してください。

今後もこの作品をよろしくお願いします。

第１９話　学園祭デート後編（前書き）

デート編ラストです。

ちなみにアンケートについては後書きをご覧ください。

第１９話　学園祭デート後編

木乃香と別れ、裕奈との待ち合わせ場所に向かう。
俺が待ち合わせ場所に到着したときには裕奈はもうすでにそこで俺のことを待っていた。

「裕奈！」

俺が呼び掛けると裕奈は俺の方を向いてくれる。

「涼くん！」

「待たせてゴメンな……」

「大丈夫！今来たばっかりだし……それより早く廻ろうよ！」

裕奈は俺の腕に自分の腕を絡ませて歩き始めた。
裕奈はすでに貸し衣装屋で着替えていたのか、セーラー服を着ている。

「ねえねえ、あれなんてどうかな？」

裕奈が指指した先には射撃のアトラクションがあった。
……学園祭の出し物にこれほどの物を作れるとかスゴすぎるだろ。

学園祭の出し物に微妙な思いを抱きながら、裕奈とともにアトラクションの中に入る。

「じゃあスコアで勝負しよ！昔みたいに負けたら勝った人の言うことを何でも聞く」

「今回は負けないよ、裕奈」

「また勝たせてもらうよ、涼くん」

そしてアトラクションがスタートする。

裕奈も俺も的が見えた瞬間にはすでに引き金を引いていて、しかも殆ど外すことがないため早撃ちの勝負になっている。

アトラクションが終わりスコアを見る。

すると裕奈よりも俺の方がスコアは高かった。

「あちゃー、負けちゃったかー」

「この手のゲームとかで裕奈に勝ったのって久しぶりだな」

「そうだね～、いつも私が勝ってたし」

裕奈に射撃関係のゲームで勝つのは本当に久しぶりだった。

いつも修行の時にやっている魔法の射手の勝負もゲームセンターでやるシューティングゲームも殆ど裕奈が勝っている。

「涼くんは私に何をお願いするのかにゃー？」

「う～ん、デートの終わりにお願いするよ」

裕奈へのお願いはデートの終わりにすることにした。

俺がそう言った時に裕奈の表情が少し曇った気がしたが、気のせいだと思いそのまま学園祭を二人で廻る。

学園祭では遊園地のようなアトラクションが多数並ぶので、遊園地でデートしているようだった。

そして日も暮れかかった頃、俺と裕奈は世界樹の木の下にいた。

「ねえ、涼くん」

裕奈がふと声を掛けてくる。

そちらの方を見ると裕奈は俯き加減で世界樹にもたれ掛かっていた。

「涼くんはさ……このかのことが好き？」

いきなりの裕奈の問い掛けに一瞬理解が追いつかなかった。

「このかとデートしてたじゃん。その後ろで私はずっと覗いてたんだ」

裕奈の独白は続いていく。

「二人がさ、カップルイベントに出たとき、涼くんがこのかにキス

したり指輪を渡してるのを見て、ものすごいイヤな気持ちになった」

裕奈の表情を見ると泣き出しそうな顔をしている。

「私は涼くんのことが好き、でも涼くんがこのかのことが好きなら、私は涼くんのことを諦めるよ」

裕奈は涙を零しながら俺に告白した。

どうやら舞台上での俺と木乃香のやり取りは裕奈には聞こえてなかったようだ。

俺は裕奈にイベントの時に木乃香に言ったことを同じように伝える。

「裕奈、俺はさみんなのことが好きだ、裕奈だけじゃなくて木乃香も、千雨も、超も、さよも、みんなのことが大好きなんだ。

だから俺は誰か一人と付き合うんじゃなくて、みんなと一緒にいたい」

俺の言葉に裕奈は戸惑いを隠せないようだ。

「ねえ裕奈、もし裕奈がいいなら俺と一緒にいてくれないか。木乃香たちも一緒にいるけど、みんなのことは大事にするから……」

俺が言い終わったときには裕奈はすでに泣き止んでいた。

そして裕奈は俺の言葉に呆れたように返してくれる。

「仕方がないな～、わかったよ涼くん。そのかわり本当に私たちの

ことは大切にしてね」

「当然だろ、絶対に大切にする」

そして俺は裕奈を抱き締めた。

抱き締めた裕奈の心臓の音が身体に伝わる。

俺たちはそっとキスをする。仮契約の魔法陣が発動され、俺たちの手元にカードが現れた。

「これで、昔の約束は守れたね」

「昔の約束って、涼くんまだ覚えてたんだ」

「裕奈との約束だからね」

昔、裕奈とした仮契約の約束を今も俺が覚えていることに裕奈は驚いているようだ。

そしてすぐに嬉しそうな表情に変わる。

「じゃあさ、学園祭が終わったらお父さんたちに報告しよう」

「複数の女の子と付き合ってますって言ったら殺される気がするけどね……」

「そのときは甘んじて受けとめてください」

そして俺たちは手を繋いで笑い合いながら帰る。

こうして裕奈たちとのデートは終わった。

◇

そして、学園祭最終日。

俺はあさぎと学園祭の警備についている。

学園祭では多数の人が入場するため、侵入者が入場者に紛れて麻帆良に侵入してくることがある。

侵入者の目的は様々だが、最終日に発光する世界樹の魔力を利用することだったり、図書館島に侵入して魔導書を盗むことだったりする。

図書館島の方はクウネルがカバーしているため大丈夫だろうが、他の場所は万が一入場者が人質にされたりするといけないので、早めに侵入者は捕らえないといけない。

そして今、俺たちはその侵入者と対峙していた。侵入者はフードで顔を隠しており、顔はわからない。

学園祭という楽しいイベントの日にこういう奴らと戦わなくてはならないとは嘆かわしいことだ。

あさぎの空間転移により、魔法の中心からは少し外れた場所に侵入者とともに転移する。

侵入者は転移したことにも驚かずそのまま佇んでいた。

「なぜ、麻帆良に侵入したのかな？」

「ふんっ」

あさぎが侵入者に問い掛けるが、侵入者はあさぎに襲いかかってくる。

しかし、あさぎは華麗に躱し侵入者の後ろに回り込んだ。

「もう一度聞くよ、なぜ麻帆良に侵入したのかな？」

侵入者の首を手で握り、もう一度問い掛ける。

そして、侵入者は口を開いた。

「お前たちが目的だよ介入者（イレギュラー）！！」

侵入者はあさぎに蹴りをいれて引き剥がす。

しかし、俺たちはソイツの言った言葉に驚きを隠せない。

「なぜ、そのことを……」

俺たちが動揺していり隙をついて侵入者は攻撃を仕掛けてくる。

それを回避して、短剣を抜き侵入者に斬りつけた。

「ほう」

しかし避けられる。

それから俺とあさぎは魔法を放ったり、二人で接近戦を挑んだりしたが、その全てが回避されるか障壁によって阻まれる。

「まさか、貴様らの力はその程度なのか……」

侵入者の失望混じりの声が聞こえてくる。

この侵入者はかなり強い。コイツには聞きたいことがあったため、ある程度加減をしていたとはいえ、俺たちが二人がかりで一撃も加えることができないのだ。

俺とあさぎは顔を見合わせて頷き合う。

今までは捕らえるために加減をしていたが、相手が格上のために全力でぶつかるようにする。

「“白き雷”！！」

「“紅き焔”！！」

俺たちの魔法を合図に第2ラウンドが開始する。

魔法は障壁に阻まれたがその隙に瞬動で距離を詰め、神斬の太刀を展開しつ斬りつけた。

侵入者はいきなり上がったスピードに反応が遅れる。

太刀は障壁を破ったが侵入者のローブを少し斬り裂いただけだ。
しかし後ろにいるあさぎが魔法を放つ。
「“雷の暴風”」
雷の暴風は侵入者を直撃するが俺たちの攻撃は止まらない。
「壱の太刀“地砕き”」
「発動“雷の斧”」
俺の地砕きとあさぎの雷の斧が侵入者に直撃する。
侵入者は地面に倒れたまま動かない。
「ふう、なんとか倒せたね～♪」
「ああ、そうだな」
もし油断なんかせずに攻撃されていたら、こちらが危なかっただろう。
相手が油断していたおかげで一気にこちらが畳み掛けられた。
俺たちは侵入者を倒し安心していたが、急に侵入者の方から莫大な魔力を感じる。
「なっ！？」

侵入者から距離をとりもう一度向き直ると、侵入者はすでに起き上がっていた。

ダメージは入っているようで、腹部を手で押さえている。

「なるほど、今のがお前たちの全力か……これでは少々分が悪いな、引き揚げさせて貰おう」

そう言ってソイツは影のなかに消えていった。

「何で俺たちのことをしっていたんだ？」

「それにどういう目的なんだろうね？」

侵入者を逃がしたことで情報が手に入らない。

新たに現れた俺たちのことを知る存在。

これが俺たちにどう影響してくるのかはわからない。

こうして中学最初の学園祭は終了した。

……新たな疑問を残して

第１９話　学園祭デート後編（後書き）

只今、アンケート中

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果などによっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

現在のアンケート結果

明日菜　９票
夕映　６票
エヴァ　３票
マナ　３票
アキラ　２票
のどか　２票
アリサ　２票
このか　１票
千雨　１票
楓　１票

となっています。

明日菜が他を引き離しにかかりましたね～。

これからどうなっていくのか、結果が楽しみです。

みなさんもぜひアンケートに参加してください。

第２０話　原作開始（前書き）

ようやく原作第１話に入りました。

と言っても最初の部分だけですけどね……

アンケートについては後書きをご覧ください。

ではどうぞ

第２０話　原作開始

中学最初の学園祭が終わり一年半が過ぎた。
あの時現れた侵入者についてはいまだに一切の情報が集まらず謎のままだ。
そして中学二年の三学期を迎え、ようやく原作が始まる時期がやってきた。
ネギ・スプリングフィールドたちが麻帆良に修行をしに来るという情報はすでに得ている。
しかし、メルディアナでどういった風に育てられ、どんな人格なのかといったような情報は全く手に入らなかった。
こういった情報はかなり規制されているようだ。
あさぎが高畑に聞いたようだが、あまり有益な情報が得られなかったのも痛い。
高畑が言うにはネギの方は良い子で妹の方には会っていないからわからないらしい。
これを踏まえ、俺たちは今後の指針を決めるために集まっていた。
「妹の方はともかく、問題は兄のネギ・スプリングフィールドの方だな」

エヴァが口を開く。

そう問題はネギ・スプリングフィールドをどうするかであった。

ネギは超の知っている未来において、俺たちと敵対している。

その内容も英雄である父親のことを否定されてのものであった。

それに伴い、高畑やゲーテルも敵対しているのだ。このあたりの説得や説明をしっかりしておかないとここでも敵対する可能性がある。

「しかし、まずは会ってみないことにはどうしようもありません」

「なら、うちらがそのネギ君の見極めをするわ。うちが迎えに行くように言われた新任教師ってそのネギ君のことなんやろ？」

「そうだね～、私らのクラスに配属されるなら私らで一旦確認してみるよ」

クウネルの言葉に木乃香と裕奈が発言する。

ネギはおそらく原作通りに裕奈たちのクラスの担任を任されるはずだ。

だからまずはネギの見極めをみんなにさせるのは良いことだと思う。

さよや超、千雨はもとよりエヴァや茶々丸も同じクラスなのだ。これだけの人数が評価すれば、だいたいの人物像が見える。

「なら、任せました。それで妹さんの方はどうしましょうか？」

「妹の方はボクと涼クンで対応するよ♪」

「人物評価は置いといて、接触はすべきだからな」

ネギの妹であるイレギュラーの方は俺とあさぎが対応することになる。

これは前々から二人で話し決まっていたことだ。

悪魔襲撃の時に彼女に原作についての知識を持っているかを聞くことができなかったので、接触し聞き出す必要がある。

そのためにもあさぎがゲーテルたちに手を回して、妹の修行先が麻帆良になるようにしたのだ。

それ以外にも俺たちの計画への協力を求めないといけない。

学園祭のとき俺たちが相対した侵入者はイレギュラーである俺たちを目的としていた。

ゆえに彼女にも関わってくる可能性はかなり高いだろう。

もし、あの侵入者が敵の場合こちらの仲間を増やしておきたいのもあるし、彼女自身が俺たちの計画を狂わさないためにも彼女を味方にする必要がある。

「では皆さん、これからが本番です。頑張っていきましょう」

クウネルの言葉にみんなが頷き会議は終わった。
そして運命の日を迎える。

◇

現在、この場所には多数の人間が集まっていた。
壇上には威厳のある老人が佇んでおり、その正面には子どもたちが並んでいた。

「卒業証書授与――」

今日、この場では魔法学校の卒業式が行われている。
私はそれに参加していた。

悪魔襲撃事件のあと、私はこのメルディアナ魔法学校の校長に預けられ、この学校に入学することになった。

しかし私はあの事件のときに身に宿った魔力の殆どをあの父親に封印されてしまった。

アイツが私と仲の良かったパン屋の家族を殺したことで私が魔力を暴走させたときに封印されたらしい。

このことは校長も知っている。

校長は私にかけられた封印を解こうと様々な文献を探してくれたが、アイツの膨大な魔力とむちゃくちゃな術式でかけられた封印は解除することはできなかった。

私は校長に対し、父親を恨んでいることを伝え魔法を学び始めた。

校長は復讐のために魔法を学ぼうとする私を止めようとしたが、私を止めることはできず仕方なしと言った表情で魔法を教えてくれた。

それと同時に石化した村の人を治す方法の研究を始める。

こちらは全くといっていいほど進まなかった。

当然であろう。もし簡単に治療ができるのであれば原作でも治療をなされていたはずだ。

そして魔法学校を入学したあとのことだ。

魔力を封印された私は、魔法を何度も使うことができない。

教師はこのことを知ると失望を露わにし、英雄の子どもなのに……と愚痴を零した。

生徒も同様だった。封印された私の魔力は一般人並みにも劣る。そんな私を彼らはバカにした。

教師に隠れて魔法の射手を撃たれることなど日常茶飯事だった。

教師たちも才能のあるネギの面倒ばかりを見て、私のことなど見て見ぬふりだった。

ネギは侵入禁止の書庫の中に入っても見逃されており、優遇されていた。

それに比べ私は、教師による魔法の指導はおざなりでずっとイジメられていた。

実はそのイジメにネギが関わっていたと知ったときは愕然とした。

ネギは同じ親を持ちながら魔力の少ない私を虐げていた。悪魔襲撃のあの日父親から自分だけ杖を貰ったこともそれを増長させているだろう。

このことはネカネ姉さんやアーニャは知らない。私が校長に口止めしたからだ。

というより、一度これを説明したとき二人は信用してくれなかった。

ただ、私がイジメられていることは知っていた。

しかし何もしてくれない。

私があの日からネカネ姉さんたちとは暮らさず、校長のところにお世話になってからというもの彼女たちとの交流は学校で擦れ違うぐらいのものだった。

たまに何かを言おうと近づいてくるが、結局何も言わず立ち去っていく。

校長もイジメを知り対処はしてくれていたのだろうが、あまり効果

は感じなかった。

イジメに耐えきれず泣いた夜もあったし、死のうとして包丁で手首を切ったときもあった。

包丁で手首を切ったときは校長に治療され、あとでものすごく怒られた。

そんな私が今まで頑張ってこられたのは父親への復讐心ともう一つ、あの日に出会った男の子ともう一度会いたいという思いだった。

「――アリサ・スプリングフィールドさん」

こうしている間にも卒業式は進み、私の名前が呼ばれる。

私はネギと同じで、飛び級で卒業することになる。

これは実力だと思う。実技における魔力コントロールや魔法の精密性、魔法の知識や一般教養は他の子どもたちより遥かに上だからだ。

教師たちもそれだけは認めているのか、私の卒業に文句は言わなかったようだ。

「卒業生代表ネギ・スプリングフィールド君」

ネギが答辞を読む。主席はネギになったが魔力を暴走させ、隠蔽もできない者が主席でいいのだろうか？

これは教師の一部からも出た意見だった。

これらの教師は私たちに偏見などを抱かずにしっかりと指導を行ってくれた教師だ。

しかし、多数の英雄の息子を持ち上げたい連中によってネギは主席に祭り上げられた。

ちなみに総合成績では私の方が上であったと校長に教えられた。

そんなネギが壇上に上がり答辞を読む。途中、私と目があったときに見下したような表情をしてきたのが不愉快だったが、気にしないことにした。

そして卒業式も終わり、手に持った紙に修行の内容が浮かび上がる。

そこにはこう書かれていた。

――日本で司書をやること――

働くための方法や具体的な場所などが書かれていないため、校長のところに向かう。

そこにはネギたちが校長に何かを詰め寄っていた。

どうやらネギは原作通り日本で教師をするようだ。

ネギたちが校長から離れていったのを見計らって校長に近づいた。

「校長、私の修行先はどのようにすればいいのでしょう」

「アリサか、確か修行は日本で司書だったのう」

校長は私の方を向き直って答えてくれる。

「日本の麻帆良学園で司書を勤めてもらうことになる。ネギも同じ場所じゃ、まあアヤツの場合教師じゃがのう」

ネギと同じ場所で修行をやることに嫌悪感を感じる。

校長はそんな私の表情を見て、

「おヌシがネギのことを嫌っておるのは知っておる。しかしのう、おそらくおヌシはネギのクラスに配属されることになるだろう」

どうやら、私はヒロインたちと同じクラスに配属されるようだ。

しかし五歳も年上と同じクラスは問題だろう。まあ気にしないが……

「ただ、修行先の人間がおヌシをそこに来させるのを望んだらしい、まあ彼らは信用できると思うから安心せい」

修行先の人間がわざわざ私を指名したのは気になったが、考えても仕方ないので部屋に戻り荷造りをすることにした。

そして出発の日を迎える。私は向こうの始業式が始まる前に麻帆良に行くことにした。

校長やドネットさんに卒業祝いを貰い見送られて空港に向かう。

空港に到着し日本への便を待つ。そのとき後ろから声をかけてくる人がいた。……ネカネ姉さんだ。

正直、ネカネ姉さんのことはどうでもいい。家族というほど交流もなかったし、赤の他人に等しいからだ。

だから今更見送りに来られても困る。

ネカネ姉さんはずっと俯いていたが、私の顔を見てようやく口を開いた。

「あの、アリサ。家族なのに何もしてあげられなくてごめんなさい」

そうしてネカネ姉さんは深く頭を下げる。

私は今だに、私のことを家族だと言うこの人が信じられなかった。

というより私自身、彼女のことは家族ではないと思っていたからだ。

今も必死に謝ってくる彼女を呆れた表情で見つめる。

「それでねアリサ。これ、卒業祝い」

そう言ってネカネ姉さんは包みを手渡してくれた。

そして、日本行きの便が準備できたようなので乗り込もうとする。

「アリサ！！身体にだけは気をつけてね！！本当に何もしてあげら

れなくてゴメンね！！」

ネカネ姉さんが後ろで叫ぶ。その声を聞きながら私は自分が乗る飛行機へと向かった。

◇

私はアリサに対して何もしてあげられなかった。

あの日悪魔襲撃事件があり、私たちはメルディアナにお世話になることになった。

アリサは校長のもとに預けられた。私ではネギの面倒を見るので精一杯だったからだ。

アリサは年齢の割りにしっかりしている子で、それに比べネギは誰かが面倒を見ないと危なっかしい子だったからだ。

それからというものアリサとは離れて暮らしていた。

アリサと会うのは私用で学校に行くときにたまたま遭遇する程度だ。

離れて暮らしているアリサに私は何を話せばいいのかわからなかった。

魔法学校に入学してから、アリサが魔力を封印されていることを知った。そしてイジメにあっていたことも……

私はそのときに何もできなかった。

そしてそのイジメにネギが関わっていると聞いたときはアリサの言葉など信じなかった。ネギがそんなことをするとは思わなかったからだ。

そして卒業式を迎え、ネギのことについての話しが終わり帰宅したあと、アリサのことを思い出し校長先生のところに向かった。

ネギのことばかりでアリサのことに気が回らなかった自分を責めつつ、校長先生にアリサのことを問い掛ける。

校長先生はアリサについて修行先だけではなく、いろいろなことを教えてくれた。

アリサの好物や癖などこんなことさえも知らない自分が情けなくなった。

そして、イジメにネギが関わっていたのが事実だと知った。

しかし私はネギのことを叱ることもできずに日を過ごしていった。

そしてアリサが出発する日。私はアリサを見送るために空港に行った。

アリサに声を掛けるがアリサの表情は私に対して無関心であった。

その表情に悲しみを抱きながら謝り、卒業祝いを手渡した。

謝罪のときの呆れた表情を見たとき、私は心臓を掴まれたように動

けなくなったがなんとかそれを表に出さなかったと思う。

そうしてアリサは飛行機に乗って日本へと向かった。

そんなアリサを私は見送ることしかできなかった。

第２０話　原作開始（後書き）

アンケート中です。

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果によっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

今の構想では本編後のＩＦかネギが来る前のクリスマスの話しになりそうです。

現在のアンケート結果

明日菜　１１票
夕映　６票
マナ　４票
エヴァ　３票
アキラ　３票
のどか　２票
アリサ　２票
このか　１票
千雨　１票

楓　　1票

となっています。

アンケートお待ちしています。

第２１話　麻帆良到着（前書き）

もうどれくらい連日投稿してるのかわからなくなりました

ちょっとずつ物語は進んでいきます。

ＥＳ書くのが面倒くさい作者です。

ではどうぞ

第２１話　麻帆良到着

私は飛行機に乗り日本へ到着したあと、電車などを乗り継いで麻帆良にたどり着いた。

飛行機の中でネカネ姉さんから貰った贈り物を開いてみると、中身はブレスレットだった。

ところどころ澄んだ蒼色の宝石があしらわれており、なかなかセンスの良いものだ。

これは魔法の発動媒体にもなるようなので、身につけることにする。

麻帆良に到着し迎えを待つ。

するとこちらに何人かの人が駆けてくる。近づくにつれてその人たちがどんな顔なのかがわかる。

どうやら中学生ぐらいの女の子が四人と女性が一人がこちらに向かってくるようだ。

その人たちは私に近づくと声をかけてくる。

◇

今日はイギリスからアリサ・スプリングフィールドが来る日なので、このかちゃんたちを連れて駅まで迎えに行く

駅が見えてくると、そこにはすでにボクたちを待っているであろう少女がいた。

「アリサ・スプリングフィールドちゃんかな？」

「はい」

ボクが声をかけるとちゃんと返してくれる。

アリサちゃんの顔をまじまじと見てみる。確かに悪魔襲撃事件のときに涼クンに抱きしめられていた子どもの面影がある。

「ボクは霧島浅葱、君が修行する図書館の司書長を勤めているんだ♪」

「アリサ・スプリングフィールドです。これからお世話になります」

ボクたちの自己紹介を皮きりに他のみんなも自己紹介を始める。

「私は明石裕奈、ゆーなでいいよ、よろしくねアリサちゃん」

「うちは近衛木乃香、このかでええよ」

「私は相坂さよです。よろしくお願いします！」

「私は長谷川千雨だ。まあよろしく頼む」

「よろしくお願いします」

みんながアリサちゃんに自己紹介をし終わる。

そしてみんなはアリサちゃんを抱きしめたり、頭を撫でたりして構い倒している。

「うち、アリサちゃんみたいな妹欲しかったんよ～」

「私も妹が欲しかったんだ～」

「まあまあ、二人ともそれまでにしなよ♪学園長への挨拶もあるんだから♪」

ここで時間を潰して学園への挨拶に行くのが遅れてしまってはいけないので、抱きしめている二人を止めて学園長のもとへ向かう。

さよちゃんや千雨ちゃんを学園長に近づけて、魔法関係者だとバレるのはマズいのでここで一旦別れる。

今回頼まれたのはボクとこのかちゃんだけだったが、みんなもついていきたいと言ったので連れて来たのだ。

ゆーなちゃんは魔法関係者ということとボクの弟子ということで学園長室まで連れていっても問題はないだろう。

アリサちゃんを連れて学園長室へ向かう。

道中ではアリサちゃんのことについていろいろ聞いた。

好物や趣味、どんな魔法を習得しているかなど質問は様々だ。

魔法について質問したとき、少し驚いた顔をしていたが、さっきいた全員が魔法関係者ということを説明する。他にも周囲の人間にバレないように簡単な魔法を使用していることも教える。

するとアリサちゃんは納得したような表情になる。

そうこうしているうちに学園長室にたどり着いた。

「学園長、失礼します」

ドアをノックして学園長室に入る。

学園長室にはタカミチと学園長がいる。タカミチはナギの娘を見にきたみたいだ。イギリスに行ったときは殆ど話しをすることもなく遠目から見ただけだと言っていたし……

「よく来たのうアリサちゃん、儂はこの麻帆良の学園長をやっておる近衛近右衛門じゃ」

「僕は高畑・T・タカミチだ」

「アリサ・スプリングフィールドです」

三人が挨拶しているのを後ろでボクたちは見ている。

「図書館で司書ということでそれに関しては浅葱君に一任しておるから、そちらにいる浅葱君に聞くとよい」

そう、アリサちゃんの修行はボクが責任を負うことになっている。
まあ、もともと放任しておく予定だったようなのでこのあたりはスムーズにいった。
問題はここからだ。
「それでのう、アリサちゃんはまだ子どもじゃから学校に通う必要があるのじゃ」
「はあ」
「しかし、君の知能はかなり高いと聞いておる。じゃから君には中等部の方に飛び級というかたちで入って貰おうと思う」
正直、これはアリサちゃんをネギと同じ場所に配置するための口実だと思う。
アリサちゃんも少し苦い顔をしているようだが、一応納得したようだ。
「それと君の住居じゃが」
「じゃあボクの方で預かるよ♪流石に子どもだけで面倒を見るというのはキツいだろうし、同僚として近いところに住んでいた方が便利だしね♪」
学園長が何かを言う前にボクが住む場所を提示する。
こうしたのはボクと同じイレギュラーである彼女の近くにいた方が

便利という理由と、これから来るであろうネギに対する対策でもある。

ネギが教師として来るのは知っている。おそらく原作通り、学園長はこのかちゃんのところに住まわせる筈だ。

このかちゃんは涼クンと付き合い始めてから、貞操に関してしっかりし始めたので例え子どもとはいえ男と同じ場所で暮らすのは嫌だと言っていたのでこの方法をとることにした。

こうすることでネギが女子学生寮で暮らすのを防ぐのだ。

まあこのかちゃんの場合、涼クン以外には興味ありませんって感じだけど……

アリサちゃんの住む場所もあっさり決まり、学園長室をあとにして図書館島へ向かう。

図書館島には既にみんなが揃っていた。

アリサちゃんはこの場にいるメンバーに驚いているようだ。

「ようこそいらっしゃいました。私のことはクウネルと呼んでください」

クウネルさんの挨拶が終わり、アリサちゃんを中に案内する。

中に入るとクウネルさんはアリサちゃんに今まで起こったことやボクたちの計画などを全て話し始めた。

◇

私は浅葱さんにに案内され図書館島に着くとそこにはクウネル・サンダースとエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル、そしてもう一人中学生ぐらいの男の子がいた。

なぜ既に二人が会っているのかがわからないが、このかさんが既に魔法のことを知っているのでおかしくはないのだろう。

私はそんなことより、一緒にいた男の子の方が気になっていた。悪魔襲撃事件のときに私を抱きしめてくれた男の子に似ていたからだ。

中に案内されてクウネルさんから話しを聞く。

大戦のときに起こったこと、そしてクウネルさんたちがこれからやろうとしていることなどいろいろだ。

正直私はクウネルさんの目的などどうでもよかった。大事なのはナギ・スプリングフィールドに復讐することだけだ。

話しの内容の中にあの悪魔襲撃のときのこともあった。どうやらあのときいたのはそこにいる男の子に間違いないようだ。

私はそれが嬉しかった。会いたいと思っていた人にようやく会えたのだ。

そしてクウネルさんの話しが終わる。

私は素直に自分の意思をみんなに示した。

◇

今日ようやくアリサ・スプリングフィールドに会えた。

悪魔襲撃事件のときに会った彼女はそのときの面影を残したまま可愛らしく成長していた。

ただ彼女が無表情なのが少し気になる。

そしてクウネルの話しが終わり彼女が口を開いた。

「私はあなたたちの計画には正直興味がありません。私の目的はただ一つ、ナギ・スプリングフィールドへの復讐です」

彼女ははっきりとした言葉でそれを言った。

そして、あの悪魔襲撃事件の顛末を彼女から聞く。裕奈たちはそれに驚いているようだった。

「アッハッハ、なる程ならば私が力を貸してやろう」

エヴァはアリサの話しを聞いて笑いだす。エヴァもナギに対して麻帆良に封印された恨みを少し持っているようなので、彼女を鍛えることになんの躊躇いもないようだ。

「ああ、お前たちは指導をしなくていいぞ。コイツは私が鍛えるか

らな。ただ浅葱、あとでコイツの魔力封印を解いてやれ」

「うん、いいよ♪」

アリサにかけられたら封印はあさぎが解くようだ。

「エヴァンジェリン、あなただけで大丈夫ですか？」

クウネルの言葉にエヴァが言い返す。

「確かに涼は最高の弟子ではあるが、私一人で鍛えたわけではないからな。一度私だけで弟子を育てたいと思っていたんだ」

どうやらそういうことらしい。

エヴァの言葉にアリサも納得し、エヴァを師事することに決めたようだ。

そのあと図書館島から出てあさぎの家に向かう。

あさぎの家には家主であるあさぎとアリサ、そして俺のイレギュラー組が向かうことになった。

あさぎの家に到着し、アリサの荷ほどきを手伝う。

それが終わったあと、イレギュラー同士の会話が始まったのだが

「どうして、お前は俺の膝の上にいる？」

なぜかアリサは俺の膝の上にいた。

俺の腕を自分の首元に回して密着している。

「私はこうしていたいですから」

アリサはそのままの体勢であっさりとそう言う。その表情は少し柔らかく見えた。

「なら、君はボクたちの計画に参加しないってことでいいのかな？」

あさぎがアリサに彼女の今後の行動について質問した。

「いえ、私は協力させていただきます。確かにあなたたちの計画には興味はありませんが、私たちを狙っている存在にも興味はありますし、なにより……」

アリサはこちらを振り返り俺の腰に抱きついた。

「この人のそばにいたいですから」

アリサは俺に好意を示してくれている。

そして、どうやらアリサは俺たちに協力してくれるようだ。それには安心する。

こうして新しい協力者と俺に好意を寄せる人が増え物語は進んでいく。

第２１話　麻帆良到着（後書き）

アンケート中です。

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果によっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

今の構想では本編後のＩＦかネギが来る前のクリスマスの話しになりそうです。

現在のアンケート結果

明日菜　１３票
夕映　６票
マナ　５票
エヴァ　３票
アキラ　３票
のどか　３票
アリサ　２票
このか　１票

千雨　　1票
楓　　1票

となっています。

アンケートお待ちしています。

第２２話　ネギ襲来（前書き）

投稿です。

ここ2～3日急激にＰＶがのびたので驚いています。

ちなみにアンケートは後書きをご覧ください。

第２２話　ネギ襲来

アリサが来てから数日、今日からようやく三学期が始まる。

それはつまり、ネギが麻帆良に来て物語が開始することを意味する。

ここ数日はアリサに司書としての仕事を教えつつ、エヴァの別荘での修行を見ていた。

エヴァがアリサに修行を始めた初日、アリサの基礎を見るために簡単な模擬戦をさせられた。

あさぎによって魔力の封印が解かれたアリサは、その膨大な魔力を制御できずに魔法を暴発させた。

模擬戦はアリサの自爆という形で終了したが、至近距離で暴発した魔法はアリサを傷つける。

幸い木乃香が近くにいたことですぐに回復したが、このままでは危険すぎて魔法を使えない。

そんなアリサにエヴァは基礎から叩き込んでいた。

流石に数日ではコントロールできるようにはならなかったがひとまず魔法の暴発はなくなり、一般人並みには魔力制御ができるようになったようだ。

そんなこんなで新学期が始まった。

◇

今、うちは新任教師の迎えに行っとる。

隣には髪に鈴のリボンをつけ、ツインテールにしている女の子が走っとる。うちとルームメイトの神楽坂明日菜や。

「新任教師を待ってたのにいつまでたっても来ないなんて、どーなってんのよ」

うちらは駅で新任教師を待っとったんやけど、いつまでたってもけーへんし始業ベルまであと十分を切ったので学校に向かっとる。

……普通、教員やったら前日までに来て着任の挨拶とかするんやないんかなー。

現にアリサちゃんは前日に来とるし、あんま印象はようないな～。

アスナも新学期そうそう待たされたのに怒りを感じているみたいや。

「でもさ、学園長の孫娘のアンタが何で新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないの」

「アスナ、付き合わせてゴメンな～」

こんなことにアスナを付き合わせてしまったことに申し訳なさを感じる。

「でも、今日は運命の出会いありって書いてあるえ」

「え、マジ！？」

実際は手元にある占いの本やなく、うちが占った結果なんやけど……

ただし、占いの結果は不幸の始まりの出会いってでとった。おそらく新任教師が不幸を届けるんやろうなー。

そのまま、学校の方へ走っていると後ろから魔力を感じる。

その魔力の持ち主はうちらに追いつき併走を始めた。小学生くらいの男の子や。

「あの――あなた失恋の相がでてますよ」

その子はアスナに向けていきなり失礼なことを言う。

この子のことは知っとった。ネギ・スプリングフィールド君、うちらが迎えに行くはずの新任教師でうちらが見極めなあかん子や。

でも今のは占い師としてのタブーや、占い師は基本的に相手に負の印象を与えることは言ったらあかん。もし言う場合はちゃんとフォローをせなあかんはずや。

現にアスナはこの子に言葉によってかなり傷ついとるやろうし、随分と苛ついとる。

「取・り・消・しなさいよ～～～」

アスナがネギ君の頭にアイアンクローをかます。
すると後ろから、声をかけてくる人がいた。
「おーーい、ネギ君！」
その声に反応してアスナは手を離す。声をかけてきた人はどうやらうちらの担任の高畑先生やった。
「久しぶりタカミチーッ」
「っ！？し、知り合い……！？」
アスナはネギ君が高畑先生と知り合いなのを感じて過剰に反応する。
「麻帆良学園へようこそ、いい所でしょう？“ネギ先生”」
高畑先生の言葉にネギ君は一つ咳払いをして挨拶をし直す。
「この度この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」
「ええ――っ」
子どもが教師をやるということでアスナは驚きを隠せないようだ。
事前に聞いていたうちですらも、あらためて聞くと驚きを隠せない。
「ちょ、ちょっと待ってよ！先生ってどーいうこと！？あんたみた

いなガキンチョがー」

アスナがネギ君の首を掴みかかっている。

首を掴みかかるのはどうかと思うが、確かに子どもが教師をするのはどうかと思う。

「いや、彼は頭がいいんだ。安心したまえ」

「先生……そんなこと言われても…」

高畑先生は頭がいいから大丈夫だというが、子どもに責任がとれるのだろうか。

話しを聞いていると、担任も代わるようだ。

そしてそのことやさっきの占いのこともあり、アスナがネギ君に掴みかかる。

「はくちんっ！」

髪がくすぐったかったのかネギ君がくしゃみをするとアスナの服が脱げた。

「キャーーーッ！！何よコレーーーッ！！」

アスナが叫び声をあげる。男性に下着を見られたのだ、当然だろう。

ネギ君を見てみると不機嫌そうな表情をしている。占いを親切でやって何で怒られないといけないのかと思っとるみたいや。

でも、占いもアスナの服が脱げたこともネギ君に非があるんやから、本来はネギ君が謝らんとあかん。

それにアリサちゃんでも数日で魔法を暴発させることがなくなったのに、何年も学ぶ時間があったのに魔法を暴発させるとは……

うちのネギ君への評価はどんどん低くなってくる。

そしてうちらは学園長室に場所を移した。アスナは体操服に着替えている。

お爺ちゃんとネギ君は教師について話しとるみたいや。アスナはそれに噛みついとる。

そしてお爺ちゃんはうちらにもう一つの用件を伝える。

「このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの。まだ住むとこが決まっとらんのじゃよ」

「いやや」

お爺ちゃんの言葉にうちは拒否を示す。

「そもそも、その子が来ることはとっくに決まってたんやろ。なら、住む場所が決まっとらへんのはそっちの責任や」

「しかしのう〜」

「アリサちゃんは住む場所決まっとるやん。それに教師と生徒を同じ場所で寝泊まりさせる気なん？」

うちの言葉にお爺ちゃんが詰まる。

アスナもうちがこんなにはっきりと拒絶を示したことに驚いている。

「なら、うちらは先に行っとるから」

「失礼します」

うちとアスナは一足先に教室へと向かう。

もし、これで強引に寝泊まりさせようとする場合は他の人の力も借りる予定や。

流石に浅葱さんやお父様から言われたら無視はできんやろ。

「しかし、アンタがあんなに拒絶するなんてねー」

アスナはうちのあんなところは初めて見るから気になっているようや。

「流石のうちでも、明らかにおかしいことは拒否するわー」

「それもそうね、な〜んかあいつおかしいし」

アスナはネギ君が怪しみ始めている。

当然だ。いきなり小学校が教師ということには違和感を感じるのは当たり前だし、服がくしゃみとともに脱げたことも異常であるからだ。

彼は魔法学校で隠蔽の重要性について学んでないんだろうか。

教室に着き、席に座ってネギ君を待つ。するとゆーなたちが近づいてきた。どうやらネギ君について気になっているようや。

「このかー、どうだった？」

「いろいろとひどかったわー」

「なんかあたのかネ？」

「あー、アスナが服を脱がされたりなー」

「それはヒドいな」

「まだ寒いですし、男性教員もいますしね」

みんなと小声で話していると、ノックが聞こえた。みんなは急いで自分の席に座る。

すると扉が開き、ネギ君が入ってきた。

ネギ君が入ってくるて、頭上から鳴滝姉妹の仕掛けた黒板消しが落

ちてくる。黒板消しはネギ君の頭上で一瞬止まった。

教室がざわつく。まさか、日常生活にも魔法を使っているとは……
みんなを見てみると、呆れた表情をしていた。魔法の隠匿に関する
意識が低いからだ。

ネギ君の後ろからアリサちゃんが入ってくる。

二人は目も合わせようとすらせず、仲が悪いというのが凄くわかる。

ネギ君が壇上で挨拶をするとクラスが沸き立つ。

みんなはネギ君に質問をしたり、抱きついたりしている。

アリサちゃんはそのまま自分の席に座り、私たちとお話しする。

「アリサちゃん、同じクラスでよかったわー」

「まあ、あれが担任というのは気にいらないですけど」

そういったアリサちゃんの表情は本当にネギ君を嫌悪しとるようや
った。

「何かおかしくない？あんた」

ネギ君に集まっとるみんなを遮り、アスナがネギ君の首元を掴みさ
っきの黒板消しについて問い詰める。

「いいかげんになさい！！」

しかし、それをいいんちょが遮った。

結局、この場はアスナといいんちょの争いに発展したがしずな先生がおさめ、授業が始まる。

授業は結局はアスナがネギ君にチョッカイを出して、いいんちょとケンカしてとグダグダに終わった。

授業が終わり、クラスで歓迎会をするということなので買い出しに行く。

買い出しにはゆーなとさよちゃん、そして千雨ちゃんが手伝ってくれる。

買い出しが終わり、教室に帰っていると階段のところでクラスメイトを見つける。

うちと同じ図書館探検部の宮崎のどかやった。のどかは本を大量に運んでおり、階段なのに足下が見えていない。

フラフラとしていて危ないので、のどかを手伝おうと声をかけようとするが、のどかは階段から足を踏み外して地面に落下する。

「危ない！！」

ゆーなが急いで近寄り、のどかの腕をつかんで落下するのを止めた。

階段下を見てみるとネギ君が杖を構えている。

人を助けようとするのは立派やけど、放課後で人が多いのに魔法を

使おうとするんやな。

ネギ君は杖を構えたことでアスナに怪しまれ、そのままどこかへ連れていかれた。

それはおいといて、

「大丈夫、のどか？」

「は、はいー、大丈夫ですー」

どうやらのどかは無事のようや。

このまま、本を持っていかせるのも危ないので歓迎会の荷物はゆーなたちに任せて、うちはのどかを手伝い図書館島に向かった。

図書館島に本を返却し終わり、クラスに戻るとすでにアリサちゃんとネギ君の歓迎会が始まっていた。

アリサちゃんはクラスのみんなとメアドを交換したり、服や小物など女の子らしい話しをしている。

ネギ君はというと、

「アスナさんのことどう思ってる？」

高畑先生に対して読心術を使っていた。アスナの名前が出たことからすでにアスナには魔法のことがバレたようだ。

ゆーなたちもどうどうと読心をするネギ君に呆れた表情を浮かべて

いる。

「あれって……」

ゆーながうちにネギ君のしていることの確認をとってくる。とりあえずうちは頷いた。

高畑先生も何故、ネギ君が読心なんてしているのか考えていないようだ。

少し考えれば、アスナにバレていることはわかりそうなのに……

こうして、不安だらけの新任教師は着任をし、うちらの新学期は始まった。

第２２話　ネギ襲来（後書き）

アンケート中です。

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編とは関係ない予定ですが、このアンケートの結果によっては本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

今の構想では本編後のＩＦかネギが来る前のクリスマスの話しになりそうです。もしくはもっと昔の子どもの頃かな。

ぜひ、アンケートにご参加ください。

これからアンケート結果が出るまでは途中経過は見せないようにしようと思います。

第２３話　評価（前書き）

今回は少し短めです。

第２３話　評価

ネギ・スプリングフィールドが裕奈たちの担任となってから数日が経過したある日。

俺たちは裕奈たちからネギの評価を聞き、これからについてどうするかを話し合っていた。

「やっぱり教育するのが一番ですかねぇ」

ネギが麻帆良に来て数日、ネギはすでに魔法使いとしていくつかのルールを破っていた。

まず、神楽坂明日菜に魔法がバレてしまったことだ。

これについては裕奈から学園長にネギへ警告すべきではないかという意見を提出したが、学園長は聞き入れなかった。

まあ、理由が人命救助であることや神楽坂明日菜が魔法世界のお姫様だから、関係者として扱っているということもありお咎めなしにしたのだろうが……

そして、その原因としてネギが安易に魔法を使いすぎることも挙げられた。

早朝に飛行魔法を使ったり、街中で武装解除を行い服を脱がしたりしていることだ。

特に女子高等部とのドッジボールの試合の終了後に魔法を使ったことを問題としている。

前者はともかくとして、後者は女性から多くの抗議が集められた。女性にとって街中で脱がされることはそれほど問題なのだ。……まあ、普通の人間だったら誰でも嫌だろう。

ドッジボールに関しては魔法を使用しなければならない状況であったのかなどの抗議があったようだ。

そんなこんなでアリサとネギは比較されることとなった。

アリサは麻帆良に来るまで魔力を封印されており、封印が解除されその膨大な魔力が自身に戻ったあと制御には苦しんでいたが魔法を暴発させることはなかった。

しかしネギは、膨大な魔力とはいえ魔法学校に通っている間に魔力制御の訓練をできたにも関わらず、未だに魔法を暴発させている。

このことで魔法関係者からはアリサの評価は上にネギの評価は下に修正された。

中には本当にネギが首席で卒業したのかを疑う声もある。

このことには流石に学園長も拙いと思ったのか、木乃香に断られたためネギと一緒に暮らすことになった瀬流彦先生に自分が魔法関係者であることをネギに話させて、訓練をつけることとなったようだ。

まだ数日しか経過していないので、効果がでているのかはわからないが……

さらに問題となったのが惚れ薬騒動だ。

ネギが明日菜のために作った惚れ薬を自分が飲んでしまったがために起こった事件。

これは魔法関係者の間でかなり問題とされた。

このとき事実としてはネギは明日菜に惚れ薬を飲まされたわけだが、明日菜は惚れ薬を信用していなかったためにお咎めなしとされたが、魔法を知ったばかりとはいえ関係者ではあるので学園長から詳しい説明を受けることとなった。

ネギの方は、違反とされている惚れ薬の作成や使用をしたとして、学園長から注意を受けることになる。

とはいっても、本当に軽い注意だけだったらしいが……

裕奈たちはレジストしたようで無事だったらしいが、原作通りネギは宮崎のどかとフラグを建てたようだ。

一方、魔法について説明を受けた明日菜はネギに対して怒りを露わにした。

知らなかったとはいえ、自分が犯罪者になろうとしていたのだ無理はないだろう。

その場は高畑が仲裁に入って、結局は仲直りしたようだが……

ちなみにこのことはあさぎから聞いた。ちょうどこの場にいたよう

だ。

そして問題となるのが、ネギの処遇をどうするかであった。

「放置するというのも一つの手ではあるぞ」

「しかし、それで超さんの未来のようになってしまっては元も子もありませんよ」

エヴァの意見にクウネルが返す。

今、案としてでているのは二つ、放置か干渉かである。

エヴァやアリサなどは放置しておいて邪魔になるなら潰せばいいと言っている。

対してクウネルや超は今から干渉してネギを教育すれば、自分たちの計画のためにもなるのではないかという意見だ。

他のメンバーはこの状況を静観している。というより意見が出せないというのが正しいだろう。

わずか数日間でここまで問題を起こしたネギをどういう風に扱えばいいのか、まだ迷っているのだ。

数十分間に渡る議論の末、まだ真実を教えるには時間があるということで、しばらくは静観していようという意見にまとまった。

その後、いつも通りの訓練が始まる。

今日は珍しくクウネルとの模擬戦だった。

「ほらほら、早く動かないと潰れちゃいますよ」

クウネルの放つ幾つもの重力球を地面を蹴り躱し続ける。

普通なら空を飛べれば回避も楽になるのだろうが、相手は重力使いだ。空を飛んでも地面に叩きつけられるだけだろう。

「このぉ！！」

クウネルに向けて無詠唱の魔法の射手を放つが相手は空を飛んでいるため、たやすく回避される。

「まだまだ甘いですよ」

クウネルの余裕の表情が癪に触るが、地上からの攻撃では当たらないのは確かだ。

なら、と覚悟を決めて浮遊術を使い宙に飛び上がる。

「はい」

しかし案の定、クウネルは重力魔法で俺を地面に叩きつけようとする。

しかし、俺も伊達にコイツら相手に修行をやってきたわけではない。

「――――――」

口から言葉を紡ぐ。するとクウネルの放った重力魔法の影響を受けずにそのままクウネルに接近することができた。

「はあっ！！」

そのまま、手に持った短剣でクウネルを斬りつける。

「なっ！？」

クウネルは俺が重力魔法の影響を受けなかったことに驚き、反応が遅れたため俺の斬撃はクウネルを直撃した。

クウネルはそのまま地面に叩きつけられる。

これで勝敗は決まったため、俺も地面へと降りる。するとクウネルも立ち上がり、こちらへと近づいてきた。

「私の負けですね。しかし、私の重力魔法を無効化するとは驚きましたよ」

クウネルは先ほどの重力魔法を素通りしたことに驚いているようだ。

「いったいどんなことをしたのです？」

やはり方法が気になるらしい。

「ちょっと頑張ってね。新しい魔法ってわけじゃないけど、修得してみた」

「何をですか？」

「“真言”」

俺の言葉にクウネルは驚いた表情を見せる。当然だろう“真言”というのは言葉をもって現象を起こす、いわば魔法の祖といっても過言ではないのだ。

それを中学生程度が体得したのだ。驚かないわけがない。

「まさか“真言”を扱えるとは……」

「あさぎも扱えるみたいだね。あいつから教わったし、それにまだまだ精度も低いから本当に扱えるだけだよ」

「浅葱君もですがあなたも大概バグですね」

「失礼な」

俺の“真言”はあさぎが教えてくれたものだ。だから、あさぎほど俺は凄くはない。

それにあさぎと俺とではまだまだ質に差がある。

いくら同じスキルを保有していようと、あさぎの方が遥かに上なのだ。

“真言”で同じ言葉を紡いだ場合、威力はあさぎの方が上であるし速さも違ってくるだろう。

「まあ、私に勝てたのですから十分にバグだと言えますよ」

確かにこの若さでクウネルに勝つことができたのだ。一般的に見るとおかしいぐらいには強くなっているのだろう。

実際に殺し合いとなればまだまだかなわないだろうが……

こうして新しい技術の御披露目と今後の課題の相談が終わり、夜は更けていく。

第２３話　評価（後書き）

現在、アンケート中です。

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

今の構想ではネギが来る前のクリスマスの話しかもっと過去の話しになりそうです。

今日を入れて後４日、皆さんぜひアンケートに参加してくださいね。

第２４話　不法侵入は犯罪です（前書き）

投稿予定日の投稿です。

作者はこれから忙しくなると思いますので、これまでのように連日投稿はできなくなります。

今回は原作２巻の期末テストのところです。

ではどうぞ

第２４話　不法侵入は犯罪です

ネギ君が来て数週間が過ぎ、学年末テストが近づいてきている。

私と桜子がネギ君と廊下を歩いているとしずな先生がネギ君に話しかけてきた。

「――――ネギ先生」

「あ、はい！？」

「あの……学園長先生がこれをあなたにって……」

そう言ってしずな先生はネギ君に封筒を手渡した。

ネギ君はその封筒を開き、中から紙を取り出す。

「な…なーんだ、簡単そうじゃないですかーー」

どうやら、正式教員になるための課題を手渡され、その内容はネギ君が思うに簡単なものらしい。

ただ、教師として授業だけならばいいのだが、年齢のことや社会人としての常識、魔法使いとしてのことを加味すると、正直どうかなーとは思う。

「え――――と、みなさん聞いてください！」

ＨＲが始まり、ネギ君がみんなに呼びかける。

「今日のＨＲは大・勉強会にしたいと思います。次の期末テストはもう、すぐそこに迫ってきています」

ネギ君は必死な表情でみんなに伝える。

「あのっそのっ……実はうちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので～～～みなさん頑張って猛勉強していきましょう～～～」

多分、その大変なこととというのは自分が正式な教員になれないということなのだろう。

自分の益のために生徒に強要するのは教師としてどうなのかなぁ～、でも確かにうちのクラスは成績最下位だしなぁ～

とはいうもののクラス順位が最下位なのはバカレンジャーたちのせいだしな～

そもそも麻帆良のテストの平均点はそこそこ高い。

ブービーのクラスですら平均点が七十点ぐらいなのだ。

対してうちらのクラスは学年トップクラスが数名いるとはいえ、半数が六十点台、さよちゃんが肉体を得てちゃんとテストを受けられることで点数が上がったとはいえ、平均点は六十七点だった。

平均点を七十点にするにはあと三点足りないから、期末テストが五教科なら一人当たり十五点いつもより多く取ればいい計算になる、

これくらいなら少しテスト勉強すればいけるだろう。

というより、バカレンジャーさえ勉強すれば最下位ぐらいは簡単に脱出できる。

みんなを見てみると、このかやさよちゃんはいつも通り、真面目に受けようとしてるし、超りんは今更勉強の必要はないだろう。千雨ちゃんはめんどくさそうにしている。

私や千雨ちゃんはみんなと一緒にテスト勉強をやるので、それほど成績は悪いわけではない。

エヴァちゃんや茶々丸さんはただやらないだけなので、その気になってテストを受ければいいだけだろう。

そうこうしているうちに桜子が提案した英単語野球拳がネギ君によって許可され、バカレンジャーが脱がされていた。

ネギ君は野球拳を知らなかったようだが、教師は知らないことがあるのにそのまま許可を出していいものだろうか……

現に千雨ちゃんたちは頭を抱えたり呆れたりしている。

結局これも生徒側の視点として学園長へ報告しなければならないのに……

私は新たに増えた報告内容に頭を抱えつつＨＲを過ごした。

◇

みんながお風呂に入ってるときのことや、バカレンジャーのみんながそろっとるところに図書館探検部のみんながやってきた。

「アスナーー大変だよーー」

ハルナがアスナにむけ呼びかける。

「何？パル」

「実はさ、ウワサなんだけど……次の期末で最下位取ったクラスは解散だってさ」

「えーーっ！最下位のクラスは解散～～～！？」

パルの言葉にアスナたちが驚いている。普通に考えればそんなことあり得るわけないのに。

「で、でもそんな無茶なコト……」

「ウチの学校はクラス替えなしのハズだよ――」

まき絵たちがあまりに無茶苦茶なことに疑っとる。

「桜子たちが口止めされてるらしいから詳しいことはわからないんだけど、学園長が怒ってるらしいよ」

パルの言葉にアスナたちの顔はこわばっとる。

「そのうえ、特に悪かった人は留年！！どころか小学生からやり直しとか……」

「え！？」

最後の小学生からの発言でアスナとまき絵たちが焦った表情を見せている。

バカレンジャーのみんなが焦っているなか、一人黙っていた夕映が口を開いた。

「――ここはやはり……アレを探すしかないかもです……」

その言葉にアスナたちが食いついた。

「何かいい方法があるの！？」

「図書館島は知ってますよね？」

「一応ね、あの湖に浮いてるでっかい建物でしょ？」

「実はその図書館島の深部に読めば頭が良くなるという魔法の本があるらしいのです」

夕映の言葉をみんなは信じていないようだが、一人だけ態度が違う。

……アスナや。

アスナは魔法のことを知っとるから魔法の本があってもおかしくないとか思っとるやろうなー

「――行こう！！図書館島へ！！」

アスナの宣言によりバカレンジャーは図書館島に向かうことになる。

……すずくんらに連絡いれとかんとなー

対応はすずくんらに任せたらええわー

◇

木乃香から連絡があり、侵入しようとする生徒たちのために待っている。

図書館島の閉館時間は２１時であるが、俺たちのように司書の場合は仕事があるので、それ以降も残っていることは珍しくない。

俺やアリサは特別であるが、普通であれば閉館時間を過ぎて入館した場合、厳しい罰を与えることとなっている。

当然、今回のようにテストのためなどと理由は却下だ。

「わ――っ！？本がいっぱいホントにスゴイぞ！！」

どうやらネギたちが来たようだ。

ネギは本棚に近づきはしゃいでいる。

俺はコイツらをさっさと帰らせるために声をかけることにする。

「オイっ」

「えっ、誰！？」

そこにいる全員がこちらの方へ振り向く。

「閉館時間はとっくに過ぎている。入館したということでお前たちのことを警備員に突き出す必要があるんだが」

「マズいです。みなさん、逃げましょう」

夕映の一言でみんなが逃げようとするが、その前に手に持ったロープで何人かを捕縛する。

しかし、この二人には通じないようだ。

「アイヤー、やるアルね」

「あいあい」

逃がしてしまっては問題なので、奥の手を出すことにする。

俺はつま先でコンコンと地面を叩くと上から人が降ってくる。

「「なっ！？」」

二人はいきなりのことで反応できずに上から降ってきた人物に無力

化される。

上から降ってきたのはアリサだ。アリサも見習いとはいえ司書なので今回手伝ってもらった。

「ご苦労様、アリサ」

「私は早く帰りかったんですけどね」

アリサの登場に侵入した奴らは驚いている。

「何でアリサちゃんが！？」

「私としてはあなたたちが何でここにいるのかが疑問なのですけど……」

「わ、私たちは……」

アリサの言葉に後ろめたさもあるのか夕映は言葉を濁し、みんなが俯いている。

「木乃香から聞いている。魔法の本を探すとか言ってたらしいな。そんな暇があったら勉強しろ」

「だいたい、こんなことをすれば問題になるってわかりそうなものなのに」

アリサの言葉に夕映の顔は青くなる。以前、コイツの先輩が閉館時間を過ぎてから入館したとき部活停止処分をくらったことを思い出しているのだろう。

「それにネギ先生でしたか、あなたも教師ならこんな時間に外にでている生徒を叱るべきではないのですか？
それに教師のクセに規則を破るとは、そんなことでは教師失格ですよ」

俺はネギに言っておく。教師としての自覚が足りないと、もし教師として続けていくなら、こういうミスがあるときに困るのは生徒なのだ。だから厳しめとはいえ言っておかないといけないだろう。

「このことは学園長以下、学年主任である新田先生にも報告しておきます。今日はもう帰って下さい」

俺の言葉にとぼとぼとコイツらは帰っていった。

後日、これに参加したメンバーは新田先生にこってりと絞られたようだ。

ネギは教師としての責務をみっちり教え込まれたらしい。

そして期末テストの結果だが、バカレンジャーが放課後残って勉強をしたため、そこそこ成績があがり、トップにこそなれなかったが上位には入れたようだ。

これにより、ネギの正式採用は決まった。

ちなみにアリサの課題は司書としての仕事を果たすことだったようで、今回の一件で正式に司書へと昇格することになった。

ちなみに学園長ではあるが、今回の件でネギを庇ったりすることは

許されなかった。

というのも、修行内容が教師なので、きちんとその責務は果たすべきとの意見が多数寄せられたためだ。

こうして俺たちの中学二年生が終わり、春休みを迎える。

第２４話　不法侵入は犯罪です（後書き）

まだまだアンケート中です。

現在、クリスマスに投稿する番外編のヒロインを募集しています。

締め切りは１２月１３日までで好きなヒロイン、もしくはこのカップリングで見たいというキャラクターを一人、この作品の感想を添えてお書き下さい。

一人一票とさせていただきます。

番外編は本編との関わりができるように仕上げたいと思います。

今の構想ではネギが来る前のクリスマスの話しかもっと過去の話しになりそうです。

さて締め切りまであと少し、まだアンケートに参加してない人はぜひ参加してくださいね。

第２５話　春休み生活（前書き）

本日アンケート最終日です。

まだアンケートに参加していない人はぜひ参加してください。

番外編で見たいヒロインと感想を書き込んでくれるだけで構いません。

一人一票です。

よろしくお願いします。

第２５話　春休み生活

期末テストが終わり春休みに入った。

わずか二週間程度の休みではあるが、それでも学生たちには嬉しいものだろう。

俺たちもこの春休みを満喫している。

今、俺は一部のメンバーを連れて魔法世界に来ていた。

メンバーの内訳は裕奈、さよ、千雨である。

なぜ、このメンバーと魔法世界にいるのかというと俺たちの計画への協力を帝国とアリアドネーに頼みに行くためだ。

メンバーの編成理由であるが、木乃香はまだ魔法について知らないことになっているので、魔法世界に連れてくるのはマズい。刹那は護衛なので当然残ることになる。

アリサはまだまだ実力が足りないので、エヴァに修行をつけてもらっている。

あさぎはアリサの指導員という立場があるので、今回俺たちに同行することはできなかった。

こちらにくる際、木乃香とアリサがズルいなどとゴネていたが、あとで埋め合わせをすると約束することで納得してもらった。

そして現在、俺たちは帝国で第三皇女と面会している。

「なるほどのう」

ヘラス帝国の第三皇女テオドラは俺たちが話した内容に思案の表情を浮かべる。

幸い付き人には席を外してもらっているし、結界も張っているためここでのことは外に漏れることはないだろう。

「あの筋肉ダルマから聞かされてたとはいえ、実際、こうやってもう一度聞かされるとショックは大きいな」

テオドラ姫は落ち込んでいるようだった。

自分たちが正しいと思い戦ったはずの戦争が全部無意味だと言われたようなものなのだ、仕方ないだろう。

それに魔法世界の真実のこともある。

自分たちが幻想などと言われても彼女たちには実感など湧かないだろうし、否定もするだろう。

だからこそ、こうやって事実を受け止めようとしている彼女は強いとも思える。

まあ、俺たちの言葉だけではなく、事前にラカンが話していたことやあさぎやクウネルから手紙を預かっていたことで、彼女が信じようとしたのが大きいだろう。

かつての仲間から言われれば、それは確かに信用に値するだろう。

「このことは私から父上たちに報告しておくのじゃ、いくらかぼかして説明しないとだめだが魔法世界の救済とあるからには国家をもって、対応しなければならん」

テオドラ姫は俺たちを見つめ、威厳を持って宣言する。

多少のぼかしというのは、おそらく大戦の真実のことだろう。

紅き翼は今も英雄として、魔法世界の間でも有名な存在だ。憧れているものも多数存在するだろう。

それがひっくり返されたときの混乱は計り知れない。

超の未来では計画の途中でバレたようだがその原因がわからない以上、対策をすることもできない。

理想としては、何事もないまま計画を完了することではあるが、完全なる世界の説得が終えておらず、俺たちイレギュラーを狙っている奴の正体がわからない今、こうやって味方を増やしていくしか方法はないだろう。

「お願いします」

俺たちはテオドラ姫に頭をさげ、その場から立ち去ろうとする。

「そうそう、数ヶ月後には拳闘大会が開かれるのじゃ。お主たちもできることなら出場するといい」

「考えておきます」

テオドラ姫の言葉をあっさりと返して、その場をあとにする。もちろん退室前に一礼することも忘れない。

城からでるとみんなで一斉に息を吐く。

「疲れたねえ～」

「身分の高い人の前だからな、緊張するのは仕方ねーよ」

「はう～、でも流石お姫様ですね。あの威厳を持った佇まいはすごかったです」

裕奈たちがそれぞれに口を開く。

「次はアリアドネーだよ。あと一回あるんだから頑張ろう」

俺はみんなに声をかける。魔法世界に滞在できる期間はそれほど長くないので、なるべく急いで用事は済ませないといけない。

「そうだね～、ならまずはご飯にしようか」

「賛成です」

「そうだな、お腹も減ったし」

裕奈の一言にさよと千雨も賛成し、みんなで食事をすることになった。

◇

食事が終わり、アリアドネーへと向かう。

空を飛んでいったとしてもかなりの時間がかかるため、俺たちはあさぎから貰った転移魔法カードを使いアリアドネーに行った。

アリアドネーに到着すると、そのままあっさりと総長室に案内された。

どうやら、あさぎがすでにアポをとっていたらしい。

なら帝国のときもやっとけよ！！と思ったが帝国にはラカンがいたため、必要ないと思っていたのだろう。

現にラカンはテオドラ姫に会うための手続きまではいてくれたし……

ヘラス総長は快く俺たちを出迎えてくれた。

今は話し合いを終えて雑談をしている。

彼女は大戦の真実や俺たちの計画の内容などをかなり詳しく知っていた。どうやらあさぎから情報をもらっていたらしい。

俺たちの雑談の話題はもっぱらそのあさぎに関する内容ばかりだった。

「あの子はね、歴代のアリアドネーで学んだものの中では間違いな

く、トップクラスの能力の持ち主なのよ」

「やっぱり浅葱さんってスゴいんですね～」

セラスの言葉にみんなが感心した表情を浮かべる。

「あの子の使っている魔法カードは知っているわね？」

「はい、俺たちも使っていますし」

「今まで、ああいった魔法を使える道具っていうのは高価だったのよ。それをあの子が改良して、より安く作れるようにしたのよ。おかげで道具科の教科書に指導項目が新しく追加されたわ」

あさぎのカードが教科書に書き加えるほどのものだったのに驚きを隠せない。

そういえば、まほネットを見たときに原作では一枚八十万円もしたはずの転移魔法符が五十万円に下がっていたことを思い出す。

「そうそう、君達がここにいる間、君達にいくつかの依頼をこなして欲しいのよ」

セラスが思い出したように俺たちに対してお願いをしてくる。

「わかりました。まあ、あさぎたちからもこちらで経験を積んでこいと言われてますので、むしろ、こっちこそお願いします」

そしてセラス総長から幾つかの依頼を受けることになった。

依頼の内容は魔物の討伐だったり、薬草の採取などだがどれも割と難易度の高いものだった。

「あと魔法のことでわからないことがあったら私のところに来なさい。これでも学術都市のトップだからいろいろなことを教えられると思うわ」

「ありがとうございます」

こうして話し合いも終わり、今日はセラス総長が案内してくれた部屋で休むこととなった。

翌日、俺たちはセラス総長の依頼をこなすために魔獣の森へと向かう。

道具科の生徒が使う素材の採取と魔獣の討伐という複数の依頼内容であったため、手分けして作業にあたる。

俺の作業内容は採取だ。というのも今回は裕奈たちの実戦経験が主たる目的のため、俺は討伐に関わらないことにしたのだ。

「これでだいぶ集まったな」

採取物は木の実や葉っぱなど植物がほとんどなので、丁寧に籠の中に入れる。

潰れたり傷ついたりした場合は素材としての質の低下に繋がるので、雑に扱ったりはできない。

依頼された分の量は集めたため、裕奈たちをおいて先に帰ることにした。

この森の魔獣のレベルであれば苦戦することはないだろうという信頼もある。

俺は空に飛び上がると、アリアドネーの学校を目指して進んでいった。

◇

涼くんと別れたあと、私たちは依頼書に書かれていた魔獣を探す。

依頼書に書かれたあった魔獣は三種類、狼のような魔獣と鷹竜と呼ばれる魔獣、そして竜であった。

「どうしよっか？」

私は千雨ちゃんとさよちゃんに聞いてみる。

正直、魔獣を見つけ出すだけならそれほど難しくはないだろう。探査魔法を使えばいいだけなのだ。

しかし、もしかしたら三匹纏めて相手にしなければならなくなるかもしれない。

その場合のことも考え行動する必要があった。

「まあ、罠にはめて一匹ずつ仕留めるのが一番いいんじゃないのか」

「そうですね、流石に三匹同時に相手をすることはないでしょうけど、もしそうなれば転移魔法で逃げればいいと思いますし」

「じゃあそれでいこっか！」

千雨ちゃんたちの意見に賛成して魔獣の討伐に挑む。

「千雨ちゃん、探査魔法お願いしてもいい？」

「わかったよ」

千雨ちゃんに探査魔法をお願いすると、千雨ちゃんはポケットからパクティオーカードを出す。

「アデアット」

千雨ちゃんがアーティファクトを呼び出す。手には昔のアニメに出てきそうな可愛いステッキが握られていた。

千雨ちゃんはそのステッキを頭の上で回転させると光が包み込み、千雨ちゃんの服が変わる。

今の服は白い衣装で、ロングスカートと胸についてる大きなリボンが特徴的な可愛らしい衣装だ。そして手には金色の機械的な杖を持っている。

千雨ちゃんのアーティファクト“なりきりステッキ”、その効果は使用者を他人になりきらせるというコピー効果を持っている。

例えば、アーティファクトを使い千雨ちゃんが私になりきったとする。すると千雨ちゃんは私が覚えている魔法や射撃技術なんかをまねして使うことができる。

そして、それはアニメやゲームのキャラクターでも同様だ。

今、千雨ちゃんがなりきっているのは劇場版化された魔法少女ものの主人公だった。

「リリカルマジカル」

千雨ちゃんが、呟くと桃色の球体が何十個か現れ周囲に散らばっていく。

「見つけた」

数十秒ぐらいたっただろうか、千雨ちゃんはそう口にすると私たちに獲物の居場所を教えてくれる。

示された先に二人を連れて飛んでいく。

するとそこには狼の魔獣がいた。

「ここは私に任せてもらえますか？」

「あ、うん」

珍しくさよちゃんが自己主張するので任せてみる。

「じゃあ、まずは“石の槍”」

さよちゃんはカードを使い地面から石の槍を突き出し狼の足に傷を負わせる。あのような獣タイプの魔物はスピードが厄介なので、先に機動力を潰しにいったのだろう。

しかし狼は予想を外れ、そのまま倒れてしまった。どうやら、さっきの魔法でそのまま立てなくなってしまったらしい。

無抵抗な相手を殺すのは気が重かったが、依頼であるのできっちりとトドメをさそうとした。

そのときだった私たちの横から急に魔獣が現れ、さよちゃんの魔法で動けなくなった狼を喰い殺した。

いきなりのことで私たちは反応できなかったが、現れた魔獣はどうやら依頼に書かれていた鷹竜で今は目の前の狼を食べるのに夢中になっているようだ。

私は二人に目で合図を送り、すぐに臨戦態勢に入る。

そして私たちと鷹竜の闘いは始まった。

第２５話　春休み生活（後書き）

アンケートの結果次第では本編のシナリオにも関わってくるのですが、本編より番外編を書く方が難しいと思う作者です。

アンケート結果発表（前書き）

アンケート結果です。

アンケート結果発表

アンケート結果発表～～

アンケートに参加してくれた皆さん、本当にありがとうございます。

皆さんのアンケートによりクリスマスの番外編に登場するヒロインが決まりました。

というわけでアンケートの結果です。

第9位

楓　　1票
このか　1票

この二人は原作のネギパーティーに入っていたので原作での登場回数は多かったはずですが、思ったより票数は伸びなかったですね。

……特にこのかは本編でもヒロインなのですが。

続いて同率で第7位

アリサ　2票
千雨　2票

千雨はみんな大好きなキャラクターですが、あまり票が入らなかったですね。

そしてまさかのアリサへの2票。

これに関しては作者も驚きました。

彼女は本編でどう動くんでしょうね？

第6位

エヴァ　3票

まさかのエヴァが3票です。最初は票が入ったのですが本当に最初だけでしたね。

第４位、ここも同率でした。

アキラ　４票
のどか　４票

二人とも中盤くらいから投票されましたね。

アキラに至っては全くでていないにも関わらず票が入っています。

これは本編で彼女の出番をつくる必要がありそうですね。

そしてのどかです。

皆さんのご意見だと、彼女がネギパーティーに入ることは反対というより、入らないだろみたいな感じでしたね。

彼女の今後も楽しみにしてください。

ではついにトップ３の発表です。

第３位

マナ　5票

ここで本編にまだ出ていない彼女の登場です。

それでもこうやって票が入るのは彼女の元々の人気が凄いんでしょうね。

第2位

夕映　6票

彼女は本編にて主人公と仲が良いという設定を載せていますから、おそらくはその期待なども入ったのだと推測しています。

まあ彼女は序盤はともかく修学旅行編以降から積極的に登場することになりそうですね。

あとは彼女がどちらにつくかで本編にかなり影響してくるでしょう。

そしていよいよ第1位の発表です。

第1位

神楽坂明日菜　15票

まさかの本編登場がまともにない彼女が第1位です。

まあ原作がいいところでしたし、彼女がトップでもおかしくない……のかな。

彼女は一時は夕映とトップを競り合っていましたが、一気に2位以下を突き放して最後までトップを独走していました。

やっぱり原作メインキャラクターの人気は凄かった。

というわけでクリスマス番外編のヒロインは明日菜になります。

そしてここまで票数が伸びた明日菜には本編のヒロインに昇格となります。

明日菜がどんなふうに主人公とイチャイチャするのかクリスマスを

楽しみにしてください。

まあ、投稿はイヴなんですけどね……

では、これからもこの作品をお楽しみください。

第２６話　竜種との殺し合い（前書き）

ちゃんと投稿予定日なので投稿しますよ……？

というわけでゆーなたちの戦闘です。

第２６話　竜種との殺し合い

私たちは目の前の鷹竜を刺激しないように少しずつ後ろにさがる。

今の状態では接近されるのが一番マズいのだ。

こちらに近接戦闘ができる人がいないのも理由の一つである。

千雨ちゃんのアーティファクトの効果を使えば、接近戦もできるのだろうが千雨ちゃんのアーティファクトには欠点がある。

それはあくまで自分の能力でできる範囲しか、コピー能力は効果を発揮できないのだ。

例えば、私になりきって射撃技術をコピーしたとする。

しかし、魔力量まではコピーできない。

他にも身体能力も自分のできる限りでしかコピーすることができないのだ。

つまり、この状況で千雨ちゃんが接近戦をしようとしても、身体能力が一般人並みの千雨ちゃんであれば先に体力が尽きるだろうし、直撃を受ければ致命傷になりかねない。

いくらエヴァちゃんたちから厳しい訓練を受けているとはいえ、千雨ちゃんは魔法を知ったのは中学生になってからなのだ。

鷹竜との距離はまだ十分とは言えないが、それなりにとれる。

私は二人に防御を頼み詠唱を開始した。

「契約により我に従え高殿の王、来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重と重なりて走れよ稲妻!!“千の雷”!!!!!」

鷹竜はこちらが詠唱しているのに気づいたようだが、こちらが魔法を発動するほうが早い。

“千の雷”は鷹竜の張っていた障壁を軽く破り直撃した。

その魔法の威力は鷹竜をやすやすと消滅させ、周囲に爆音が鳴り響いた。

着弾点には巨大なクレーターができた。

私は目の前の光景に恐怖感を抱く。

自分で放った魔法の威力と初めて生物を殺したことにだ。

私は学園で夜の警備をしていたときも人を傷つけたりすることはあっても殺したことはない。

召喚された悪魔や鬼なども同様だ。彼らは倒してしまえば魔界にかえってしまうため、殺すということはなかった。

だから私は今、自分の力で生物を殺したということに動揺していた。

厳密にいえば、蚊などの虫などを殺したことはいくらでもある。

しかし、虫と犬などの生物を同列に扱うことはできないだろう。これはその差であった。

足が震えまともに立つことすらできない。そのまま私は地面へと座り込み、自分で自分を抱きしめる。

「おいっ！明石っ！！」

「裕奈さん！大丈夫ですか！？」

千雨ちゃんとさよちゃんの心配そうな声が聞こえる。

「ゴメン、大丈夫だから」

二人に心配をかけないように笑顔を見せ立ち上がろうとするが上手く立ち上げることができない。

「無理すんな、顔が真っ青だぞ」

「裕奈さん……」

千雨ちゃんとさよちゃんは私の傍に寄り、手を握ってくれる。

いくらか時間が経ち、少し持ち直しようやく立てるぐらいにはなる。

今日はもう戻ることにして、アリアドネーに戻ろうと浮遊術を使おうとしたそのとき、周囲の鳥たちが一気に羽ばたいた。

さっきまでのことを頭から消し、意識を引き締めなおす。

エヴァちゃんとの訓練のおかげで平常時とそうじゃない時のスイッチを切り替えることは身についている。

……ホント、エヴァちゃんには感謝だね

鳥たちが羽ばたくのと同時に風が吹き抜け、私たちのいるところが影になる。

光を遮った存在を見るために上空を見上げると、そこにはある意味予想通りの存在がいた。

「ドラゴン……」

そう呟いたのは誰だっただろう。

そんなことはどうでもよかった。今はただどうやって目の前の存在に対抗するかを考えなければならない。

そこにいたのは先ほどの鷹竜のような下位の竜種ではなく、間違いなくちゃんとした竜であった。

私たちは一応ではあるが図書館島でクウネルさんのペットである竜との戦闘経験はある。

図書館島にいる竜と比べれば、目の前にいる竜は幾分か小さい。

だからといって安心できるわけでもない。これは実戦なのだ、一つ間違えれば大惨事を引き起こすこととなる。

私はポケットからパクティオーカードを取り出し、アーティファクトを呼び出した。

隣を見てみると、さよちゃんも千雨ちゃんも私と同じようにアーティファクトを呼び出している。

千雨ちゃんはさっきと同じようにすでに変身している。

そして私の周りには羽根の生えたクリスタルのようなものが何個か飛んでいた。

これが私のアーティファクト“天使の援護者”である。

このアーティファクトの効果は私が意識することでクリスタルを自由自在に操り、敵に攻撃を仕掛けることができるのだ。

ぶっちゃけていうとファン○ルみたいなものだ。

そしてさよちゃんは羽衣を肩にかけている。

さよちゃんのアーティファクトは“精霊の羽衣”といって、使用者を守ってくれる防御系のアイテムだ。その他にも中位クラスの魔法であれば無詠唱で発動することができる補助効果などがある。

まずはさよちゃんが動いた。

「炎精召喚“槍の火蜥蜴３７柱”」

さよちゃんが竜に向かって魔法を放つ。

私たちはその瞬間に散らばって、竜のブレスで全滅をしないように各自距離をとった。

さよちゃんの魔法は竜に当たったが、竜の張っている障壁を破るには至らない。

「アクセルシューター！！」

千雨ちゃんが誘導弾を放ち竜を牽制する。

しかし、竜は誘導弾をものともせずさよちゃんに向かって突進する。

私はその間に詠唱を始めた。

「契約により我に従え高殿の王」

本日二回目の大魔法のためか思ったよりも魔力が持っていかれている。

竜はさよちゃんに突進するが、さよちゃんの羽衣がそれを防ぐ。

「来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆」

「ディバインバスター！」

千雨ちゃんの砲撃が竜を直撃し竜がよろめく。しかし、決定的なダメージを与えるには至らない。

「“氷槍弾雨”」

その隙にさよちゃんが、私の詠唱の時間を稼ぐために魔法でたたみかける。

千雨ちゃんとさよちゃんの魔法が雨のように竜に降り注ぎ、竜はそちらを防ぐのに精一杯だ。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻！“千の雷”！！！」

私の詠唱が完了し、竜に向けて魔法を放った。

しかし、私の脳裏に先ほどの鷹竜のことがよぎる。

その瞬間集中が途切れ“千の雷”の威力が弱まった。

“千の雷”は竜を直撃し傷つけるも倒すことはできない。

傷を負った竜は自分に傷を負わせた相手、つまり私目掛けてブレスを吐いてくる。

ドラゴンのブレスは“燃える天空”と同程度の威力があった。

私はそれに反応できずにブレスが直撃する。

「きゃあああああ！！！！」

「明石っ！！！」

「裕奈さんっ！！！」

幸いにも障壁を張り魔力で身体を強化していたためダメージは幾分が軽減されているが、それでもかなり痛い。

竜は続いて尻尾で私に気をとられた二人を薙ぎ払う。

「きゃあ！！」

「うあっ！！」

二人は竜の振り回した尻尾をまともにくらう。

竜はそのまま飛び上がると大きく口を開く。

「あぶないっ！！！」

とっさに全力で魔法障壁を展開するのと同時に竜は先ほどより、威力の高いブレスを吐いてきた。

全力で展開した障壁でもブレスを完全に防ぐことはできない。その余波だけでも私たちを傷を負わせるには十分だ。

もうダメかもしれない。そんな考えが頭をよぎる。

しかし、目の前の竜はまだ私たちに対して追撃をしてこない。

竜の方に目を向けると、明らかに動きが鈍っているのがわかる。

私の放った“千の雷”の影響だ。いくら威力が落ちたとはいえ、元々が“雷の暴風”の十倍の威力があるのだ。

与えたダメージは相当なうえ、相手はさらに全力のブレスを放ったのだ。かなり消耗している筈だろう。

私は気力を振り絞り、残った魔力をかき集める。

さよちゃんや千雨ちゃんも同様に魔法を発動しようといていた。

「契約により我に従え高殿の王、来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重と重なりて走れよ稲妻」

「来れ氷精、闇の精、闇を従え吹雪け常夜の氷雪」

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

私たちの詠唱が始まり、術式が宙に展開される。

竜もそれに気づきこちらに攻撃を加えようとするが、動きが重く、こちらに近づこうにもまともに動けていない。

私たちは全力で魔法を放つ。今度はためらいなく全力だった。

「“千の雷”！！」

「“闇の吹雪”！！」

「“スターライト・ブレイカー”！！」

私たちの放った魔法は竜を直撃し跡形もなく消し飛ばした。

私はそれを見届けると地面に倒れ込み、意識を失った。

目が覚めると私たちが宿泊していた部屋のベッドにいた。
さよちゃんも千雨ちゃんも隣のベッドで寝ている。
身体はすでに治療され傷ひとつない。しかし、大魔法を何度も使用したので、魔力が枯渇し身体にダルさを感じる。
「起きたのか」
不意にドアが開き、涼くんが入ってきた。
「うん」
「いきなり魔力が引き出されたから、急いで向かってみればみんな傷だらけで気絶してるし、驚いたよ」
どうやら、あのあと涼くんが来てくれて私たちを運んでくれたらしい。治療も涼くんがやってくれたようだ。
「ありがとう、心配かけてゴメンね」
「あんまり無茶はすんなよ」
そういって涼くんは私を抱きしめる。
密着して聞こえてくる涼くんの心臓の音とその温かさに安心して私はもう一度眠りについた。

◇

腕の中で裕奈が眠ったのを確認して、布団に寝かせる。

気持ちよく寝ている裕奈の頬に唇を軽く触れさせ、さよと千雨のベッドへ向かう。

二人も疲れているのかぐっすりと眠っていた。

二人の髪を軽く撫でて、裕奈と同じように頬にキスをする。

「本当に無事でよかった」

みんなに魔法をかけて記憶を覗いてみると、本当に激戦だったようだ。

普段のみんななら大丈夫だと思っていたが、裕奈を除いて初めての実戦だったのでいつもより動きが鈍かった。

裕奈も初めて動物を殺したことで動揺し、動きが悪くなっていた。

でも、こうして無事に戻ってこれたのは本当によかったと思う。

最終的に竜まで倒せたのだ、これは十分な成果だろう。

ただ、本当に大変だったようなのでちゃんとフォローはしておこうと思った。

このあと魔法世界にいる間中、ずっと三人に甘えられ続けたのは予想外であった。

第２６話　竜種との殺し合い（後書き）

アンケートに参加してくださった皆さんありがとうございます。

これからも作者は頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

第２７話　春はお見合いの季節！？（前書き）

なぜ、こうなったんだろう。

この話しを書いたときの状況が思い出せない作者です。

ではどうぞ

第27話　春はお見合いの季節！？

魔法世界での交渉とアリアドネーでの依頼が完了し、俺たちは麻帆良に戻っていた。

裕奈たちが起きたあとはずっと三人に構っていたので、麻帆良に戻ってきてからはこっちに残っていたメンバーと残りの休暇を過ごすことになった。

そして、俺は何故かスーツを着て麻帆良にある料亭にいた。

案内された部屋から外を見てみると、そこには雅な内庭があり、ひらひらと桜が舞っている。

その風景は幻想的で思わず見入ってしまう。

思えば、この世界にきてからというものこうやって安らぐ機会がなかった。

基本的には訓練や司書の仕事、たまにある休みは誰かと遊びに行くか、自分の趣味や睡眠のために時間を使っていた。

だから、こうやって風情を楽しむ時間というのは新鮮に感じる。

桜の花びらが舞うのを楽しんでいると不意に視界が誰かに塞がれる。

「だ～れだ？」

「木乃香、だろ」

目を塞いでいる手を握りゆっくりと降ろしながら、後ろを振り向くとそこには桃色の着物を着て、髪を結い上げた木乃香がいた。

「うんっ、正解や」

木乃香は満面の笑みを浮かべつつ、俺の傍に座る。

そう、俺がここに呼ばれた理由は木乃香とのお見合いのためだった。

木乃香が中学生になってからというもの、学園長が何かにつけて木乃香とのお見合いを画策していたが、全て詠春さんたちが注意を行い止めていた。

親権のある詠春さんたちが注意したことで、学園長も自重はするようになったがそれでも隠れて木乃香にお見合いをさせようとしていた。

それに気づいた木乃美さんが学園長に俺と木乃香のお見合いを進め、そのかわり二度と木乃香にお見合いをさせないことを約束させたのだ。

代金は全て学園長が負担するということなので、ここはじっくりと楽しませてもらうことにする。

お見合いと言ってもここにいるのは俺と木乃香だけだ。

どうやら当人同士で楽しんでくれとのことらしい。

「せっかくだし、食事にしようか？」

「そうやね、この景色を楽しみながら食事するのもええよね」

木乃香が同意してくれたので、料理を運んでもらうようにお願いする。

料理はそれほど時間がかからずに運んでこられた。

並べられた料理はどれも春に採れる新鮮な野菜や魚などで調理されており、色彩も豊かで流石は料亭と思わせるようなものばかりだ。

「へぇ～、スゴいね」

「そうやね～、普通うちらぐらいやったらファミレスがせいぜいやもんな～」

木乃香の実家に行ったときに出された料理も凄かったが、こちらも負けず劣らず高級感が漂っている。

何時もファミレスやファーストフードで食べている俺たちからすれば、こんな機会などほとんどない。

外に見える景色を楽しみながら料理に舌鼓を打ち食事を終えた。

「美味しかったな～」

「うん、かなり満足できたよ」

食事を終えた俺たちは料亭をでてゆっくりと学園内を歩く。

木乃香の着物が目立つため周囲からの視線が少し気になるが、二人で楽しく談笑しながらいろいろと歩き回る。

買い物を楽しんだり、都市の中で真新しいものを見てみたりとしているうちにすぐに時間は過ぎていった。

「なあすずくん」

「どうしたの木乃香？」

木乃香が呼んできたので、そちらを向くと木乃香が唇を重ねてきた。

「これからもよろしくお願いします」

そう言って笑顔で頭を下げる木乃香に俺は

「こちらこそ」

て笑顔で返してやる。

こうして木乃香とのお見合いは終了した。

◇

次の日、俺は超と一緒にいた。

現在は麻帆良の外に出て、ウィンドウショッピングを楽しんでいる。

「う〜ん、久しぶりに麻帆良の外に出たガ、やっぱり人が多いネ」

街の中を歩くが人が多いため思うように前に進めない。

「まあ春休みで学生も多いだろうし、仕方ないよ」

「こういうのを楽しむのも悪くないヨ」

「人が多いのもまた一興ってことか……」

超と離れないように手を繋ぎながら街を歩く。

途中、ゲームセンターに立ち寄り音楽ゲームを楽しんだり、ＵＦＯキャッチャーで散財したりと楽しんだ。

「はあ〜、かなり楽しんだネ」

ゲームセンターから出て食事をするためにファミレスに入る。

「息抜きにはなったか？」

「ああ、良い気分転換になたヨ」

今日、超とデートしているのは先日の埋め合わせと、研究室で引きこもっていたコイツを外へ連れ出すことが目的だ。

研究室の中で女の子が唸っている姿を見るのは、少々忍びなかった。

超と仮契約をして以降、基本的にデートは麻帆良でしかしていなか

ったので、こうやって外に出るのは比較的珍しい。
超が窓から外を眺めている。その表情は少し複雑そうだ。
「やっぱり未来と違うか？」
その表情が気になって、超に聞いてしまう。
「そうネ、荒れた時代だたからこうやって人々が街を出歩いたり、こんな風に料理を食べるのも難しかったヨ」
超の表情は憂いを帯びていて、儚げだった。
俺はその姿に凄く惹きつけられる。
超は未来に帰らないと言ってはいたが、本当の気持ちはどうなのだろうか。
「なあ超、お前は未来に」
帰りたいか？と聞く前に超は首を左右に振って、俺の言葉を制した。
「私がここに残るのは私の意思ネ。それに私はアナタのことが好きだヨ。だから、私はアナタと永遠に添い遂げたい……」
それは超からの告白であった。
その真剣な表情を見ると俺はキチンと応えなければならないだろう。
仮契約をしてからも超はずっとこういう風に俺に愛情を伝えること

はなかった。

だから、こうやって想いを伝えてくれるのは本当に嬉しい。

「俺は複数の女の子と付き合ってるよ」

「うん」

「これからも増えるかもしれない」

「うん」

「こんな不誠実な奴で本当にいいのか？」

俺の言葉に超は満面の笑みで返してくれる。

「私もみんなもそんなアナタが大好きネ」

その言葉に嬉しさがこみ上げてくる。

「俺も大好きだよ」

こうして超とのデートは終わった。

◇

今日は刹那に埋め合わせするために、刹那の修行に付き合っていた。

両手に持った短剣で刹那と斬り合う。

当然、両手に短剣を持っている俺の方が手数が多くなるので、刹那は俺の攻撃を防ぎ続け、一瞬の隙を狙いカウンターを放ってくる。

しかし俺は技の出始めを抑え攻撃を出させないようにする。

刹那は一方的に攻められているのに、ストレスが溜まっているのかだんだんとカウンターの威力が上がっていくが、その分技が雑になっていく。

そして、それは防御にも現れる。俺の攻撃に少しずつ刹那は捌ききれなくなる。

「ほらっ、防げっ」

勝負を決めるために今までより強く斬りかかる。

それを刹那にもわからせるために言葉で合図を送る。

俺の言葉に反応できた刹那は自分の前に刀を構え、防御の姿勢をとる。

しかし衝撃を抑えきれずに後ろに飛ばされ地面を転がる。

刹那に近寄り手を差し出す。刹那は差し出された手を握り立ち上がる。

「俺の勝ちだな」

「はい、私の負けです」

刹那は自分の敗北を認める。

「ただ、後半になっていくほど集中力が落ちてる。いくら攻め続けられたとはいえ、雑になってしまえばそれだけ敗北に近づくぞ」

俺は刹那に先ほどの反省点を伝える。

刹那と戦闘訓練をすることは少なくない。というより接近戦ができるのがチャチャゼロと刹那しかいないため、近接戦闘の訓練の相手はどちらかになる。

しかし、刹那もここに来た当初より遥かに強くなっている。

攻撃に反応できなかった頃から、打ち合えるほどになったのだかなり成長したと言えよう。

しかし、刹那は満足していないようだった。

それもそのはず、刹那は俺に負け続けているのだ。それも今までまともに一撃を与えることもできていない。

「やはり、私はまだまだですね」

訓練が終わったあと、刹那はいつもこうして落ち込んでいる。

「でも、強くはなってるよ。一般的な魔法使いであればものともしないぐらいにはね」

そう言って刹那を慰める。

刹那は何かとネガティブに考えることがあるので、こうしたフォローをすることは珍しくない。

いつもであれば木乃香がフォローするのだが、今は木乃香がいない。

今日は刹那との埋め合わせで修行するということで、木乃香は来ていない。

それに木乃香は刹那も俺の恋人に加えようとしているようで、そんな意図もあったのだろう。

刹那と茶々丸は俺と仮契約を結んでいない。

茶々丸はエヴァの従者であるし、刹那は木乃香と仮契約を結んでいるので俺と結ぶ必要はないと感じていたのだ。

刹那は一度、俺と仮契約をしようとしたことがあったが、流石に自分に好意を持っているわけでもない女の子とキスするのはどうかと思ったので断った。

訓練でかいた汗を流すためにクウネルの住処にあるシャワーを浴びる。

ゆっくりとシャワーを浴びていると誰かが浴室に入ってきた。

水滴を拭い、入ってきた人物を見るとタオルをカラダに巻いただけの刹那がいた。

「なんで、入ってきてんの？」

俺はカラダを隠しておらず、露出した状態であるが恥ずかしくはない。

というより、中身は四十ぐらいのおっさんなのだ。それなりに経験もあったので、今さら見られることに羞恥心なかった。

「いえ、あの、お背中をお流しします」

刹那は隠そうとしない、俺の裸体を見て赤くなっている。

「え～と、お願いするね」

その姿が可愛らしく、少女に背中を流してもらうのもなかなかに興奮するので、お願いしてみた。

刹那が背中を流してくれる。しかし、シャワーの水でタオルがカラダに張り付いており、その姿は俺の劣情を誘った。

ガバッと俺は刹那を押し倒す。

「きゃっ……」

刹那のカラダに巻いてあるタオルがほどけて、その美しい裸体があらわになる。

刹那の唇に唇を合わせる。しかし、刹那からの抵抗はなかった。

「あのっ、わたしは大丈夫ですからっ」

そして俺は真っ赤になってしまった刹那を満足するまで愛でていった。

「すみませんでした!!!」

情事が終わり、着替えたあと俺は刹那に土下座した。

襲いかかってしまったのは俺なので全面的に非は俺にある。

「いえ、誘惑したのは私ですし、それにこうなることは予測してやりましたから……」

刹那はどうやら、こうなることを望んでシャワー室に入ったらしい。

「でも、どうして?」

「それは皆さっ、いえっ!、なんでもありません!!」

「木乃香たち?」

俺の問いに刹那はおずおずと頷いた。

刹那の発言と態度から察するにどうやら木乃香たちが画策したようだ。

しかし、それでも俺には責任は俺にある。

「責任はとります。だから一緒にいてください！！」

「……はい」

俺の告白に刹那は真っ赤になりながら頷いてくれた。

こうして、また一人俺の恋人は増えた。

後日、これを画策したのが俺たちの関係者全員だというのを知って、全員に制裁を与えたのは言うまでもない。

関西にいる、詠春さんたちも噛んでいたのには驚いたが……

さらにクウネルが情事を撮影してたのでマスターデータを奪い、コピーを含めてクウネルの持っているデータは全て消した。

しかし、すでになぜか木乃美さんの方に渡っていて、木乃美さんから木乃香のこともよろしくと頼まれた。

さらに夕子さんも同じように言ってきたので反応に困る。

ちなみに奪ったデータは大事に保存しています。

第２７話　春はお見合いの季節！？（後書き）

というわけでエロが入りました。

本当にこれを書いたときの私はどうかしていたのでしょう。

まさか、一番始めに主人公とシたのがせっちゃんだとは誰も想像できなかっただろう。

たまに暴走してしまう作者ですが、これからもよろしくお願いします。

第２８話　こんな休日も……（前書き）

とある感想に少しイラついたのでストックからとりあえず吸血鬼騒動編の導入部までを投稿します。

第２８話　こんな休日も……

あの騒動から数日が経過し、俺は普段通りの毎日を過ごしていた。

あれからというもの、刹那がチラチラとこちらを気にしたような態度をとったり、木乃香や裕奈たちが刹那と同じように誘惑してきたりしたがなんとか理性で持ちこたえ、漸く木乃香たちも落ち着いてきた。

……惜しいことをしたなあ

据え膳食わぬは男の恥、という言葉の通り手を出してもよかったのだろうが、先日の一件からすぐというのは些か問題がある気もした。

ただ、俺も男なのでまた誘惑をされた場合、耐えきれる自信はなかった。

そして、今日は珍しくエヴァと麻帆良の外に遊びに出ている。傍らには茶々丸もいた

あさぎに封印を解かれてからというもの、麻帆良の魔法関係者は警戒していたが、ここ数年問題を起こさなかったことで少しずつではあるが警戒も解かれていった。

まあ、一部の魔法関係者だけではあるが……

こうやってエヴァが麻帆良の外に出ることはそれなりに多い。

裕奈たちを連れて買い物などに行くこともあれば、茶々丸と二人で映画などを見に行くこともある。

しかし、エヴァに誘われて麻帆良の外に出るのは久しぶりだった。

エヴァと茶々丸に連れられて、最近公開された映画を見に行く。

映画の内容は様々な要因で不幸な人生を送っていた主人公が、ある日を境に幸運に恵まれ続けるというものだった。

この作品の面白いところは、主人公以外の人物の感情や幸運に恵まれ堕落していく主人公の姿が事細かに描かれていることだ。

主人公の性格の変化や周囲の人間の嫉妬など、人間の本性が描かれているようでなかなか楽しかった。

映画を見終わり、二人とともに街を出歩く。

雑貨や服などを買ったり、劇場でコンサートを見たりなどやっていることは普通のデートとなんら変わらなかった。

そして、麻帆良に戻りエヴァの家で食事をとる。

その最中エヴァが唐突に問いかけてきた。

「今日の私とのデートは楽しかったか？」

「ああ、楽しかったよ」

エヴァがデートという言葉を使ったのは気になったがひとまず質問に答える。

「なら始めに見た映画の内容は覚えているか？」

「覚えてるけど……」

エヴァの言葉に今日見た映画の内容を思い返す。

「あの主人公は幸運すぎた。そして満たされすぎたがために最後は人として堕落していった。

……今のお前も女関係が恵まれている状態だろう？」

エヴァの言葉が俺に突き刺さる。確かに複数の女性から好意を受けている俺はかなり恵まれすぎていると思う。

「お前はアイツら全員を大切にすると言ったな、本当に全員を大切にし続けることは可能だと思うか？」

エヴァの言っていることは、俺が自分の言葉を守り通すことができるかの問いかけだ。

将来、もし本当に特別な人ができたとき変わらずいることができるか、そしてずっと変わらないままでいられるか、それが問題であった。

しかし、俺は迷いなく答える。

「やるよ。少なくともアイツらが望まなくなってもずっと大切にす

るし、全員を愛し続けるよ」

覚悟を持って言う。将来どんなことがあっても自分の言葉を違えることはないと……

エヴァはそんな俺を笑っていた。

「ははははっ、それがお前の出した結論か。それでいい、そうやって自分の望みを叶えようとするお前だからこそ、最高に良いのだからな」

エヴァはそう言って俺に近づくと、キスをしてきた。そしてそのまま舌を絡ませてくる。

唇が離れ、俺たちの間につうっと糸が引く。

そしてエヴァは俺の服を引き裂いた。

「茶々丸」

「イエス、マスター」

いきなりのことでエヴァから離れようとする俺を後ろから茶々丸が羽交い締めにする。

茶々丸は何故か服を脱いでおり、あさぎと超によって人間と同じように造られたそのカラダは柔らかく、いろいろ当たっているので男として反応してしまう。

エヴァも目の前で服を脱ぎ、俺へと密着する。

「ふふふっ、自分の最高傑作があのような小娘に先に手を出されたからな。
今度は私がシてやろう。……刹那よりも満足させてやるぞ」

エヴァの妖艶な笑みに誘われるまま、二人と朝まで混ざり合った。

翌日起きたとき、エヴァも茶々丸も満足そうな表情をしていた。

茶々丸はエヴァに従い、俺とシタのだがどうやらそこそこ良い感情を持っており、こういうことにも興味があったようなので後に引くことはなかった。

しかし、後日エヴァがみんなの前でこのことを言ったため、みんなから責められ、さらなるアプローチをかけられることになった。

◇

春休みも遂に最終日を迎えた。

俺のことはともかくとしてこの春休みの間、少しだけ変わったことがあった。

ネギの部屋の変更だ。

ネギは今まで瀬流彦先生の部屋で住んでいたが、高畑が出張から帰ってくるのと同時に高畑の部屋に引っ越すことになったようだ。

高畑はメガロに出張に行っていたので、少し警戒をすべきであろう。

そして今、俺はあさぎとアリサと一緒に部屋でゲームをしていた。

やっているゲームは、どこぞの貧乏王が出てくる鉄道会社をモチーフとしたゲームだ。

「涼クンってさ～」

「どうしたんだ？」

「なんていうか欲張りなとこあるよね♪」

テレビの画面に夢中になりながらあさぎは、俺にそんなことを言ってきた。

「そうですね。女の子を侍らせているところとか、特にそう感じます」

アリサもあさぎの言葉にうんうんと頷いている。

「まあ、欲張りっていうのは事実かな。やっぱり欲しいものは欲しいって思っちゃうからね」

「いいんじゃないかな♪少しくらい欲張りな方がボクはいいと思うよ♪」

「私も涼さんはそのままでいいと思います。裕奈さんたちのことも大切にしているのがわかりますし、涼さんは欲張りでも強欲というわけではありませんから……」

あさぎもアリサも俺のことをよく見ているようだ。

「あさぎは人生楽しんでいるよな～」

俺はあさぎの印象を言ってみる。

「そうですね、いつも楽しそうですし、研究とかしているときに失敗しても笑顔ですよね」

アリサも俺の意見に同意のようだ。

あさぎはいつも笑顔でハイテンションだ。真剣なときや戦闘のときなどは真面目な表情になるが、そのギャップがコイツの魅力を引き出している。

「まあね♪だって毎日が楽しいもん♪
研究をするのも、みんなと一緒にいるのも、ただのんびりするだけだって、その全てがボクは楽しいよ♪」

あさぎは笑顔で返してくれる。

その表情は本当に今を楽しんでいるようだ。

「そういうアリサちゃんは本当に物語のヒロインみたいだよね♪」

次はアリサの話題に移る。

「そうだな、幼少の頃に事件に巻き込まれ、魔法学校でも不幸な幼少時代を過ごした美幼女だし」

「美幼女ではありませんっ、美少女ですっ！！」

アリサは幼女の扱いが気に入らないようで、自分のことを少女だと訂正を求めている。

「……それに昔のことを思い出すのは辛いんです」

アリサは悲しげな表情を浮かべる。それに罪悪感を感じ、流石にマズい発言をしたと思い謝ろうとした。

「ゴメ「だから私と仮契約してくださいっ！！」っておい」

アリサはこうやって、俺と仮契約を結ぼうとしてくる。

「いや、昔のことはいいのか？」

「過去は過去です。私はあの父親を八つ裂きにしてやりたいだけですから。だから、私と仮契約してください！」

笑顔で言っているので顔が引きつる。

あさぎに助けを求めようとすると、

「～～♪」

あさぎは楽しそうに仮契約の魔法陣を書いていた。

「ほら～、仮契約しましょうよ～」

俺があさぎに気を取られているうちにアリサは俺に抱きつき、胸に頬をこすりつけている。

「しちゃえばいいと思うよ♪」

あさぎはこちらを楽しそうに見ている。どこから出したのか、その手にはカメラが握られていた。

「ではいただきますね♪」

俺があさぎに気を取られた隙にアリサが自分の唇を俺の唇に重ねる。

パシャ

その瞬間、あさぎもカメラのシャッターをきった。

俺の手元にアリサのパクティオーカードが現れる。

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いしますね」

アリサはコピーカードを作ると自分の懐にいれた。

こうして、春休み最終日は過ぎていった。

あさぎの撮った写真はいつの間にか新聞部に渡り、キスシーンは校内新聞に掲載された。

アリサは顔の一部が隠れていたためわからなかったようだが、俺は修正されていなかったためにすぐにバレた。

その日からクラスメートたちにロリコン扱いを受けることになる。

第２９話　新学期と吸血鬼騒動（前書き）

吸血鬼騒動編です。

第２９話　新学期と吸血鬼騒動

春休みが終わり、新学期が始まる。

私たちは最終学年になり、新学期最初のホームルームが始まった。

「３年！Ａ組！！ネギ先生ーっ」

クラスのみんながネギ先生を出迎える。

隣で千雨ちゃんが呆れた表情でクラスメートを見ていた。

ホームルームが進んでいくとノックとともにしずな先生が教室に入ってきた。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。３―Ａのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした。ここでですか！？わかりましたしずな先生」

ネギ君は今日の予定を私たちに伝えていない。

「で、では皆さん、身体測定ですので……えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください」

予定を整理しきれてなかったのか焦って、私たちに服を脱ぐのを命じる。……まだ自分が教室内にいるのに

「ネギ君のエッチ～～～ッ」

「うわ～～～ん、間違えました～」

桜子や鳴滝姉妹がネギ君をからかうように叫ぶとネギ君はあわてて教室の外に出て行った。

身体測定のために服を脱ぎながらみんなは談笑している。

私は千雨ちゃんやこのか、そしてアスナとネギ君のことで話していた。……といってもほとんどがアスナと千雨ちゃんの愚痴だ。

「あのガキは教師としてどうなんだ。なんで今日の予定を把握してないんだよっ」

「それにアイツはセクハラもするし、しかもそれを反省しないのよっ」

常識的な面からネギ君が教師であることを嫌がる千雨ちゃんはともかく、アスナはネギ君から服を脱がされているからストレスが溜まっているようだ。

「ネギ君と一緒に暮らすことにならんで、ホントによかったな～」

「ありがとうこのか～、流石にアイツと一緒に暮らしたら堪えられなかったわよ」

このかたちがネギ君と暮らしそうになっていたことは聞いていた。

これを聞いたときはみんなが学園長の行動に怒りを通り越して呆れ

たはてていた。

「あれー？今日まきちゃんは？」

後ろでパルが言った言葉に、今日まき絵がいなかったことを思い出す。そういえば亜子もいなかった。

友達の心配をしつつも身体測定を進めていく。

「ねえねえところでさ、最近寮で流行ってる……あのウワサどう思う？」

騒ぎながらも身体測定をしていると、柿崎がみんなに問いかける。

「え～～何！？何ソレ～～！？」

みんなはそのウワサを知らないようで柿崎に逆に聞き返した。

「知らないの？しばらく前からある噂だけど……、何かね～満月の夜になると出るんだって、寮の桜並木に……」

柿崎はそこで溜めを作り、みんなの興味を引きつける。

「真っ黒なボロ布につつまれた……血まみれの吸血鬼が…」

柿崎のことばにみんなは騒いでいるが、私たちは違うことに気をとられていた。

私たちは教室の隅で目立たないようにしているエヴァちゃんに目を向ける。

しかし、エヴァちゃんは心外だという風に首を左右に振った。

どうやらエヴァちゃんはこの噂とは関係ないようだ。

「も～～、そんな噂デタラメに決まってるでしょ、アホなこと言ってないで早く並びなさいよ」

アスナは否定するが、何かを考える表情に変わる。アスナもなりたてとはいえ魔法関係者なのでいてもおかしくないと考えているのだろう。

「先生～～大変や～～まき絵が…まき絵が～～」

亜子が廊下を走りながらネギ君に呼びかける声が聞こえる。

「何!?」

「まき絵がどーしたの!?」

みんなは下着姿なのを忘れて、窓や扉を開き廊下を見る。

しかし、廊下にはネギ君がいたためすぐに閉めた。

服を着直して、保健室にいるまき絵のもとへと向かう。

寝ているまき絵から微かに魔力の残り香を感じる。このかたちを見るとみんなも気づいているようだ。

もしかしたら、何らかの事件かもしれないので警戒を強めることにした。

◇

夜、私は図書館探検部のみんなに明日菜さんを加えたメンバーへ帰っていた。

途中、みんなは寄り道をするという話しをしていたが、私は用事があったので先に寮へ帰ることになった。

「じゃあ、先に帰っててののどか～～」

「はいー」

私はそのまま、桜通りを通って寮への道を歩いていく。

しかし、今日話題となった吸血鬼のことが気になり、少しの風で木がざわめくのもこわく感じ、少し駆け足で寮へ戻る。

すると目の前に人影が現れる。

人影は背が高く、黒いコートを着ていた。

「ふふっ、悪いが襲わせてもらうよ」

その人物は私に襲いかかってくる。その恐怖で私は気絶してしまっ

た。

◇

私は茶々丸を連れて、桜通りの吸血鬼の調査を行っていた。

この地で私の他に吸血鬼と呼ばれる存在が気になったからだ。

その道中、クラスメートである宮崎のどかの姿を見つける。

気弱な彼女は噂話が気になったいるらしく、怯えながら寮までの道を駆け足で帰っていた。

しばらく彼女を観察していると、彼女の前に黒いコートを着た奴が現れた。

私はすぐにソイツが人間でないことに気づく。

ソイツから漂う気配は間違いなく魔族のものだった。

宮崎のどかはソイツに遭遇すると気絶する。そんな彼女に魔族は襲いかかった。

目の前で女に襲いかかろうとしているのでそれを止めるために間に割って入る。

そして“断罪の剣”を展開し魔族を斬りつける。

“断罪の剣”は魔族真っ二つにした。

真っ二つにされた魔族はどうやら誰かに召喚されたようで、そのまま魔界へと帰される。

そして宮崎のどかを介抱しようと彼女に近づいた。

「待てーっ、ぼ、僕の生徒に何をするんですかーっ」

しかし、邪魔が入る。どうやらネギ・スプリングフィールドが来たようだ。

しかし、何を勘違いしたのかコイツは魔法を放ってきた。

回避すると後ろにいる宮崎のどかに当たってしまうため障壁を張って防ぐ。

「えっ、き、君はウチのクラスの……エヴァンジェリンさん!?」

ネギは私の姿を見て驚いているようだ。

私はコイツいきなり攻撃してきたことに憤っていた。

ネギが到着したことで宮崎のどかの介抱を任せて、すぐに帰ることにする。これ以上、コイツに付き合うのは嫌だった。

「な、何者なんですかあなたはっ、僕と同じ魔法使いのくせに何故こんなことを!?」

私が襲ったように勘違いしているようだが、いきなり攻撃してきた奴に説明するのも嫌なので浮遊術を使い、空に飛び上がる。

そのまま帰ろうとすると、ネギは杖を使い追いかけてくる。

仕方がないので遊んでやることにした。

ついでにナギの子供でアリサの兄であるコイツの実力が気になるので、実力を見てみることにする。

精霊召喚などを使い、見習いとは思えないほどの魔力は感じるが、アリサには遠く及ばないのですぐに興味を失う。

茶々丸にネギを無力化させるように命じる。

茶々丸はネギの締め上げて、行動を封じた。

「コラ～～～ッ、この変質者ども～～～っ！！」

説明するのも面倒なので気絶させようとしたが邪魔が入る。……神楽坂明日菜だ。

不意打ちであったが、反応できたので回避する。避けられたにもかかわらず、彼女はきれいに着地を決めた。

「あっ、あんた達ウチのクラスの……ちょっ、どーゆーことよ！？」

神楽坂明日菜は私たちに気づいたようで、事情を聞こうとしてくる。

「ま、まさか、あんた達が今回の事件の犯人なの！？しかも二人が

かりで子供をイジめるような真似して……答えによってはタダじゃ済まないわよ！」

しかし、あまりのまくし立てに説明する気も失せたので、とりあえずこの場から引き揚げることにした。

こうして慌ただしい新学期初日が終わる。

第２９話　新学期と吸血鬼騒動（後書き）

ストックから投稿と書きましたがとりあえずはまだストックは１０話近くはあるので週２回の投稿ペースは守れると思います。

年明けからは就活や学業で忙しくなるので、もしかしたら不定期更新になるかもしれないですがご容赦ください。

第３０話　勘違いには気をつけよう（前書き）

とりあえず投稿です。

第３０話　勘違いには気をつけよう

次の日、学校に行くがいつまでたってもあのぼーやは来ない。
代わりにやってきたのはタカミチであった。
タカミチはホームルームを進め、ぼーやが休みだと伝える。
「エヴァ、ちょっといいかな？」
ホームルームが終わるとタカミチが声をかけてきた。
面倒ではあるが、どうせ昨日のことで話しがあるのだろう。
人気のない場所へと移動し、周りに聞かれないように結界を張る。
「エヴァ、何故ネギ君を襲ったんだい？」
タカミチはぼーやから昨日の話しを聞いたようだが、タカミチの質問は事実とは異なっていた。
「何を勘違いしている。先に攻撃したのはあのぼーやだぞ」
「しかし、彼は君にひどい目にあわされたと言っていたけど……」
「ふんっ宮崎のどかに襲いかかっていた奴がいてな、ソイツを倒したあと介抱してやろうとしたら、あのぼーやが何を勘違いしたのか攻撃をしてきたのだ。

そんな奴に説明してやる気もないのでな、そのまま帰ろうとしたら追いかけてきたので、それを迎撃しただけだ」

タカミチに昨日の顛末を話す。

「……それは本当かい？」

「証拠を見せてやってもいいぞ？」

タカミチが疑っているようだが、私が証拠を持ってくると言うと引き下がった。

昨日の顛末は私の記憶を見せてやってもよいし、茶々丸が昨日の映像データを持っている。それを出せば、証拠としては十分だろう。

「わかった、それとエヴァ、学園長が呼んでいるから放課後、学園長室に行ってくれ」

タカミチはそれだけ言い残すとその場から立ち去った。

「まったく、面倒なものだな」

私は一つ溜め息をつくと授業にでるために教室へと向かった。

結局、放課後まであのぼーやは学校にくることがなかった。

自分から攻撃しておいて反撃を喰らい痛い目にあうと、その相手に会うのが恐いから自らの業務を投げ捨てる。……あのぼーやはアホなのか？

ぼーやの行動に頭を抱えたくなる。

「ちょっといい？」

私が茶々丸を連れて学園長室に行こうとすると、神楽坂明日菜が声をかけてきた。

コイツは昨日あの場に現れたため、昨日のことについて事情を知りたいのだろう。

「昨日のこと聞かせてもらうわよ」

私を睨みつけ、予想通り昨日のことを聞いてきた。

その態度が少し気に食わなかったが、タカミチに説明したのと同じように昨日の顛末を教えてやることにする。

ついでにぼーやが休んでいる理由も教えてやった。

神楽坂明日菜は私の話しを聞き終わると、勢いよく頭を下げてきた。

「ごめんエヴァちゃん！！私、エヴァちゃんのこと疑ってた！！」

私の話しをそのまま信じてこうやって謝罪をしてくるコイツに呆気をとられたが、こういうところはコイツの美点なのだろう。

「でも、エヴァちゃんが返り討ちにしたとはいえ、そんなことで自分の仕事をサボるなんて」

コイツの表情はぼーやに対して呆れているようだった。

ふとあるコトを思いつく。

「ちょうどいい、私はこれから学園長室に行くがお前もついてこい」

「えっ、ちょ、ちょっと!?」

コイツに学園長室までついてくるように告げると、そのまま茶々丸を連れて学園長室まで行く。

「お前はここで私と学園長の話しを覗いて待っていろ」

「もう、いきなりなによ～」

学園長室までたどり着くと、コイツに外で待っているように伝える。

「いいか、これから私は学園長と話しをしなければならない。その会話をここで聴いていろ」

「お願いします、明日菜さん」

私の言葉に付け足すように茶々丸は深く頭を下げて、コイツに頼む。

「わかったわよ」

不満そうな顔をしているが納得してくれたようだ。
それを確認すると私は二人を置いて、学園長室に入った。
「なんのようだ、ジジイ」
私は中にいたジジイに呼び出された理由を問い詰める。
「フォフォ、まあ落ち着くがよい」
「あいにくと私は落ち着いている。ただ呼び出されたのに少々不機嫌なだけだ」
「それは悪いことをしたのー」
そう言うがジジイは全く悪びれた様子もない。
「用件なのじゃが、ネギ君と交戦したらしいのう？」
「先に手を出したのは、あのぼーやだぞ」
また、同じことを聞かれるのかと思い、少々うんざりする。
「わかっておる。それで相談なのじゃがネギ君の修行のために彼の敵役をやってもらえんかの？」
なるほど、あのぼーやは私が生徒を襲ったと勘違いしている。そんな私を敵対させることでぼーやに戦闘経験を積ませるつもりだろう。
「何故、私がそんなことをやらなくてはいけないのだ？」

しかし、私はそれにわざわざ付き合ってやるつもりはなかった。

「実はのう、元々は儂の使い魔にやらせようと思ってたのじゃが、昨日誰かさんが使い魔を倒してしまってのう。

また呼び出すのも面倒じゃと思ったところに都合よく彼と戦ってくれた者がおったのじゃよ」

どうやら、昨日私が倒したのはコイツの使い魔だったようだ。

「英雄の息子の修行のために、自分の学園の生徒を襲わせるとはとんだ外道だな」

自分の目的のために一般人を巻き込んだコイツは他の魔法使いの目からはどう映るだろう？

一般的な魔法使いであれば、この行動に嫌悪を示すだろう。

しかし、英雄の息子のためなのだから仕方がない……などと言うような奴らも麻帆良には何人かいた。

これがメガロの連中であれば、さらに増えることになるだろう。

「仕方ないじゃろうて、これも彼を“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”にするために必要なことなのじゃ。

さっき話したタカミチ君もこのことに納得くれたのじゃ」

タカミチもジジイと同じように英雄の息子のために一般人を巻き込

むことを良しとしたようだ。

そのことに少し驚いた。

しかし、タカミチは“英雄”に憧れているのだ。

ナギの息子であるぼーやに甘くなってもおかしくはないのかもしれない。

「報酬はこちらで用意するしよう、じゃから頼まれてくれんかのう？」

ジジイはそう言ってもう一度私に頼み込む。

「いいだろう、ただし条件はつけさせてもらうぞ」

私は条件つきで、それを承諾しることにした。面倒ではあるがジジイから報酬を出させるのは大きいからだ。

「条件とはなんじゃ？」

「まずはこのことについて、麻帆良にいる魔法関係者全員に話すことだ」

私はジジイに今回のことに関する事情を公表することをもとめる。

私は悪の存在として知られている。

ただでさえ、そのことでうるさい奴らがいるのに、英雄の息子と敵対したということになれば、さらにそいつらがうるさく言ってくる

ことだろう。

「う、うむ、わかった。彼らには伝えておこう」

ジジイは言葉に詰まりながらも了承する。どうせ、自分が一般人を襲ったことは隠すのだろうが……

“このこと”という言い方には幅がある。一般人を襲ったことも含めて全てと考えることもできれば、私がぼーやの修行のために敵対することだけともとれる。

私はここでの会話を盗聴器を使って浅葱たちに聴かせられるようにするのと同時に、録音機に録音していた。

さらにジジイは気づいていないようだが、扉は少し開いており、そこから茶々丸が撮影している。

きちんと結界を張らないジジイが悪いのだと、内心ジジイのことをバカにしていた。

「もうひとつの条件ではあるが、あのぼーやのことを倒してしまっても構わんのだろう？」

私は条件というより、質問をジジイにぶつける。

「ああ、ネギ君を倒して貰っても構わんよ。ただし、やり過ぎることはないように頼むのう」

「私もその程度はわきまえているさ」

ジジイがあっさりと許可を出したことを訝しむが、妨害をしてくるのは見えていたし、ぼーやを倒す許可も得たので十分だった。

「私から出す条件はそれぐらいだ。報酬はあとでこちらが要求することを叶えてもらおう。……それでどうだ？」

「よかろう、ではよろしく頼んだぞ」

ジジイの言葉を聞き終えると学園長室から出る。

そして、外にいた二人を見ると茶々丸は頷き、撮影が上手くいったと伝えてくれる。

神楽坂は歯を食いしばり、怒りを堪えていた。学園長が一般人を巻き込んでいたことに怒りを感じているのだろう。

そんな彼女に私は告げる。

「この学園にいる魔法関係者にはこんな奴らもいる。お前も気をつけるんだな」そういう私も学園長が一般人を巻き込んでいたことには驚いている。

元々、私がコイツを連れてきた理由は今日の事件について学園長に説明するついでに、魔法関係のことについて聴かせてやろうと思っていたのだ。

魔法に関わって日の浅いコイツは魔法がどれほど危険なものかをまだ理解していない。

そんな状態で関わっていれば死ぬ危険性も高くなる。

コイツの過去は知っている。そして私は不幸な過去を過ごしていたコイツに幾分か自分を重ねてしまったのだ。

「エヴァちゃんっ」

「なんだ？」

「……ありがとう」

神楽坂が私に礼を言う。

私はそれを聞くとそのまま茶々丸を連れて帰った。

◇

エヴァちゃんに連れられてきた学園長室の前で、学園長とエヴァちゃんの会話を聴いていた。

そして、二人の会話で学園長がまきちゃんや本屋ちゃんが襲われた原因であることを知った。

しかも、それを仕方ないで済ました学園長に怒りを感じる。

そして学園長はこう言った。

「タカミチ君もこのことに納得くれたのじゃ」

この言葉に愕然とする。

大好きな高畑先生が一般人を襲わせることに納得した……

嘘だと思いたかったが、学園長がこうして言っているところを見ると事実なのだと理解する。

今まで信じてきたものを全て裏切られた気がした。

高畑先生への愛情が強かったぶん、落胆も大きい。

そんな学園長や高畑先生に強い憤りを感じる。

そして、エヴァちゃんが学園長室から出てきた。

エヴァちゃんは私に魔法使いにはこんな人間もいると教えてくれる。

私は今まで、魔法の危険性について考えたこともなかった。しかし、こうやって一般人を襲うのに躊躇わない人がいることを知って考える機会を得たのだ。

もし、このまま流されていたと思うとぞっとする。

「エヴァちゃんっ」

「なんだ？」

「……ありがとう」

私はエヴァちゃんに感謝の言葉を伝える。

エヴァちゃんは私の言葉を聞くと何も言わず、茶々丸さんを連れて立ち去っていった。茶々丸さんは立ち去る前にこちらに会釈をしてくれる。

そして、私は二人を見送ると軽く両手で頬を叩く。

そうして、意識を切り替えると荷物を取りにいくために教室へと歩き始めた。

第３０話　勘違いには気をつけよう（後書き）

すでにお気づきかと思いますが、感想をユーザーからの受付のみに変更しました。

ユーザーではなく、純粋に感想を書きたい人や悪いところを指摘したい人には申し訳ないですが、ご理解をお願いします。

第３１話　淫獣襲来（前書き）

予定日の投稿です。

少し短いかもしれません。

第３１話　淫獣襲来

昨日、エヴァンジェリンさんを問い詰めようとして逆に返り討ちにされた。

それで彼女に会うのが恐くなったので、タカミチに授業を休むように伝え、僕は仕事をサボって部屋で寝ていた。

僕が部屋から出ずにベッドで丸くなっていると、窓からコンコンという音が聞こえた。

その音が気になって窓に目を向けてみる。

「兄貴っ、ネギの兄貴っ」

そこには僕の友達であるオコジョ妖精がいた。

「俺っちだよネギの兄貴、アルベール・カモミール！！久しぶりぶりさ～」

「あ～～っ、カモ君！！」

「へへっ、恩を返しに来たぜ兄貴」

カモ君は昔、罠にひっかかっていたのを僕が助けたのがきっかけで仲良くなった。

「ところで兄貴、ちっとも進んでねえみたいじゃないですか」

「え？何が？」

窓を開き、カモ君を部屋の中に入れるとカモ君は急に話しをふってくる。

いきなりのことなので、それが何のことなのかわからない。

「パートナー選びっスよ、パートナー選び！！いいパートナー探さないと立派な魔法使いになるにもカッコがつかないでしょー！？」

「うっ……それはこれから探そうと思ってたんだけど、なかなか」

カモ君の言葉に僕は思いあたる節があった。

僕が春休みにお姉ちゃんから手紙が届いたときパートナーに関することも書かれていたのだ。

その時はまだ僕には早いと思っていたが、こうしてカモ君に言われると少し焦ってしまう。

「そうスか、でも俺っちが来たからにはもー大丈夫。俺っちは兄貴の姉さんに頼まれて助っ人に来たんスよーーっ」

「ええっ！？本当！？」

僕はカモ君が自分のために来てくれたことに素直に喜ぶ。

「これでパートナー探しも楽になるかもー。

お姉ちゃんにカモ君を寄こしてくれたお礼メールを書かなくちゃ」

僕は機嫌良く、お姉ちゃんにお礼のメールを送るための用意をしようとする。

「あー兄貴、いい、いい！！別にそんなの書かんでも」

しかし、カモ君が止めるのでそれを不思議に思っていると、部屋に誰かが入ってきた。

「ネギ君、大丈夫かい？」

「あ、うん、もう大丈夫だよタカミチー」

タカミチには昨日のことを話して、今日僕が仕事を休んだ理由を知っているので心配してくれたようだ。

「よかった、立ち直ったみたいだね。それなら、学園長が呼んでいるから学園長室に行ってくれるかい？」

タカミチは僕の様子を見て安心すると、僕に用事を伝える。

「うん、わかった」

タカミチからの伝言を聞くと、すぐに僕は着替え始める。

「あと、そこにいるオコジョ妖精君も学園長室に行ってくれるかな？」

「俺っちもですか？わかりやした」

タカミチはカモ君にも学園長室に向かうように言う。

……でも、どうして今来たばかりのカモ君のことを知っているんだろう？

そのことが気になったが、それよりも学園長に呼ばれていることの方が大事なので、そっちに思考を優先する。

「じゃあタカミチ、行ってくるね」

着替えが終わると部屋にいたタカミチに声をかけて、カモ君と一緒に学園長室へと向かった。

◇

儂は今、学園長室でネギ君を待っておった。

理由は昨日エヴァにも話した通り、ネギ君の修行のために彼女と敵対させることじゃ。

ただし、儂が使い魔に生徒を襲わせておったことやこれが修行ということは話さない。

話してしまっては彼がエヴァと敵対する理由はなくなってしまうので、敵対し戦闘経験を得る機会を失うことになる。

それはマズかった。彼には次代の英雄として成長してもらわなければならん。

さらに、エヴァは学園内にいる間は力を封じられている。
流石に昔ほど能力を封じ込められているわけではないが、それでもネギ君が相手をするにはちょうど良い具合だろう。
満月の夜に相手をすればネギ君は苦戦するだろう。
しかし、それ以外の時に戦闘すればネギ君が勝つ可能性が高い。
それに戦闘への干渉はしてはならないとは条件につけられていない。
ゆえにこちらがネギ君に協力してやれば、勝つには十分だろう。
魔法関係者の中には元賞金首であるエヴァのことを嫌悪しておる者もおる。
その者たちを少し焚き付けてやればよい。
条件の中には今回のことを話すということもあったが、いつまでとは言っていないし儂のやっていたことも言わなければならないというわけではない。
儂はエヴァの出した条件を思い返しほくそ笑んだ。
「失礼します」
そしてようやくネギ君が部屋に入ってくる。
儂はネギにここに呼んだ理由を話す。

「ネギ君、昨日は災難じゃったのう」

「は、はい、それでエヴァンジェリンさんのことについてなんですが」

ネギ君はエヴァについて聞きたいようだ。

「実はのう、エヴァは吸血鬼の真祖なのじゃ、それを君の父親であるナギがここ麻帆良に封印したのじゃよ」

「エヴァンジェリンさんが吸血鬼～～～!?」

ネギ君はエヴァが吸血鬼であることに驚いている。

「その吸血鬼がどうしたんでい?」

ネギ君の肩にいるオコジョ妖精は昨日のことを知らないようなので、儂は昨日のことを話してやる。

あくまでもネギ君の報告した通りで真実ではないのじゃが……

「故郷へ帰らせていただきます」

「まあ、待つがよい」

ネギ君がエヴァと交戦したということを聞いてオコジョ妖精は帰ろうとするのを止める。

「じゃあ、桜通りの吸血鬼って?」

「それはエヴァかどうかはわからん。そうかもしれんとしか言えんのう」

ネギ君の質問にぼかして答える。

もちろん彼女が犯人であるとは言いきっていない。ただ可能性があると言っただけじゃ。

これでネギ君は勝手に勘違いしてくれることじゃろう。

「兄貴、相手は吸血鬼とはいえ、力は封じられているんだろう。なら、大丈夫ですぜ」

正確に言うとナギの封印は解かれていて、学園の封印が効いている状態なのだが、力が封じられていることには変わりないので訂正はしない。

それを聞くと途端にネギ君は元気を出した。

「そうだね、それにお父さんのことを知っているのかもしれないし」

「エヴァはナギのことを知っておるが、簡単には口は割らんぞ」

ここで暗に戦闘に勝って情報を引き出せと含みを持たせて言ってみる。

「でも、僕は二人に負けたし……」

ネギ君は昨日のことを思い出したのか、少し落ち込む。

「そこでじゃ、そこのオコジョ妖精君」

「カモでいいぜ、爺さん」

儂はオコジョ妖精に伝える。

「君の事情を考慮する代わりにネギ君の力となって欲しいのじゃ」

儂はこやつが脱獄していたのを知っていた。それをどうにかしてここにいることを許した。

つまりネギ君に“仮契約”をさせるために、こやつをネギ君の傍に居させるのだ。

それを理解したのかカモは儂に向かって笑いかける。

「そういうことか、安心して俺っちに任せな」

「まあ、こちらからも誰か出すから安心するとよい」

「わかりました。では失礼します」

ネギ君はその言葉に安心したのかまた元気を取り戻し、やる気を漲らせる。

そして、学園長室から出て行った。

儂はそれを見ると、あまりにうまくいく物事に笑ってしまう。

「ふぉふぉふぉ、まさかここまでうまくいくとはのう」

儂はさらにこれからについて考え始める。

「学園長！！」

「どうしたのじゃ、新田先生？」

いきなり入室して凄い剣幕でこちらに近づいてくる新田先生に驚く。

「なぜ仕事を休んだネギ君が学校にきているのか説明してくださいますね？」

新田先生は自身の後ろにいたネギ君を引っ張り出すと、儂に問い詰めてきた。

ネギ君は新田先生に叱られたのだろう、落ち込んでいた。

儂は彼にどういう言い訳をするか頭を悩ませた。

第３２話　拒否（前書き）

予定通りの投稿です。

第３２話　拒否

学園長の企みを聞いた次の日。

朝のチャイムが鳴るとネギが教室に入ってくる。

昨日は休んでいたようだが、今日は学校に来れる程度には持ち直したらしい。

昨日、学校を休んでいた理由を知る人間としてはこうやって何事もなかったように来られるのは少々問題ではないかと思う。

「ネギ先生、お身体は大丈夫なのですか？」

「あっ、え～と、はいっ大丈夫です。もうすっかり元気になりました」

いいんちょの心配にネギは自分が昨日体調不良という名目で休んでいたのを思い出したのか、焦って取り繕う。

みんなは疑問に思っていないようだけど、その姿は明らかに不自然だった。

「それでは朝のホームを始めます」

ネギは昨日を休んだ理由を正直に説明せず、そのまま朝のホームを始めた。

「アスナさん、ちょっといいですか？」

朝のホームが終わるとネギは私に話しかけてくる。

「なによ」

昨日、学園長の話しを聞いたあとなので少し警戒してしまう。

「あのですね、僕のパートナーになってくれませんか？」

ネギは私にパートナーになるように頼んできた。

一瞬、告白かと思い焦ってしまう。

「ぱ、パートナーってなによ？」

「そのことは俺っちが教えるぜ」

いつの間にかネギの肩にいたオコジョが喋る。

動物がいきなり喋ったことに驚いたが魔法があるのだ、動物が喋ってもおかしくはないのだろうと納得した。

そしてオコジョはパートナーについて教えてくれる。

「パートナーっていうのは“魔法使い（ミニステル・マギ）の従者”って言って、魔法使いをサポートする相棒のことだ」

「マギステル・マギになるんだったらパートナーの一人もいないと格好つかないんですよー」

「それに異性のパートナーが多いな。今だと大体、そのパートナーと結婚するのが普通だぜ」

二人がしてくれた説明に要するに恋人のようなものかと理解した。

「そのための必要なのが仮契約っていう儀式でそれにはキスする必要があるからな。

まあ、異性とするほうがいいんだよ」

そして私はネギのお願いにこう答えた。

「イヤよ、何であんたのパートナーにならなきゃなんないのよ。それにキスするなんてバカみたい」

コイツとパートナーになってしまえば、エヴァちゃんと敵対しなければならなくなるだろう。

それにこのままだと学園長の思い通りになる。

あんな奴の思い通りになるなんてイヤだし、このままネギと関わってもろくな目にあわないだろう。

ただでさえ、服を脱がされたりと迷惑を被っているのだ。

マギステル・マギというのがああいう人間たちの集まりなら、学園長よりもエヴァちゃんたちの方が信用できた。

「……ああ、もしかして姐さん中3にもなって、まだ初キッスを済ませてないとか……？」

「なっ……！？」

オコジョに図星を指され、少し動揺するがすぐに落ち着きを取り戻す。

そしてネギの肩にいるオコジョを握ると下に叩きつけ、ネギの頭にチョップをする。

「いいっ、女の子にとってキスは特別なの！！私はあんたなんかするのはイヤ！！」

私はそう言って二人を残し、その場から立ち去った。

◇

アスナさんに断られた僕は呆然としていた。

まさか断られるなんて思ってもいなかったからだ。

そのまま、落ち込んでいたけど授業があるので教室へと向かわないといけない。

授業が終わり放課後を迎える。

エヴァンジェリンさんは授業には出ていて、それがまた少し恐かったけどなんとか授業をこなすことができた。

エヴァンジェリンさんにお父さんのことを聞きたかったが、先日のこともあり話しかけるのも恐い。

「ネギ先生、大丈夫ですか？」

「いいんちょさん」

「何やら落ち込んでいるようですが……」

いいんちょさんが落ち込んでいる僕を見て声をかけてくれる。

「兄貴、兄貴、この人にパートナーのこと頼んでみたらどうですかい？」

カモ君が小声で言ってくる。

僕はどうかと思ったが、わざわざ心配して声をかけてくれたいいんちょさんに頼ることにした。

「あの、いいんちょさん。僕のパートナーになってくれませんか？」

僕はいいんちょさんにパートナーになってくれるように頼んでみる。

いいんちょさんは突然のことに驚いたようだが、すぐに嬉しそうな表情になる。

「ネギ先生っ、私でよろしければネギ先生のパートナーになります

わ」

優しいいいんちょさんはすぐに了承してくれた。

このことを断ったアスナさんとは大違いだ。

そのまま仮契約を結ぶには人目があるので場所を移し、人目のない校舎の裏に行く。

「いいんちょさん、僕とキスしてください」

「ね、ネギ先生」

仮契約を結ぶためにいいんちょさんにキスをお願いする。

いいんちょさんは顔を赤らめると僕に唇を重ねてくれた。

すると、カモ君が書いてくれた仮契約の魔法陣が発動してパクティオーカードが現れる。

「あ、あの、これは一体」

いいんちょさんは魔法のことについて知らない。

魔法について一般人にバラしてしまうことになるが、これは仕方ないことだろう。

「いいんちょさん、実はですね……僕は魔法使いなんです」

「魔法使い……ですか？」

いいんちょさんは僕が魔法使いということに疑問を持っているみたいなので、簡単な魔法を使って信じてもらうことにする。

「見ていてくださいね“火よ灯れ”」

僕が魔法を使うといいんちょさんは驚いたようだが、僕が納得してくれた。

「それでですね。一つ困っていることがあっていいんちょさんに頼みたいことがあるんですけど……」

「ネギ先生のためなら、この雪広あやかどんなことでもお手伝いしますわ！」

何でも力になってくれると言ういいんちょさんを心強く感じながら、僕は今困っていることを伝えた。

「いいんちょさんは桜通りの吸血鬼の噂を知っていますか？」

「？はい、知っていますが？」

「その犯人がですね、どうやらエヴァンジェリンさんみたいなんですよ」

僕がいいんちょさんに伝えると彼女は驚いた表情になる。

「クラスメートのエヴァンジェリンさんがですの！？」

「はい、彼女は吸血鬼ですから。それに一昨日に彼女が宮崎さんを

襲っているのを見ましたし……」

「では昨日ネギ先生がお休みしたのは!?」

「はい、エヴァンジェリンさんに返り討ちにされたんです」

僕はいいんちょさんに昨日休んだことについてぼかして言った。

いいんちょさんは怒りを現れにする。

「ネギ先生を傷つけるとはいくらクラスメートでも許せませんわ」

「それにですね。彼女は僕の行方不明のお父さんのことについて知っているみたいなんです」

「ネギ先生のお父様が行方不明!?それを彼女が知っているですって!?」

いいんちょさんは僕の父親のことについて驚いているようだ。

僕はさらに家族のことについていいんちょさんに話した。

「ネギ先生、辛かったのですね。でも、安心してください。この雪広あやか、持てる全ての力をもってネギ先生の力になりますわ!」

「感謝するぜ姐さん」

「だ、誰ですの!?」

今まで黙って聞いていたカモ君が口を開く。

「俺っちはアルベール・カモミール。カモでいいぜ。ネギの兄貴の助言者だ、よろしくな」

「カモさんですね。こちらこそよろしくお願いします」

いいんちょさんはカモ君に驚いていたようだが、落ち着きを取り戻しカモ君に挨拶する。

「エヴァンジェリンさんには茶々丸さんというパートナーがいます。二人が揃うと厄介なので相手が一人でいるときを狙って攻撃したいと思います」

「茶々丸さんもですの。しかしいくら犯人かもしれないとはいえ、攻撃するのは……」

いいんちょさんはクラスメートを攻撃するのにためらいを感じているようだ。

「甘いっスよ！あのエヴァンジェリンて女、１５年前まで魔法界で６００万ドルの賞金首ですぜ。

主の犯罪者ならその従者も悪、何のためらいも必要ないですぜ」

「そう、ですわね。彼女たちは悪人なんですもの、やらなければなりませんわね」

カモ君の説得にいいんちょさんは納得したようだ。やっぱり、エヴァンジェリンさんが元賞金首というのが大きいだろう。

「あの、ネギ先生？」

「どうしたんですか？」

「アリサさんはどうなんですか？」

エヴァンジェリンさんたちに対しての話し合いが終わったあと、彼女は僕に疑問を投げかけていた。

アリサのことだ。アイツは僕よりも魔法使いの才能がない。

お父さんの才能を受け継いでいる僕とは違い、彼女は落ちこぼれだった。

魔法学校卒業間際のときには先生たちから評価されていたみたいだが、結局僕が首席だったし、そもそも魔力が少ないアイツが認められているのはおかしい。

魔力量が一般人以下ということで同じ父親を持つものとして恥ずかしく、イジメたこともあった。

魔法使いにとっては魔力量が大きな意味をなす。

だから僕はアイツのことを見下していた。

「あのネギ先生？」

どうやら、考えこんでいたようだ。いいんちょさんが心配してくれる。

「アリサは魔法使いとして落ちこぼれですから、このことで頼れないんです。

それにここにいるのは修行のためですから、いくら妹でも頼ることは許されないんですよ」

修行だから頼れないというのは嘘だ。

そんなルールがあるわけではない。

ただ、僕があんな奴に力を借りるなんてことが嫌なだけだ。

「……そうですか」

いいんちょさんは悲しげな表情をしていたが、なんでそんな表情をしているのかがわからない。

兄妹なのに協力できないことか、それともアイツに対する同情か。

後者であれば、そんなことは気にする必要はない。

「だから、いいんちょさん頼りにしてますよ」

彼女を切り替えさせるために僕はそう言うと彼女の手を引いて、エヴァンジェリンさんたちを倒すために動き始めた。

第３２話　拒否（後書き）

執筆の時間がなかなか取れなくなってきました。

これからさらに忙しくなると思うと少し憂鬱です。

第３３話　強襲、そして……（前書き）

ここから先、一部キャラの改悪が進みます。

タグに一部キャラ改悪を追加しました。

受け付けない人はどうぞ引き返して下さい。

第３３話　強襲、そして……

私は放課後、魔法使いのことが知りたくなったので茶々丸さんに聞くために彼女を探していた。

魔法使いについて聞くのに高畑先生は一般人を襲ったことを容認した時点で適していない。

かといってネギに聞くには、信用ができなかった。

だから、あのとき学園長室に連れていってくれた茶々丸さんかエヴァちゃんに聞こうとしたのだ。

二人は放課後になるとすぐに教室を出るので声をかける暇もなかった。

エヴァちゃんはその雰囲気から少し話しかけにくいところがあるので、茶々丸さんを捜すことにする。

「神楽坂かどうしたんだ？」

茶々丸さんを探して川沿いを歩いていると龍宮さんに声をかけられた。

龍宮さんはクラスメートで中学生らしからぬ大人びた雰囲気とナイスバディのクールビューティーだ。

あとはくーふぇや長瀬さん、桜咲さんとともにクラスメートからは武道四天王と呼ばれている。

「ちょうどよかった。龍宮さん、茶々丸さんに逢わなかった？」

龍宮さんに茶々丸に逢っていないか聞いてみる。

「絡繰か？それならこの川沿いを歩いていたぞ」

龍宮さんはどうやら茶々丸と遭遇していたらしく、さっき逢った場所を教えてくれた。

「ありがとう龍宮さんっ」

私は龍宮さんにお礼を言うと、茶々丸さんに早く逢うために龍宮さんが教えてくれた方向に走る。

走っていくと茶々丸さんの背中が見える。

私は声をかけようとしたが、その前にある人物を見つけてしまった。

……ネギといいんちょだった。

いいんちょがネギと一緒にいることに驚いたが、いいんちょのことだネギに頼まれてそのままそれを了承したんだろう。

いいんちょとはあまり仲が良いとは言えなかったが幼なじみだ。

そのいいんちょのことを巻き込んだネギに憤りを覚える。

ネギたちは茶々丸さんを尾行しているようで、隠れながら茶々丸さんの後ろをついて行っている。

幸い二人は私のことには気づいていないようなので、私は二人が何をしようとしているのかが気になり、私も二人を尾行することにした。

茶々丸さんはネギたちの尾行には気づいておらず、二人も私の尾行に気づいていない。

茶々丸さんは川沿いを歩きながら、子どものために木に引っかかった風船を取ってあげたり、お年寄りをおぶって階段を上がったりしている。

……いい人だ。と茶々丸さんの行動に感動する。

「……神楽坂？」

「きゃっ！？」

いきなり誰かに呼びかけられたことに驚く。

大きい声を出したことでネギたちに気づかれたかと思ったが、どうやら二人は気づいていないようだ。

そのことに安心して、私に声をかけてきた人物の方を見た。

「大丈夫か？」

「た、龍宮さん」

私に声をかけてきた人物は先ほど逢った龍宮さんだった。

「何を急いでいるかと思えばストーカーか？」

「ち、違うわよ」

私は龍宮さんの言葉に思わずどもってしまうが龍宮さんの表情は笑っていて、どうやらからかわれたのだと気づく。

「しかし、ネギ先生と雪広が絡繰のことをつけているとはな……」

龍宮さんは茶々丸さんが二人に尾行されていることに不思議がっているようだ。

私は龍宮さんと一緒に茶々丸とそれを尾行している二人の後ろをついていく。

茶々丸さんが建物の裏に行くと彼女のもとに猫が集まってくる。

茶々丸さんは手に持った袋から猫缶を出すと、その蓋を開けて猫たちに餌をあげた。

その姿を見ていると凄く和んだ。

猫が餌を食べ終えて茶々丸さんから離れるとネギといいんちょが茶々丸の前に立つ。

「……こんにちわネギ先生、雪広さん」

「茶々丸さん、エヴァンジェリンさんを倒すために、まずはパートナーであるあなたを倒させてもらいます」

「絡繰さん、クラスメートであるあなたに攻撃するのはどうかと思いますが、これもネギ先生のためです。お許しください」

ネギといいんちょがそう言って、茶々丸さんと二人の戦闘が始まった。

「行きます!!契約執行３０秒間!!ネギの従者“雪広あやか”!!!」

ネギが呪文を唱えると茶々丸さんに向かって踏み込んだいいんちょの動きが急に速くなる。

ネギが唱えた魔法の効果だろう。

いいんちょが茶々丸さんに攻撃している。その間にネギは呪文を唱えていた。

私は茶々丸さんを襲った二人を止めるために建物の陰から飛び出した。

「“魔法の射手・連弾・光の１１矢”」

それと同時にネギの魔法が発動して茶々丸さんを襲った。

それを見た私は茶々丸を押し倒して、ネギの魔法から庇う。

魔法はさっき茶々丸さんがいたところに着弾して地面を吹き飛ばした。

その余波で小石などが飛んできて茶々丸の上に覆い被さった私を傷つける。

「神楽坂!?」

「神楽坂さん!?」

「アスナさん!?」

龍宮さんや茶々丸さん、そしていいんちょの声が聞こえたが、私は襲ってきた魔法の衝撃に意識を失った。

◇

私はネギ先生たちと戦闘になった。

昨日、学園長室で話していた内容から察するにネギ先生は先に二人がかりで私を倒しに来たようだ。

ネギ先生と戦闘に入ると雪広さんに魔力供給がされ、雪広さんのスピードが速くなった。

どうやら、雪広さんはネギ先生を仮契約を結んだようだ。

雪広さんは武術を嗜んでいるようで、その動きはとても素人とは思えない。

雪広さんの攻撃を捌いていると、ネギ先生が魔法を放ってきた。

私は雪広さんの攻撃にネギ先生の放った魔法に反応するのが遅れた。
魔法が目の前に近づいてくる。回避は間に合わないとその攻撃に抵抗せず、受けようとした。
しかし、誰かが私を突き飛ばしそのまま覆い被さる。
魔法は先ほどまでいた場所に着弾しその余波が私たちを襲った。
私は起き上がって自分を助けてくれた人を見ると、その人は神楽坂さんだった。
神楽坂さんは魔法の衝撃で飛んできた小石に傷つけられたのか怪我をしている。
「神楽坂!?」
「神楽坂さん!?」
「アスナさん!?」
いつの間にか龍宮さんが現れ神楽坂さんに駆け寄る。
雪広さんも神楽坂さんが突然現れたことと傷ついていることに驚いているようだ。
しかし、一人だけ様子が違う人物がいた。
……ネギ先生だ。

ネギ先生は俯いて何かを呟いている。

「……ない」

その声は小さくて聞き取れない。

「ね、ネギ先生？」

雪広さんが心配そうにネギ先生に近づく。

「僕は悪くない！！」

ネギ先生はそう言って、その場から走って逃げていった。

「ネギ先生！！」

雪広さんはこちらを心配そうにチラチラと見ている。

「彼を追いかけろ！！あの状態だと何が起こるかわからないぞ」

龍宮さんが叫ぶと雪広さんはアスナさんを見ながらもネギ先生のことを追いかけていった。

そちらの方は放っておき、アスナさんの様子をみる。

どうやら、小石などで少し傷を負ったようだがそれほど重傷というわけではない。

私はアスナさんを治療するために彼女を図書館島へと連れていくこ

とにした。

マスターの家には基本的に傷を治療するための道具がないし、今、マスターは図書館島にいた。

それに彼方には浅葱さんがいるため治療を任せることができる。

「大丈夫なのか？」

「はい、重傷というわけではありません」

龍宮さんが心配そうにアスナさんを見ている。

私は懐から転移魔法符を取り出す。

そして、周囲を見渡して誰もいないことを確認すると転移魔法符を発動して、二人を連れて図書館島に転移した。

「茶々丸さんって、アスナ！？」

「木乃香さん、すみませんが彼女の治療をお願いします」

「うん、わかった」

図書館島に転移すると木乃香さんが駆け寄ったくる。

神楽坂さんの姿を見て驚いていたが治療を頼む。

木乃香さんはアスナさんの姿に心配したのかすぐに治療をしてくれた。

治療が終わった神楽坂さんを着替えさせてベッドに寝かせると、他の皆さんも集まってきた。

「何があったんですか？」

相坂さんが説明を要求してきた。

「実はですね……」

私は先ほど起こったことを説明する。足りないところは龍宮さんが説明してくれた。

ただし、なぜ私のことを捜していたのかはわからないので、それは神楽坂さんが起きてから説明してもらうことにする。

皆さんは私の話しを聞くとネギ先生への怒りを露わにした。

「自分の生徒を傷つけておいて、その場から逃げるって最低じゃん！！」

「しかも、自分は悪くないって言ったんだろ」

裕奈さんと千雨さんがネギ先生に対して怒りの言葉を吐いた。

それに皆さんも同意している。

「取りあえずはアスナが起きるのを待とうか？ウチが看取るから安

心してええよ」

木乃香さんがアスナさんの傍にいるということなので、一旦皆さんと部屋の外に出た。

そのまま、神楽坂さんが起きるのをみんなで待つことにした。

◇

絡繰さんを倒そうと放った魔法はアスナさんが茶々丸さんを庇ったせいで外れてしまい、それどころかアスナさんを傷つけてしまった。

自分が人を傷つけたことに気が動転してしまい、そこから逃げ出したがよくよく考えてみれば、悪い魔法使いの従者を庇ったのだから傷ついて当然なのだ。

だから、悪いのは僕ではなく、絡繰さんを庇ったアスナさんに責任がある。

「ネギ先生!!」

後ろからいいんちょさんが追いかけてくれた。

どうやら、いいんちょさんも邪魔をしたアスナさんより僕を優先してくれたようだ。

「ネギ先生、アスナさんに謝りに行きましょう」

「えっ？」

僕は彼女が言う言葉を理解できなかった。

「どうしてですか？」

どうして僕が謝らないといけないんだろう。怪我をしたのはアスナさんの自業自得なのに……

「アスナさんに怪我を負わせたのは私たちが原因です。だから、謝るのは当然でしょう」

いいんちょさんは原因は僕たちにあると言った。元を辿れば悪いのはエヴァンジェリンさんや絡繰さんのハズだ。

彼女たちがいなければ、アスナさんが怪我をすることもなかっただろう。

それでも、僕たちが悪いと言ういいんちょさんに僕は不機嫌になる。

「イヤです。だって僕は悪くありませんから」

「わかりました。そんなに言うなら仕方がありませんわね。今回は私だけでも謝っておきますわ」

いいんちょさんはそう言うと僕の手を引いて途中まで一緒に帰った。

別れ際、彼女はこう言った。

「私はこれからもネギ先生のお力になりたいと思っていますわ。ただ、無関係な人は巻き込まないようにしてくださいね」

どうやらいいんちょさんは僕のことを手伝ってくれる気はあるようだ。

アスナさんは魔法のことについて知っているから無関係ではないだろう。

「はい、ありがとうございます」

いいんちょさんに僕は笑顔で返しておいた。

第３３話　強襲、そして……（後書き）

自分の描写力の拙さに落ち込みます。

まだまだ未熟な作者ですがこれからもよろしくお願いします。

クリスマス番外編　それは聖夜の出来事（前書き）

皆さん、メリークリスマス

というわけで、クリスマス番外編の投稿です

クリスマス番外編　それは聖夜の出来事

空から雪が降っている。

今日はクリスマス・イヴ、一年の中で最も多くの人間が楽しめるであろう日だ。

個人を祝うだけの誕生日やチョコレートを贈るだけのバレンタインとは違い、家族や恋人もしくは友人たちと楽しむことができる。

今も世界中でたくさんの人たちがパーティーを開いたり、大切な人と一緒にいることだろう。

……まあ、独り身の人もいるんだろうけど。

俺も言わずもがな裕奈たちと今日はクリスマスパーティーを行う予定だ。

最初は図書館島でクリスマスパーティーをしようとみんなで言っていたが、裕奈たちのクラスメートや俺のクラスメートたちも集まるということになり、流石に図書館島はマズいので場所を変えたのだ。

場所の問題ということもあり、最初はどこかの店でやろうかと話していたが、まだ中学生なのであまり遅くまで店で騒ぐことができない。

すると明石さんが俺にこちらでの実家だった場所の鍵を渡してくれた。

こちらでの俺が元々暮らしていた家。

明石さんたちと暮らし始めてからもちょくちょくここには帰っていた。

俺が中学に入ってからも、書斎にある魔法書などを取りに来たり、あまり汚くならないように掃除に来たりしていた。

水道やガスなどは使えないが、明石さんがずっと管理してくれていたのだ。

ここならかなりの広さがあるので、２０人程度であれば少々騒いでも問題ないだろう。

料理などは裕奈や木乃香が作って持ってきてくれるらしいので、俺は飲み物などの買い出しに行っていた。

すでに朝早くから俺のクラスメートたちだけではなく、裕奈たち運動部４人組や図書館島探検部などのメンバーが来て掃除や飾り付けなどを行ってくれている。

俺は家主なので率先して働こうと思ったが、場所の提供をしたのでやらなくていいと言われ、みんなからお金を渡され買い出しを頼まれたのだ。

家を空けるのはどうかと思ったが早乙女以外は常識人が揃っていると思うので何かあれば止めてくれるだろう。

買い物に向かおうとすると前から女の子が歩いてくる。

神楽坂明日菜だ。

明日菜とは木乃香との関係で何度か会ったことがある。

「明日菜」

「あっ、涼。今から買い出し？なら私も手伝うわよ」

明日菜に声をかけると、彼女は俺が買い出しに行こうとしていることを悟ったのか一緒に買い出しに付き合ってくれるらしい。

「確かに買い出しだけど、寒いし中に入ったらどう？」

「でも一人で買い出しに行かせるのも悪いから付き合うわよ」

雪が降っているなか、女の子に買い出しを付き合わせるのは悪い気がするので、家に入るように促すが明日菜は譲らず俺と一緒に買い出しへと行ってくれる。

明日菜を見ると彼女はコートは着ているもののスカートなので足は寒そうだし、マフラーもしていない。

俺は自分のマフラーを外して、さらにコートのポケットに入ってあるカイロを取り出すとそれらを明日菜に渡す。

「ほら、寒いだろ」

「あ、うん。ありがとう」

明日菜は戸惑いながらも受け取り、それらを身につける。

渡すときに触れた手はかなり冷たかった。

明日菜はカイロを両手でこすりあわせて冷えた手を温める。

飲み物やお菓子、ケーキなどを買い家へと戻る。

店を出て、道を歩いていると子どもがケーキを持って走っているのが見える。

「あっ」

クリスマスなので俺たちのように買い出しに着ている人やデートしているカップルなど、人がたくさんおり、その子どもは人にぶつかるとケーキの箱を落としてしまう。

俺たちはそれを見ると子どもに近づいて声をかける。

「大丈夫?」

「うん、でもケーキが……」

ケーキの箱が落ちたことで中に入っていたケーキはクリームなどがぐちゃぐちゃになっている。

子どもはケーキを見て、今にも泣き出しそうな表情をしていた。

俺は自分の持っていたケーキを子どもへと差し出す。

「ほら、お兄ちゃんの持ってるケーキをやるから泣くな」

「えっ？」

子どもはいきなり目の前に差し出されたケーキの箱に戸惑った声を上げる。

「このケーキを持って帰っていいよ。だから泣くのは我慢しろ」

そう言って俺はその子どもにケーキの箱を抱えさせた。

「それと人が多いから走ったりしないこと、わかったかな？」

「う、うん」

「じゃあ、気をつけて帰れよ」

「あ、ありがとう。お兄ちゃん」

子どもの頭を撫でて帰るように言うと、子どもはお礼を言いながら帰っていく。

途中、何度も振り返っていたけど大丈夫かな～。

「優しいんだ」

明日菜は俺に向かって笑顔で言うと子どもの落としたケーキの箱を拾い上げる。

「あ～、まあ……ね」

明日菜の褒め言葉に俺は照れる。

こうやって、女の子から褒められるのは何か気恥ずかしいものがある。

「ケーキ、もう一度買いに行こうか」

俺はそれを誤魔化すようにもう一度店の中へと向かった。

ケーキはみんなの出したお金ではなく、自分の財布から支払う。

「こっちのケーキはどうするの？」

明日菜は子どもの落としたケーキを持ちながら聞いてきた。

「形が崩れただけだし、食べるのには問題ないよ。まあ、それが嫌なら俺が後で食べるし」

「そうね、みんなも話せばわかってくれるわよ」

そう言って俺たちはようやく家へと戻り始める。

家に戻るとすでにパーティーの準備は整っており、みんなも来ていた。

ケーキについては説明するとみんなは気にせずにテーブルへと並べてくれる。

そしてパーティーが始まった。

男女関係なくみんなが好きに騒いでいて、パーティーは楽しく過ぎていく。

パーティーも終盤が近づき、俺はみんなにプレゼントを配る。

今回、みんなでパーティーをするということで各自プレゼントは自由ということにしていた。

ただ、俺はこうやって集まってくれたみんなにプレゼントを渡したかったのでプレゼントを用意した。

個別には用意していないが男用と女用は分けて用意した。

男には様々な色のマフラーを用意し、女には簡単な銀細工のアクセサリーだ。

どちらにも簡単な運気上昇の術式を刻んでおり、一定期間ちょっとした幸運に恵まれるという効果だ。

俺がプレゼントを渡すとみんなもプレゼントを渡し始めた。

と言っても基本は同性同士での交換だ。

まあ、お互いを知らないので無理はない。

それに麻帆良は共学ではないので何かの部活やサークルなどに入らないと男女の出会う機会は少ない。

このクリスマスパーティーを開くと言ったとき、男連中は喜んで参加してきた。

でもこの場を見ると男女関係なく楽しく騒いでいる。

のどかも男性が苦手ではあるが、男連中もそれに気づいているのか上手く話しかけたりと、それなりに話しているようだ。

パーティーが終わり、片付けに入る。

ゴミなどはみんなが片付けてくれて、食器などは木乃香たちが持って帰ってくれた。

俺は最後に床やテーブルを拭くと戸締まりを確認する。

しかし、この家のことが気になったので書斎へと向かった。

こちらの世界での俺たち家族が暮らしていた家。

元いた世界の家のことはもうあまり思い出せないが、ここに来ると元いた世界のことを思い出す。

正直まだ、割り切ることはできていない。

こちらはこちらで充実した生活を送っているが、もし向こうでそのまま生きていたらという未練も感じるし、家族という存在にも飢えていた。

明石さんたちとも家族のつもりであるが、やはり血の繋がりはないし、元々他人ということもあり無条件で安心することができない。

だから、俺は自分の家族というものへの飢えがある。

……その結果が裕奈たち複数人との交際であるのは笑えないが。

窓から外を見ると雪はまだ降り続いている。

「涼……？」

窓の外を見つつ感傷に浸っていると後ろから声がかけられた。

扉の方を見るとそこには明日菜が立っている。

「……明日菜」

「どうしたの？涼、泣いてたみたいだけど」

明日菜に言われ頬に手をやると確かに涙で濡れていた。

どうやらそんなことにも気づかなかったぐらい、感傷に浸っていたみたいだ。

「まあ、ちょっとね。……家族のことを考えてた」

「……ゴメン」

明日菜は俺の家族が事故で死んでいることは知っている。

それを言わせようとしたのに罪悪感を感じたのか謝ってくる。

「気にしなくていいよ。昔のことだし、ある程度は割り切ってるから」

「……うん。でもそうやって家族を思い出してあげる涼はえらいと思うわよ。

私は家族もいないし、家族の顔も覚えてない、それに思い出も残ってないから」

明日菜はかなり辛い内容だが割りとあっさりと言う。

「辛くないのか？」

「みんなもいるし、辛くはないわよ。ただ、家族とか見てると羨ましく思うときはあるけどね」

そう言った明日菜の顔は苦笑いではあるが、ちゃんと家族がいないことを受け入れているようだ。

そんな明日菜のことが羨ましいと思いながらも、こうやって悩んでいるのは自分だからだと割り切る。

家族のことはそう簡単に割り切ることはできない。

ただ、ここで生活していく以上はちゃんと前を向いて生きていこう。

そう思った。

「明日菜」

「なに？」

「ありがとう」

俺は明日菜にお礼を言う。

明日菜はどうしてお礼を言われたのかわからないようだが、すぐに笑顔に変わる。

「どういたしまして」

「もし、何かあったら頼ってくれていいから」

「うん、そのときはよろしくね」

俺はそう言うと部屋から出て、ブレーカーを落とすと明日菜を連れて家を出た。

外は雪が降っているので寒かったが、俺にはその光景が少し暖かく感じた。

「そういえば、なんでお前戻ってきたの？」

「……パルから貰ったプレゼントを忘れたのよ」

「ちなみに中身は？」

「……パルの書いた同人誌。ちなみに私とこのかの百合だったわ」

そう言った明日菜の表情はげんなりしていた。

そんなプレゼントでも取りに戻ってくる明日菜は偉いと思う。

クリスマス番外編　それは聖夜の出来事（後書き）

皆さん、クリスマスをいかがお過ごしですか？

作者は友人たちとカラオケで盛り上がったあと、クリスマスパーティーをする予定です。

皆さんもクリスマスを楽しんでくださいね。

第３４話　最近主人公の出番なくね？（前書き）

というわけでクリスマスですが投稿予定日なので投稿します。

本当に予約投稿は便利なものだと感じました。

第３４話　最近主人公の出番なくね？

「ん……ここは？」

私が目を覚ますと私は見知らぬ部屋のベッドで寝かされていた。

「よかった、アスナ目を覚ましたんやね」

ベッドの傍らにはこのかがいて、私を心配そうに覗き込んでくる。

「うん……そうだっ、茶々丸さんはっ！？」

私はベッドから起き上がると先ほど起こったことを思い出し、茶々丸さんのことをこのかに聞いた。

「あ、茶々丸さんやったら「失礼するぞ」ってエヴァちゃん……」

このかが茶々丸さんのことを教えてくれようとしたそのとき、部屋の中にエヴァちゃんが入ってくる。その傍には付き従うように茶々丸さんもいた。

「茶々丸さんっ、大丈夫なの？」

「はい、神楽坂さんのお陰で助かりました。ありがとうございます」

茶々丸さんは怪我などはなかったようで、私に深く頭を下げてお礼を言ってくれる。

「よかった～」

私は茶々丸さんに怪我がなかったことに安心した。

「神楽坂明日菜、私の従者を助けてくれたことに感謝する」

エヴァちゃんも私に頭を下げてくれる。

普段、尊大な態度で話しかけづらいエヴァちゃんがこんな風に頭を下げてくるのには驚いたが、それだけ茶々丸さんのことを大事に思っているのだろう。

「そんな、頭まで下げなくてもいいのに」

こうやってかしこまって二人に感謝されるとこっちが恐縮してしまう。

「ネギ先生の魔法が直撃していれば、私も重傷などではすまなかったでしょう」

「ああ、お前が助けに入ったからこそ茶々丸は無事でいられる。人を助けたのだ。礼くらいは素直に受けっておけ。それに私が力になれることがあれば、一度くらいはお前に力を貸すことぐらいはしよう」

「私も神楽坂さんに助けていただいたので、できる限りのお礼をさせていただきたいです」

二人はそう言って私に何か願いがないか聞いてきた。

私はその言葉に焦る。このかがいる前で魔法のことを言ったことだ。

「ちょっ、このかがいる前で……」

「ウチは魔法のこと知っとるよ」

魔法のことを話すなんて、と言おうとするとその言葉が他ならぬこのかによって遮られた。

「えっ？」

「隠しとってゴメンな。ウチも魔法使いなんよ～」

このかはそう言って、指の先から火を出した。

このかが魔法使いだったことや一緒の部屋に暮らしていて、そんな素振りすら見せなかったことに驚きを隠せない。

「ええ～～～っ！！！」

思わず叫んでしまうほど驚いた。

「アスナ、隠しとってゴメンな」

このかはすまなさそうに私に謝ってくる。

「気にしなくていーわよ。魔法は隠さないといけないんでしょ」

確かに親友に隠し事をされていたことに何も思わないわけではないが、魔法の隠匿については聞かされていたため、仕方ないことかと

納得した。

エヴァちゃんたちにもついでに言っておく。

「エヴァちゃんたちも私はクラスメートを助けるために行動したの。見返りを求めるために茶々丸さんを助けたんじゃないわ」

「しかし……」

「それにエヴァちゃんが昨日学園長室まで連れていってくれなかったら、私が茶々丸さんを襲ってたかもしれないし……」

もし、あのとき学園長とエヴァちゃんの会話を聞いてなかったらと思うと怖くなる。

「まあ、困ったときには頼ればいい」

エヴァちゃんはそれだけ言い残すと部屋から出て行く。

「それでは失礼します」

茶々丸さんも丁寧にお辞儀をすると部屋から出て行った。

私はそれを見送ると服を着替える。

「アスナ～～大丈夫～～」

そのとき部屋の中に複数の人が入ってくる。

私は入ってきた人たちに驚いた。

「ゆーな！さよちゃん！超りん！長谷川さん！桜咲さん！」

「おいおい、私もいるぞ」

「龍宮さんまで……」

そこにいたのは私のクラスメートだった。

龍宮さんは私と一緒にいたから、ここにいるのはわかる。

しかし、他のみんながここにいる理由がわからなかった。

「なんでみんなが……」

「あはは、私たちも魔法関係者なんだよね」

ゆーながあっさりと自分たちが魔法関係者であることをバラす。

私は彼女たちも魔法関係者であることに驚いた。

「まさか、クラスメートにこんなに魔法関係者がいたなんて」

私は頭を抱えたくなったが、深く深呼吸をして自分を落ち着かせた。

それからはみんなと魔法のことについて色々教えてもらった。

そのとき自分の傷を治療したのがこのかだと聞いて、このかにお礼を言う。

「アスナはこれからどうするん？」

不意にこのかがそんなことを聞いてくる。

「えっ？なんのこと？」

「今回のことで魔法に危険な一面があるってことはわかっただろ。それでも、まだ関わっていくつもりか？」

聞き返した私に長谷川さんが説明してくれる。

「もちろん関わるわよ。みんなも関わっているのに私だけ仲間外れなんてイヤよ」

私は即答した。

確かに痛い目にはあったが、このまま関わっていかなかったら後悔する気がした。

それにそう言った長谷川さんたちだってこの世界に関わっているのだ。

これで私だけ関わらないという選択肢はなかった。

「そっか、ならよろしくね」

ゆーなが笑顔で返してくれる。周りを見てみるとみんな笑顔だった。

「うんっ、よろしく！！」

こうして私はこの世界に関わっていくことを決めた。

次の日、私が教室に入るといいんちょが近づいてくる。
昨日あったことが頭によぎり思わず身構えてしまう。
するといいんちょは勢いよく頭を下げてきた。

「アスナさん、昨日はすみませんでしたわ」

いいんちょが謝ってきたことに一瞬驚く。

「私たちがあなたを巻き込み怪我を負わしてしまったことは本当に申し訳ないと思っていますわ」

そう言っていいんちょはもう一度頭を下げた。

私はいいんちょに学園長たちが言ってたことを教えようと思ったが、周りに人がいるため教えることができない。

「アスナさん、ネギ先生はあれでもお父様のことに必死なのです。

エヴァンジェリンさんはネギ先生のお父様について知っているようなので、これからは決して邪魔などしないでくださいね」

私はエヴァンジェリンさんがネギのお父さんのことを知っているのに驚いた。

前に一度、ネギからお父さんのことを聞かされてアイツが父親のことを探しているのを知っていたからだ。

いいんちょはそのまま私から離れる。

いいんちょの目は本気だった。

本気でネギのために力を貸そうとしているのだろう。

いいんちょが弟を亡くしたのは知っている。

それゆえ、小さい子どもを大事にしていることも……

私はそんないいんちょに何も言うことはできなかった。

放課後になると私のところに来る人がいた。

ネギの妹のアリサちゃんだ。

彼女はネギとは違いしっかりしていて、クラスのみんなとも仲良くしている。

ただし、兄妹なのにネギと仲良くしているところは見たことがなかった。

「神楽坂さん、昨日兄が迷惑をかけたようですみませんでした」

アリサちゃんはネギの代わりに謝ってくる。

「アレは甘やかされて育っています。どうせ、神楽坂さんにも謝罪をしていないのでしょう？」

彼女はネギに対する嫌悪感を隠そうとはしなかった。

どうやら本気でこの兄妹は仲が悪いようだ。

「アリサちゃんが謝る必要はないわよ。悪いのはアイツなんだし……」

「そうですか」

アリサちゃんは嬉しそうな表情に変わった。どうやらネギのために謝るのはイヤだったらしい。

「それでは、一緒に行きましょうか」

アリサちゃんが誘ってくる。昨日はいなかったようだが、彼女もこのかたちと一緒に図書館島で修行をしているらしかった。

彼女の場合、エヴァちゃんに教えられているみたいだが……

私はエヴァちゃんにネギのお父さんのことで聞きたいことがあったのでアリサちゃんと一緒に図書館島へと向かった。

◇

僕は放課後になると学園長室に呼ばれた。

「失礼します」

「ネギ君か、急に呼びだしてスマンかったのう」

学園長室に入るとそこには学園長ともう一人、金色の長い髪を持った女の人がいた。

彼女はウルスラの制服を着ており、どうやら高等部の生徒らしい。

「ああ、彼女のことを紹介しよう。高音・D・グッドマン、見ての通りウルスラの生徒じゃよ」

「ネギ先生ですね。高音・D・グッドマンです。お父様の高名は聞き及んでいますわ」

「ネギ・スプリングフィールドです」

彼女から手を差し出されたのでこちらも手を差し出して握手する。

「彼女にはネギ君のサポートを務めてもらうつもりじゃ」

「ネギ先生、あの悪の魔法使いである闇の福音を倒すためにお手伝いさせていただきます」

高音さんは自信ありげにこちらに言ってくる。

僕はエヴァンジェリンさんに対抗するための味方が増えたことに喜んだ。

「よろしくお願いします！！」

「任せてください。私がいればいくら闇の福音であろうと倒すことは可能です」

「ふぉふぉふぉ、じゃあよろしく頼んだぞ」

こうして僕に新しい仲間が増えエヴァンジェリンさんとの対決を迎えることになる。

第３４話　最近主人公の出番なくね？（後書き）

全然文章が上手く書けていないと落ち込む毎日です。

本当に文才と時間をサンタにプレゼントしてもらいたいです。

第３５話　決着（前書き）

今年最後の投稿です。

とりあえず吸血鬼騒動編は終わりです。

なんとかここまで投稿することができてよかったです。

第35話　決着

図書館島でいつものようにアリサを鍛えていると神楽坂明日菜がやってきた。

「エヴァちゃん。ちょっといいかな？」

「なんだ？」

ちょうどアリサとの模擬戦を終えてアリサが治療を受けているため、時間があったのでコイツの質問に答える。

「ネギのお父さんについて知ってるって本当？」

神楽坂はナギのことについて聞いてきた。

「確かに知っているが、大した情報は持っていないぞ。せいぜい今も生きているということぐらいだな……」

「そうなんだ……エヴァちゃんって、ネギのお父さんとどういう関係だったの？」

私の答えにコイツはがっかりした表情を浮かべるが、すぐにもう一度質問をしてくる。

「私を麻帆良に封印したのがぼーやの父親だ。まあ、すでに封印は解けているし特に思うところもないがな……」

自分の失敗談を話すのは少し恥ずかしいところではあるが、誰かに聞けばわかることなので素直に話す。

「でも、封印されてたんでしょ？」

「ああ、といってもほんの数年ぐらいだ。それに麻帆良に来てからはそれなりに楽しく過ごさせてもらってるよ」

そう、封印されていたときは何で学生をしなければならないのかとナギに対する怒りも感じたし、予定通りに封印を解きに来なかったことに対して憎しみも抱いた。

今はそれほど思うところはない。

涼たちのお陰である。

私の封印を解いた浅葱、私たちの最高の弟子である涼、私の弟子であるアリサ、私の従者である茶々丸、そして近衛や明石のような仲間達。

コイツらがいることで私の人生は今までの中で一番充実していた。

それこそ、過去の不幸などどうでもいいぐらいに……

私の犯してきた罪は消えないだろうし、いつまでこの状況が続くかもわからない。それでも私を満たすのには充分だった。

「それでさ、もしネギがお父さんについて知りたいって言ってきたらどうする？」

神楽坂はそんなことを聞いてきた。

コイツはなんだかんだいっても優しい人間だ。あんな事があってもぼーやのことについて考えているようだ。

「さっきも言った通り、ぼーやの父親のことについて私が知っていることは少ない。今のアイツは行方不明だ。

それに昔のことについてであればタカミチに聞けばいいだけの話しだろう」

「高畑先生に？」

「ああ、アイツはぼーやの父親の仲間だからな」

私がナギについて知っていることは少ない。

大戦の真実はともかく、大戦時の行動であればタカミチだけでも十分だろう。

私はぼーやに真実を伝える必要はないと思っていた。

伝えたところであの性格だと反発するだけだろう。

「そうなんだ。知らなかった……」

神楽坂はどうやらタカミチとぼーやの関係は詳しく知らなかったようだ。

「マスター」

神楽坂と会話をしていると茶々丸が話しかけてくる。

「どうした？」

「雪広さんから果たし状を預かりました」

茶々丸はそう言って果たし状を私に手渡してくれる。

私はそれを受け取ると、折りたたまれた紙を開き中身を見た。

要約すると、そこには次の満月の夜に私達と決着をつけようといった内容が書かれていた。

「エヴァちゃん、果たし状って？」

「ああ、向こうから決着をつけたいと望んできた。こうやってわざわざ渡してきた以上はこちらも受けないわけにはいかないな」

果たし状の中には茶々丸を奇襲したことに対する謝罪も書かれていた。

私はわざわざ果たし状を送ってきた雪広に感心した。

これが送られていなければ、私から奴らを襲ったことだろう。

果たし状を出された以上、こちらはそれを受ける必要があった。

そこらの三流であれば関係ないと言うだろうが、私には私の誇りがある。

そして私は決戦の日を待った。

◇

満月の夜を迎え私は果たし状に書かれてあった場所へと向かう。

呼び出された場所に到着するとそこにはすでに相手が到着している。

しかし、私が想定していないことが起こった。

呼び出された場所には三人いたのだ。

私はてっきりぼーやと雪広だけかと思っていたが、あのぼーやはさらに一人味方を増やしたようだ。

新しく出てきた人物には見覚えがある。

確か、ウルスラの生徒で影を扱う魔法を使っていた奴だ。

昔、なぜ闇の福音が麻帆良にいるのかと絡まれたことがある。

まあ、軽くあしらったが……

「エヴァンジェリンさん、悪の魔法使いであり僕の生徒を襲ったあなたを倒させてもらいます」

「闇の福音、昔はあなたにあしらわれましたが、あのときとは違い

ます。覚悟しなさい」

「ネギ先生のお父様のことについて聞かせていただきますわ」

彼らはそれぞれにそう言ってこちらへと攻撃を開始する。

こうして戦闘が始まった。

影使いと雪広が接近して攻撃を行い時間を稼ぎ、その間にぼーやが魔法を唱える。

なかなか、いいパーティーではないか。

三人の攻撃を捌きながら評価を下す。

三人はパーティーとしてバランスがとれており、こちらも陣形を崩すのに苦戦する。

今、ここには茶々丸がいない。

明石父からの情報によるとぼーやが不利になった場合、学園長はこの戦闘に介入するつもりのようだ。

茶々丸にはその対策へと向かってもらった。

超に頼もうかとも思ったのだが、奴に頼むと見返りを求められる気がするので茶々丸に任せたのだ。

明石父が言うには、ハイテクによる私の力を抑える封印の強化らしい。

私はそのあたりには疎いので任せるしか方法はなかった。

昔、ナギの呪いが解かれたときに学園長と交渉したお陰で私の封印は緩んでいる。

なので力が封印されているとはいえ、今の私の力量は三人を相手するには充分だった。

これが浅葱達の知識のように、ナギに封印をかけられたままであったら負けていた可能性もある。

「くっ、このぉ！！」

影使いの女が攻撃が当たらないことに焦れたのか、少々強引に攻撃を放ってきた。

私はそれを受け流すと懐に潜り込む、ゼロ距離からの魔法の射手を放った。

「きゃあっ！！」

影使いの女は悲鳴をあげるとそのまま気絶する。

「高音さん！？」

ぼーやが驚きの声をあげて、影使いの女の心配をしている。

私はその隙を狙ってぼーやを倒そうとしたが、雪広が私を抑えている。

私は雪広の技量に感心した。

いくらぼーやから魔力供給を得ているとはいえ、私を近接戦闘で抑えるとは予想外だった。

「エヴァちゃん！！」

大声を出して私たちの戦闘に介入してきた者がいた。

私たちはその声の主の方へ向く。そこには神楽坂明日菜がいた。

「アスナさん……」

雪広は私への攻撃をやめ神楽坂と対峙している。

神楽坂を見ると、私にこちらは自分に任せてと目で合図を送ってくる。

私は雪広の相手を神楽坂に任せてぼーやへと向かった。

ぼーやは私を迎撃するために魔法を放ってくるが、その魔法が障壁を破ることはない。

「くっ！？」

私がぼーやに攻撃をしようとすると身体から力が抜ける。おそらくこれが学園長の妨害なのだろう。

しかし、それはすぐになくなった。どうやら茶々丸が対応してくれ

たのだろう。

私はそのままぼーやに一撃をいれると、気絶したのを確認して神楽坂と雪広を見に行った。

◇

今、私はいいんちょと対峙している。

好みが合わずケンカをしたことはこれまでもたくさんあったが、こうやって対峙したのは始めてだ。

「アスナさん。エヴァンジェリンさんの味方をするのですか？」

「うん、エヴァちゃんは何も悪いことしてないから」

そう言った瞬間、いいんちょが踏み込んでくる。

その速度は私が知っているよりも遥かに速い。

これが魔力供給によって強化されるということなのかと私は驚いた。

「っ！！」

なんとか反応してギリギリで回避する。

いいんちょはそのまま連続で攻撃してくるので、私は反撃する暇もない。

「エヴァンジェリンさんはクラスメートを襲ったんですのよ！！」

いいんちょはそう言って攻撃を続ける。

そうか、いいんちょは桜通りの吸血鬼がエヴァちゃんと思っているようだ。

「それは違う！！エヴァちゃんは犯人じゃない！！」

「あなたは犯人を知っているんですの？」

いいんちょは攻撃をやめて私から少し離れた。

どうやら私の話しを聞こうとしてくれているらしい。

正直助かった。流石にあのままではジリ貧どころかこちらが負けていただろう。

「本屋ちゃんやまきちゃんを襲ったのは学園長の使い魔よ。私は学園長が話していたのを聞いたから間違いないわ」

「なっ！？」

いいんちょは驚いている。自分が聞いていた内容と違うのだろう。

「ねえ、いいんちょ。もうやめにしない。こんなことしても意味ないよ」

私がいいんちょを説得しようとすると、いいんちょはこちらを睨ん

でくる。

「確かに嘘は言っていないようですね。しかし、無駄などではありませんっ！！」

いいんちょはまた踏み込んできて攻撃を仕掛けてきた。

「っ！？どうして……」

「ネギ先生はお父様を捜すために頑張っています。その情報をエヴァンジェリンさんが持っているのです。それを聞くためにも私たちは負けられません！！」

いいんちょの攻撃はどんどん苛烈になってくる。

もうダメだと思ったそのとき、急にいいんちょのスピードが落ちた。

「ネギ先生！？」

どうやらエヴァちゃんがネギを倒してくれたお陰でいいんちょへの魔力供給がなくなったようだ。

私はいいんちょを蹴って、距離を離させた。

「エヴァちゃんが勝ったみたいね」

「まだです！！まだ終わっていませんわ！！」

「ねえいいんちょ、なんでそんなにネギの力になろうとするの？」

ネギが敗北してもまだ戦闘を続けようとするいいんちょに質問を投げかける。

「だって可哀想ではありませんか。ご両親がおらず、まだ小さいのに父親を捜すために必死で頑張っているネギ先生を手伝おうとするのがそんなにおかしいですか！！」

いいんちょの表情は本気だった。

いいんちょは幼いころに弟を亡くしている。

ネギが父親を捜すのに頑張っているのも聞いていた。

必死で頑張っているネギのためにいいんちょが手伝おうとするのはわかるが、私はネギがまともな性格をしているとは思わず手伝う気にはなれなかった。

これまで迷惑をかけられたことや妹からも嫌われているのであまり良い印象を持っていない。

「そうだな」

私たちの会話に割り込んできた人がいた。……エヴァちゃんだ。

「知っているか、あのぼーやが魔法学校にいたときに自分の妹であるアリサをイジメていたんだぞ」

「えっ？」

「嘘っ？」

私といいんちょはそのことに驚く。

ネギとアリサちゃんの仲が悪いのにはそんな理由があったなんて……

「それは事実なのですか？」

「本当ですよ」

いいんちょの言葉に返したのはいつの間にか現れたアリサちゃんだった。

「アリサさん……」

「昔の私は落ちこぼれなどと言われてましたからね。そのイジメの中の一部を兄が裏で動かしてたんですよ」

アリサちゃんの言葉にいいんちょが崩れ落ちた。

「ネギ先生がそんなことをしていたなんて……」

いいんちょは大分ショックを受けているようだ。

「まあ、今はどうでもいいんですけどね。

兄の場合、魔法の秘匿もそうですが、甘やかされて育ったので悪いことをしたら謝るとかのちゃんとした教育を叩き込まれていないんですよね」

アリサちゃんが不意にそんなことを言い出す。

「誰か兄をちゃんと教育してくれる人はいないでしょうかね？
できれば兄のために力になってくれる人がいいんですが……」

アリサちゃんの意図は私でもわかった。要するにいいんちょにネギの性格などの矯正を行って欲しいのだろう。

「それは私でも、よろしいんですの？」

「ええ、誰でも」

「なら、私が責任を持ってネギ先生を教育しますわ。だって私はネギ先生のパートナーですもの」

いいんちょはそう言ってアリサちゃんに宣言する。

「では雪広さん、お願いしますね」

そんないいんちょにアリサちゃんは笑顔で返していた。

それと同時に気が抜けたのかいいんちょが意識を失い地面に倒れた。

私もこの問題が終わったことに安心し、いいんちょとの戦いの疲れもあって意識を失った。

◇

「結果オーライか？」

「そうじゃないかな♪」

俺たちは空を飛びながら、下にいるエヴァたちを見ている。

今回のことには俺たちは関わらないつもりであった。

この時点で自分たちの知識と現実の差異がどの程度あるのかを調べるためだ。

アスナがネギとの契約を拒否し、その結果雪広あやかがネギのパートナーとなり、それに高音が加わった。

そして、俺たちが困っていた問題でもあるネギの矯正を雪広が担うことになった。

これによってもしかしたら、ネギが俺たちの計画の邪魔をしなくなるかもしれない。

そのためには、雪広に真実や計画について話さなければならないが……

まだ、未来がどうなるかはわからないが、この場は一段落した。

「あとは学園長をどうするかだな」

「そうだね♪今回のことでかなり証拠を掴んだし、ちょっと痛い目みてもらわないとね♪」

俺たちはどうやって学園長を責めるのかを話し合うのだった。

第３５話　決着（後書き）

皆さん、今年はありがとうございました。

来年も頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

では皆さん、よいお年を

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3073y/

魔法先生ネギま！？　～願い事は叶えられますか？

2011年12月28日06時28分発行